
いつかどこかで

柊ななこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

いつかどこかで

【Nコード】

N0203M

【作者名】

柊ななこ

【あらすじ】

生まれつき超能力を持つ少女、雨野しずく。

周囲には「魔女」と呼ばれ恐れられる日々。

そんな彼女はある日、一人の少年に出会う。

得体の知れない獣を倒し、少年はしずくの目の前で気を失ってしまう。

しずくは超能力を使い少年を助け、自分の家で看病することになる。

目を覚ました少年は”空”と名乗り、しずくの力を借りたいと言います。

そしてそのまま雨野家に居候することになったが、彼にはもう一人の人格があつて・・・・・・。

出会い

目を開けるとそこには見知らぬ少年がいた。

金髪碧眼の端正な顔立ち。その瞳は澄んだ水色。

ふと、空みたいだと思った。

「大丈夫？」

大きな瞳がじっとこちらを見ながら言った。

起きあがって辺りを見回してみると、どうやら私は神社の階段から落ちて気を失ったようだった。

この神社は緑が多く空気がおいしいので私のお気に入り場所だ。今日も学校の帰りに寄っていたのだ。

視線を下ろすと擦りむいた膝や肘に絆創膏が貼ってあるのが目に付いた。

「えーっと、これあなたが貼ってくれたんですか？」

「うん」

そう言うと彼は私の顔を見ながらしばらく何かを考えていた。睫毛が長いな、とぼんやり考えていると彼がまた口を開いた。

「君、どこかで会ったことある？」

なぜこんな質問をするのかと不思議に思いながら私は答えた。

「いいえ、初対面だと思いますけど。」

すると彼は私の答えに少し不満そうな顔をして、じゃあ人違いかな。と言いながらゆっくりと立ち上がった。

「じゃあ、おれはこれで。」

軽く左手をあげて彼はそのまま立ち去ろうとしたので私は慌てて

立ち上がり頭を下げた。

「あっあの、どうもありがとうございました。」

「そんな大したことでないけど、どういたしまして。気をつけて帰りなよ。」

笑顔で軽く手を振り彼は歩いて行った。

それからこの出来事は私にとって特別な出来事となった。他人からみれば些細な出来事ではあるが、生まれつき超能力を持ち、人からは「魔女」と呼ばれ恐れられる私にとっては貴重な体験であった。あの少年が普通に話しかけてくれたのは単に私の力のことを知らなかったから、ということくらいは自分でもわかっていた。

それでも、嬉しかったのだ。

目を逸らさずにちゃんと私の目を見て話してくれたから。

帰り道、私はいつになく気持ち良く大きく手を振って歩いた。あの空色の瞳を頭に描き、名前を聞いておけば良かった、そんなことを考えていた。

このときの私は自分にこれから起こることなど全く知るよしもなかったのだ。

出会い02

今日はいつもの神社で一息ついてから図書館に行った。以前から読みたいと思っていた本を探すためだ。少々手間取ってしまったが、なんとか見つけることが出来た。

予想以上に面白くて夢中になって読みふけていると、いつの間にか閉館時間になっていた。夕飯は昨日のシチューが残っているはずだから心配ないだろう。

本を借りて図書館を出ると、辺りは真っ暗だった。もう春なのに少し風が冷たい。見上げると空は厚い雲が広がっていた。雨に降られては面倒だ。早く帰ろう。

早足で夜道を歩いた。ぽつりぽつりと外灯が立っていた。辺りはいやに静かだった。

なんだか胸騒ぎがして、早く帰ろうと思った矢先、突然キーンとひどい耳鳴りがした。同時に頭もズキズキ痛みだした。

痛い。痛い。痛い。

耐えかねて石垣にもたれていると、今度は二つの黒い影がどこからともなく風のように通り過ぎていった。

なんだあれは。鳥にしては大きすぎる。

いつの間にか耳鳴りも頭痛も治まっていた。

とりあえず帰ろうと思い向き直ると、道のずっと先まで黒い斑点が連なっていた。こんなもの、ついさっきまでは確かになかったはずなのに……。

なんだろうと思って外灯の下まで行ってその点をのぞき込む。すると明かりに照らされたその点は黒ではなく、真紅の点であった。これは……血だ。誰かの、血。

気がつくとい私はその血の跡を追って走っていた。
助けなきゃ。

この血はきつと先ほど通り過ぎた影のものだ。どちらかが片方に襲われて傷を負い、逃げていたのだろうか？それとも傷を負いながら片方を追っていたのだろうか？わからない。でも、ひどい傷を負っていることは確かだ。私には何者かもわからない。

でも、助けたい。出来ることなら、助けたい。

角を曲がると一つの影が目に入った。私は少し距離をとって止まり、様子をうかがうことにした。

その黒い影は長いマントを着ていて、きよろきよろと辺りを見回していた。

すると不意に背後からもう一つ大きな影が現れて彼に襲いかかってきた。大きな三日月形の鎌を振りかざす。

危ない！

ドンッ！

私は無意識に超能力でその大きな影を吹っ飛ばしていた。

影は電柱にぶつかって地面に崩れ落ちた。カランカランと音を立てて鎌が転がった。

一呼吸おいて、間一髪で難を逃れた影がこちらに振り向く。その勢いでフードが脱げた。

「えっ!？」あまりの衝撃に私は思わず声をあげてしまった。

金髪に空色の瞳。今日の前にいるのは、あのときの少年だったのだ。

そう、神社の階段から落ちた私を助けてくれたあの少年である。

「今度はこっちが助けられちゃったな。」彼は落ち着いた声で言

った。

それから身じろぎ一つしない大きな影をじっと見つめながら私の前に出た。

「――危ないから、下がってて。」そう言って彼はマントの下から長い刀を取り出し、その刃を相手に向けた。

影はゆっくりと立ち上がった。その姿はカラスの頭に大きな黒い翼、その瞳は燃えさかる炎のような赤だった。

私は後ずさりした。

夜は驚くほど静かだった。

少年は一瞬でその獣を一突きした。

獣がギャーと悲鳴をあげると同時に黒い羽が飛び散り、その姿は跡形もなく消えてしまった。

まるでそんなものは最初から存在しなかったかのように。

ドサッ。

獣を退治し終わった瞬間、少年は地面に倒れ込んだ。

「大丈夫!？」私はしゃがみ込んで彼の体を軽く揺すった。

その体は傷だらけで、マントは血まみれだった。あの血の跡は彼のものだったのか。

どうしたら、どうしたら助けられる?この人を助けなきゃ。

まずはこの傷をなんとかしなくちゃ。出来るかどうかはわからないけれど、やるしかない。

両手を彼の腕と腹部に軽く触れ、目を閉じる。

傷よ、治れ。治れ。治れ。治れ!

目を開けると彼の頬の傷が消えていた。腕と腹部の深い傷もなくなっていた。なんとか成功したようだった。

でも彼は依然として気を失ったままで、目を覚ます気配はない。このまま放置するわけにはいかない。とりあえず安全な場所につれて行かなくては。

今度は彼の両腕をしっかりと握り、目を閉じた。移れ！

目を開けると、そこは家の玄関前だった。私は戸を開けて叫んだ。「ただいま！」そして大きく息を吸ってからもう一度叫んだ。「——かおる！ いるんだったらちよつと下来て！」すると扉が開いて閉まる音がした。

「何事？」弟が面倒くさそうに言いながら階段を下りてきた。

「道ばたで人が倒れてたから、つれて来たの。とりあえず客間に寝かすから、運ぶの手伝って。」

弟のおかげでなんとか布団に寝かすことが出来た。幸いなことに、この見知らぬ少年について弟は何も聞こうとしなかった。

目覚め

目が覚めると知らない部屋にいた。ここはどこだろう。

おれは、どうしてこんなところに居るんだ？体が痛い。でも、布団の柔らかさが心地よい。

横には一人の女の子が正座して居眠りしている。長い黒髪。

その艶やかな髪の毛を見て思い出した。

あれを退治した後、おれは倒れたんだ。彼女が、おれを助けてくれたのだろう。

枕元には水の入ったペットボトルとタオル、着替えらしきものが置いてあり、となりには皮を剥いたリンゴ。

とりあえずそれを口に運んでみた。甘い。でも爽やかな甘さだ。リンゴの汁がのどを潤してくれる。

ふと彼女に目をやると、こくりこくりとうたた寝をしている。どんな子なんだろう。

あの時は暗かったし、おれ自身の意識も怪しかったからよく覚えていない。

だから今のうちにちゃんと顔を見ておきたい。なにせ彼女はおれの命の恩人なのだから。

傷が痛むため、ゆっくり体を動かす。近づいてそっと顔をのぞく。

ドクン。

心臓が大きな音を立てる。

ああ、もしかしたらこれを運命って言うのかもしれない。

神社で倒れてた子だ。

あの時も同じことを思った。なんてきれいな人なんだろう、って。ドクン、ドクン、ドクン。心臓の音がうるさい。

夢なんかじゃないよな。

白くて柔らかそうなその頬にそっと手を添える。おれ、何やってんだろう。

自分でもわからない。でも、見れば見るほど……。

ぼうつと見惚れていると、不意に彼女の目が開いた。

「うわっ！ご、ごめん。あの、き、君がおれを助けてくれたんだよね？」

やばい。絶対怪しまれてる。なんだかすごく、見られてる気がして目を見れない。

「ああ、はい。そうですけど、今のはいったい……？」

目を見ると大きな瞳がまっすぐこちらを見つめている。あーやっぱりこの人、きれいだ。

「あの、お礼言いたくてさ。起こそうと思ったんだよね。」

嘘。ただ君に見惚れてただけ。そんな恥ずかしいこと言えるわけない。

「そうですか。別にお礼なんて良いです。目の前で人が倒れたのに、放って置けるわけじゃないじゃないですか。普通の人なら助けます。」

その瞳はどこか、寂しそうだった。

「うん、でも君はおれの命の恩人だよ。ホントに、ありがとう。」
一瞬、彼女の瞳がきらきら輝いて見えた。すぐに下を向いてしまっただけだ。澄んだきれいな瞳だった。

「あの、とりあえずシャワー浴びてきたほうが良いと思います。」

着替えは弟があるので。」彼女が伏し目がちに言うのが、なんだけ可愛い。

初めて会ったときも思ったけど、人見知りなのかな……。

「わかった。じゃあ、お言葉に甘えて。えーっと、風呂どこ？」

「案内します。」着替えを手に彼女は立ち上がった。

ザーッ。お湯が勢いよくおれの体にぶつかっては落ちてゆく。おかしいな。傷がひとつ残らず消えている。まだ痛みは残っているのに。

ふと彼女がおれに襲いかかってきた夜影を吹っ飛ばしたときの姿が目に残った。もしかして、彼女が傷を治してくれたのか？

彼女は超能力を持っているのか。

風呂を出て着替え、部屋に戻ろうと廊下を渡ると、窓から光がさしていた。

もう夜が明けるところになっていたのか。

決意

部屋に戻ると彼女が布団の脇にちょこんと正座して待っていた。

「あの、おなかは空いてませんか？　なんでしたら何か作りますけど。」

「うーん、そこまで腹減ってないから大丈夫かな。ありがとう。」
そう言いながらおれは彼女の前に腰を下ろした。

「そうですか、わかりました。」

「……。」「」 会話が途切れ、お互い何を話して良いかわからず黙りこくってしまった。

仕方がないので、おれが話の口火を切る。

「あのさ、君この前神社で倒れてた子だよね？」 彼女が驚いたように顔を上げる。

「覚えててくれたんですか？」 その声は少し嬉しそうだった。

「もちろん。」

忘れるわけないだろ。一目惚れした女のことを。

「あの時はお世話になりました。」 彼女が丁寧に頭を下げる。

「まあ、今度はおれが助けられちゃったけどね。」

「はい、おかげで恩返しできました。」 恩返しか、良い響きだな。さっきからずっと感じてたけど……なんとおうか、彼女少し古風

な女だ。

それからまたしばらく沈黙が続いた。おれには彼女に話さなきゃならないことがたくさんあった。あの獣のこと。おれのこと。それから彼女の力のことも聞いておきたかった。

でもどう切り出せばいいのかわからなかった。それに、いきなりそんな話をして全部信じてもらえる自信がなかった。

そうしていろいろ考えながら言葉を探していると、彼女が口を開いた。

「あの、あなたは私のこと……恐くないんですか？」まっすぐにこちらを向いて、ゆっくりとそう言った。拳を強く握りしめている。

「……全然。怖くなんかないよ。どうしてそんなこと聞くの？」すると彼女は少したじろいだ様子で言った。

「だ、だって、私……超能力使えるんですよ！」

「——普通の人間じゃないから、昔から『魔女』って呼ばれていじめられたり、恐がられたり……そんなのばっかりなのに。」うなだれて彼女は寂しそうに言った。

「でも、君はその力でおれを助けてくれた。だからたとえ魔女だとしても、君は悪いやつじゃない。それだけは、おれにもわかるよ。」

「そんなこと言われたの、初めてです。」顔を上げた彼女の目は潤んでいて、そのしずくがポロポロとこぼれ落ちた。こんなきれいな涙を流すのだから、この人はきれいな心の持ち主に違いない。

「おれ、出来たら君の力を借りたい。良いかな？」今なら受け入れてくれるかもしれない。勇気を出して言ってみた。

「……私なんかで、あなたの役に立てるでしょうか？」か細い声で彼女は言う。

「君じゃなきゃ出来ないことなんだ。おれと一緒にあの獣たちと戦ってほしい。」

「戦うなんてたいそうなこと、私に出来るとは思えません。」彼女は大きく首を横に振る。

「――役に立つどころか、むしろ私、あなたの足手まといになってしまいます。」

「じゃあ、戦わなくて良い。一緒に、ただ一緒に居てくれれば良い。」

「――戦ってておれが傷を負ったら、それを治してくれれば良い。それだけで良いから。」

もう自分でも馬鹿げてると思うくらい必死になっている。おれは、君との繋がりが……君と一緒にいる理由が、ほしい。

そして何より、あんな寂しそうな目をする君をもっと笑わせてあげたいんだ。

彼女はそんなおれから目を逸らさずにちゃんと見ていてくれる。おれは君の心を動かしたい。どうにかして動かしたい。

いや、動かすんだ。絶対動かしてやる。

「――頼むよ。おれには君が必要なんだ。」もう一度、強くその大きな瞳に語りかける。

彼女は手の甲で涙を拭って、ゆっくり息を吸った。

「私、人からそんなに必要とされたの、初めてです。」

「――あなたは私が今まで出会った人たちとは違う。あなたと一緒にいたら、私、変われる気がする。」

「――私、変わりたい！いつも逃げてばかりだったけど、もう逃げたくない！」

凜とした、まっすぐな目だった。

「――お役に立てるかわかりませんが、よろしくお願いします。」

そうしておれたたちは一緒に戦うことを決めた。

晴野空

「あーそうだ、自己紹介してなかったね。おれは晴野空。空って呼んで。」

私はその名前に心底納得した。初めて会った日、そのきれいな瞳を空のようだと思ったのだ。しかも名字は私と正反対の「晴野」。彼の印象にぴったりである。

「わ、私は雨野しずくと言います。」

「……。じゃ、しずくって呼ぶね。よろしく、しずく。」少し間をおいてから、晴野空は早口に言う。

「あっ、こっ、こちらこそっ。」正直テンポについて行けない。また言葉をつかえてしまった。

「そんなに堅くなんなくて良いよ。」空はくすくすと笑いながら言う。

「――しずくって歳いくつなの？」

「17ですけど……。」

「なんだ。同い年じゃん。じゃあ敬語なんか使わないでよ。」

「えっ！お、同い年！？私てつきり、20代前半とかだと思って……。」驚いた。まさか同い年とは思わなかった。

耳には赤いピアスをしてるし、どこことなく私より落ち着いた感じもするし……。

「心外だなー。まだおれ高校生だよ。青春真っ只中なんだから。」

「ふふっ。面白いこと言う。」いたずらっぽく言う空が可笑しくて、思わず笑ってしまった。

「……なんだ、意外と笑うんだね。思ってたより普通の女の子じゃない。」

普通の女の子……。私は空には“普通の女の子”に見えていていると言うのか……。

嬉しい。すごく嬉しい。だって私がずっと夢見ていたのは、まさにその“普通の女の子”だったのだから。魔女なんかじゃなくて、そう、“普通の女の子”。

やっぱりこの人は他の人とは違う。こんな人は初めてだ。

私の一番言ってほしいことを、いとも簡単に口に出してしまうのだ。

「——おれ、なんかまずいこと言っちゃったかな？」私がしばらく黙りこくっていたため、空は少し心配そうに言った。

「ううん、違うの。私、嬉しくて。ずっと普通の女の子になりたかったから……。」

こんなことを言ったら笑われるだろうか？変な子だと思われるだろうか？

そう思いつつも、なぜか正直な気持ちと言葉に出てくるのだ。きつと空ならわかってくれると期待しているのかもしれない。不思議だ。なんの根拠もないのに……。

「……そっか。大丈夫、しずくは十分普通の女の子だよ。」その真意を察してか、先程までとは違う、優しく柔らかな笑みを浮かべて空は言った。

ああ、太陽みたいだ。この人と話しているだけで、心が暖かくなってくる。

この人なら私をわかってくれる。自分を隠さなくて良い。ありのままの私でいられる。

「ありがとう。」

「うん。」一瞬時が止まったような感覚を覚えた。なんだろう、この感じ。

「——ところでさ、これから一緒に戦わなきゃいけない訳だから、そのことについて話したいんだけど、良い？眠かったら明日でも良いけど。」

「……今、話して。」少し考えてからそう言った。

「……でも、長いよ？」私の顔をうかがいながら空は言う。

「大丈夫。」私はまっすぐ空の目を見て言った。

「そっか。じゃ、話すよ。」

「うん。」

「じゃあ、まずあの獣のことなんだけど……あれは『夜影』って言って、人間の負の感情を喰らう化け物なんだ。」

真剣な眼差しで空は淡々と話し始めた。

「――もとは悪霊の集まりで、一定の負のエネルギーを吸収すると、あんな風に化け物の姿のなる。今日出くわしたのは烏の頭で翼を持っていたけど、それは夜影の核になっている悪霊の性格によって違うんだ。」

私は黙って頷きながらそれを聞いていた。

「――夜影は基本的には人間を襲ったりはしないんだけど、マイナスのエネルギーが不足すると、なんでもかんでも取り入れようとして人間をも喰らうようになる。」

人間を喰らう……。空はそんな恐ろしいものと戦っていたのか……。

私は背筋が凍りついた。

「――そんな風に暴走をはじめた夜影は普通の人じゃ手に負えない。だからそれを退治するプロの存在が必要になったんだ。」

「――で、それがおれたち除影師なんだ。おれはまだ新米だけどね。」

固まっている私の様子に気づいたのか、少しだけ目を細めて空は笑った。

「――除影師は全国に散らばって仕事をしていて、それを総轄している組織が『火凧』。」

「……かりん？」

聞きなれない単語に思わず聞き返してしまった。

「うん。おれも火凧の一員なんだけど、これからはしずくも除影

師見習いとして火凧の一員になるんだよ。」

「除影師見習い……。私、空みたいになくなれるのかな？」

正直不安だ。私はそんなに運動神経が良い方ではない。

「大丈夫！おれが付いてるから。」

屈託の無い笑顔が眩しかった。この人の言葉には影がみじんも無い。

「――あと一応言っとくけど、夜影って誰にでも見えるものじゃないんだよ。靈感がある人なら見えるけど、実際本当に靈感ある人ってほとんどいないし。」

「――だから夜影が見えるって時点で、しずくには十分除影師の素質があると思うんだ。超能力だってあるしね。」

「そうなんだ。でも私、あんまり超能力使ったことないから……。実際どれほど役に立つのかわからない。とりあえず今わかるのは、人の傷を治せることと、物体の動きを操れること、それから瞬間移動ができるぐらいかな。」

「わっ、瞬間移動もできるんだ！？それは知らなかった。」

思いのほか空が驚いたので、私もびっくりした。

「えっ……。あの、気絶してた空を家まで運ぶのに初めて瞬間移動やってみたら、出来ちゃったの。」

「そっか、そうやって運んでくれたんだ。おれはてっきり弟くんに頼んだのかと思ってたよ。」

「玄関からこの部屋に運ぶのは手伝ってもらったんだけどね。」

「なるほどねー。瞬間移動もできるんだ。それはなかなか役に立ちそうだね。」

空は嬉しそうに言った。

私も嬉しくなった。こんな私でも誰かの役に立てるのだとわかったから。

出来ればもっと空の役に立ちたい。ほかにも超能力で出来ることがあるかもしれない。少しずつ、試してみよう。

「そういえば、あの刀はどうしたの？空が倒れたら、いつの間にか消えてて……私、それが気になってたんだけど。」

なんとなくずっと引っかかっていたことをそれとなく聞いてみた。

「ん？ああ、これのこと？」

空がそう言って左手で耳のピアスに触れると、瞬く間にあの長い刀が現れた。

「——これ、いつもはピアスに変形させてるんだ。ほかの除影師は腕時計にしたり、メガネにしたりしてるよ。便利で良いよね。」
私はあっけにとられて、しばらく言葉が出てこなかった。

「……なんと言うか、まさに文明の利器ね。」

「あははっ、しずくって面白いなー。」空は心底楽しそうに笑った。

「もうっそんなに笑わないでよ。」

そう言いながら私もつられて笑ってしまった。馬鹿みたいに二人で笑った。こんな風に笑ったのは、何年ぶりだろう？

ああ、そうだ、5年ぶりだ。お母さんが逝ってしまってから、も

う5年も経つのか……。

はじめましてじゃない

雨野しずく、やっぱり彼女だった。

最初に会った時、なんとなく似ていると思ったんだ。それに昔の面影が少し残っている。あの時は、彼女が初対面だと言ったから人違いかと思った。でも、そうじゃなかったんだ。

しずくはおれのことなんて、すっかり忘れてるのか？空なんて名前、そうそういないはずだから、普通なら気づくよな……。でもあの反応からすると彼女は全然気づいていない。

正直、予想以上にショックを受けている自分がいる。おれはずっと、君に会いたかったのに。ちゃんと謝りたかったのに。

幼いころのことだから、忘れていても仕方が無いのかもしれない。でも、おれは忘れたくても忘れられなかった。君はいつだっておれの記憶の片隅にいたんだ。

どうして……？

どうして君はまるで初めて会ったみたいな顔をするの？

どうして君はそんな目でおれを見れるの？

おれが怖くないの？

君は、おれを見捨てたんじゃないの？

おれなんか、もういらんないんじゃないの？

次から次へと浮かんでくる気持ち。なんだろう。腹立たしいとか、憎いとかじゃなくて……寂しい。寂しいんだ。

君に忘れられることが寂しくてしょうがないんだ。

でも、君は笑った。

あのころみたいに無邪気で真っ白な笑顔で。それは紛れもなく君

がしずくである証だ。

そしてそれは、君のなかでおれとの記憶が抹消されている証でもある。

幸か不幸か、いずれにしろおれはやり直すチャンスをもたらったわけだ。

もう一度、君のそばにいられるかもしれない。そう思ったら、いつの間にか必死になって一緒に夜影退治をしてくれるように君に頼み込んでいた。

君の力がどれほどまで成長したかはわからないけど、きっと君は自分のためにはその力を使わないんだろうな。変わってないな。

やっぱり、しずくはしずくだ。それだけは確かにわかる。

「ところでさ、実はおれ、今帰る場所が無くてさ。少しの間だけでいいから、泊めてもらえないかな？」

少し躊躇いつつ申し出ると、しずくは驚いた顔をして、

「家出したの!？」と言った。本当にこの人天然だな……。

「違う違う。ちょっと事情があつて。」

すると今度はしばらく考えてから真面目な顔でしずくは言った。

「……もしかして、家族で夜逃げとか？」

おれは思わず吹き出してしまった。面白すぎるだろ。

「家族いないし、そういうのじゃないから!!」

「あつ、ご、ごめん。」急にしょんぼりとしてしずくは言った。

家族がいらないということに、少し気を使ってくれたようだった。

「えーっと……おれが物心つくころにはもう両親いなくて、ずっと育ててくれた人と一緒に住んでただけで、引越し先の部屋がめちゃくちゃ狭いからって追い出されたんだ。本当ひどい話だよ。」

「そうなんだ。じゃあ、今はその人もこの辺に住んでるんだ。」

「うん。ていうか、あの人しずくの通ってる高校の教師だよ。」

「えっ……。何で私の通ってる高校知ってるの？」

驚くところ、そこかよ。……まあいいや。

「制服の校章見ればわかるよ。楓高校でしょ。」 彼女のブレザーに付いている、楓の葉の形をした校章をさしながら言った。

「あっ、なるほど。……あっそうだ、その人名前はなんていうの？うちの学校の先生なんだよね？」

「石神龍一郎」

「いっ石神先生！？私、数学習ってる……。」「苦い顔をしながらしずくが言うので、また笑いそうになるのを必死に堪えた。そういえばあの人の授業はめちゃくちゃ厳しくやってるって言ってたな。」

「あっ、やっぱり師匠のこと知ってたんだ。」

「師匠？」 少し小首をかしげる仕草が可愛い。

「あー、ひきとられた日に言われたんだよ。『おれ、そんな年じ

やねーし、気持ち悪くて癪に障るから、“お父さん”とか“おじさん”なんて呼ぶなよ。だからおれのことは“師匠”って呼べ!』って。」

思い出しただけで笑いがこみ上げてくる。

「――まあ、あの人あれでも一流の除影師だからね。除影師としては立派な師匠だよ。」

「じゅ、授業の時とは全然感じが違うのね……。そういうこと言うような人には見えないもの。」

「学校では、超真面目な先生を演じてるだけだよ。普段は眼鏡なんかしてないし。」

「そ、そうなの? 知らなかった……。」

まあ、こうして一緒にいられるだけでいいか……。そのうち思い出してくれるだろ。

しずくの笑顔を見ると、もやもやしていた気持ちがすっと楽になる。不思議だ。

「

」

「話それちゃったけど、しばらくここに置いてもらっても良い？」

「もちろん。明日弟には話しておくね。」

しずくが何の迷いもなく言うので、少し驚いた。

「……。あのさ、親に相談しなくて大丈夫なの？」

「……。」

あれ、まずいこと聞いちゃったかな……？しばらくの沈黙の後彼女が口を開いた。

「——うちね、お父さん外務省に勤めてて、今外国で仕事してるの。」

「えーと、お母さんは？」

「今はもういないの。5年前に、病気で……。」

何やってんだおれ。最初っからこんな悲しい顔させてどうすんだよ……。

「……そっか。」

どうやって慰めればいいのかわからなかった。もっと気の利いたこと言えれば良いのに。

「ごめんね、暗い話しちゃって。」

下手な作り笑顔が痛々しかった。おれ、最低だな。

「いや、話ふったのおれだから。こっちこそ、ごめん。」
どんよりとした空気にのどが詰まる。春なのに、今日の風は少し冷たい。

「私、お母さん居なくなってから自分がしっかりしなきゃって思ったの。」

「――だから、家事は大体私がやってるの。」

「すごいな。でも一人で家事全部やるのって大変じゃない？おれに出来ることあったら手伝うよ。何でも言ってよ。」

「うん。ありがとう。今のところ大丈夫だけど、何かあったらその時お願いしても良い？」

「もちろん。おれ、居候だし何でもやるよ。」

少しだけ、彼女の表情が柔らかくなった気がした。

「本当にありがとう。えっと、空の部屋なんだけど、この部屋でも良い？ちょっと狭くて悪いんだけど……。」

「うん。大丈夫。ありがとう。」

「――しずくはそろそろ寝なくて大丈夫？明日も学校だよね。」

「あっ、もうこんな時間。そうね。私もシャワー浴びたら寝るね。じゃあ、お休み。」

「うん。お休み。」

彼女は微笑んでからゆっくり立ち上がり、襖を開けて部屋を出ようとしたが、何か思い出したように振り返った。

「体、ちゃんと休めてね。無理しちゃだめだよ。」
ああ、こういうところ、好きだな。ごく自然にこんな言葉が出てくるなんて、彼女は本当に心の優しい人なんだ。

夢を見た。あの時のこと。
彼女は言った。

「もう良い。」

「もう良いの。」

「もう、良いんだよ。」

何度も、何度も繰り返した。

それ、どういう意味？何が良いの？
どうして、泣いてるの？
わからない。わからない。わからないよ。

「もう、いらないんだよ。」

「私には、もう空は必要ないの。」

「だから、さようなら。」

「全部忘れて……に、……ね。」

何？聞こえない。聞こえないよ。今、何て言ったの？
お願い、もう一回言って。

待って、待ってよ。待って！待って！！

「

」

やめて、やめて。そんなこと、言わないで！

嫌だ、嫌だ、嫌だ。

届かない、もうこの手は届かない。わかってる。わかってる。

でも、もう一度だけ、その瞳を見たい。宝石みたいな金色の瞳。君は気づいていなかったね。

力を使うとき、自分の瞳の色が変わることを。

ああ、意識が遠のいてゆく。

行かないで、行かないで。……しずく。

転校生

今朝はよく晴れて、良い天気だ。優しい春の風が気持ち良い。
今日から新学期の授業が始まる。新品の教科書とノートが詰まった
かばんは、いつもより少し軽く感じた。

足取りが軽かったせいかな、少し早めに教室についてしまった。誰も居ない。

心のどこかで安心してゐる自分に気づく。

私は人と話すのは苦手だ。というより、人と話すのが怖いのだ。
昔から“魔女”と呼ばれていたため多くの人は私を恐れている。話
しかけてくる人がいても、必ず怯えた目をしているのだ。

どうして皆そんなに私が怖いのだろう……？超能力者だから？

私は人を傷つけるために力は使わない。自分の力を使うの自体、あまり好きじゃない。

むやみに力を使うと、自分が“魔女”であることを認めているみたいで、嫌なのだ。

座席は当分出席番号順なので私は一番左の列の一番前だ。

苗字が「雨野」だから出席番号はだいたい1番か2番になる。去年は2番だったが、今年は1番になった。

この席は結構厄介だ。先日の委員会決めでは学級委員の立候補が出なかったため、担任の増田先生が勝手に1番だからという理由で私を委員長にしたのだ。

そのときクラス中が静まりかえったのは言うまでもない。

誰かがひそひそと何か話している声は聞こえたが、何しろ先生が決めてしまったので誰も何も言えなかった。

正直、複雑な気分だった。いつも図書委員みたいな地味な仕事をしていたので、委員長なんて大役は少し嬉しかった。でも私が委員長で、みんなは協力してくれるだろうか……？

自信が無い。自分でも私はクラスで浮いてると思うし、好かれてるようには思えない。

これからどうしよう……。

そんなことを窓の外を見ながら考えていると、いつの間にかクラスは人でいっぱいになっていた。チャイムが鳴ってもクラスはわいわいと騒がしい。

いつも5分遅れくらいにやって来る増田先生だが、今日はやたらに遅い。チャイムが鳴ってからもう20分も経っている。

「先生今日遅くない？」いたるところでそんな声が聞こえ始めたときだった。

ガラッ！

突然ドアが開いたのでクラス中の視線がそちらに向けられた。

「いやー遅くなってすまん、すまん。」いつもの調子でそう言いながら、増田先生は教卓へ腰掛けた。小太りの先生には少し狭そうだった。

その間に生徒たちはあわてて席に戻った。

「あっそうだ、今日は出席とる前に一つニュースがあるぞ。」

「わかった！先生1キロ痩せた！？」

後ろのほうから楽しそうに言うのはクラスの中心的存在で、たしか山田くんだ。友人にはナオと呼ばれている。

「いや、違うだろ。つーか、むしろ太ってないか？」

冷静につっこみを入れるのは彼の一番仲の良い友達で、白川くんだったと思う。

「バレたかー。実は先月食べ過ぎて体重2キロ増えたんだ。」

先生はあっぱはっと豪快に笑った。同時にクラス中がどっと笑い出した。

「すげーな、優一！良くわかったなー。」

山田くんはなんとなく親しみやすい人だと思う。表裏が無いというか……心の底から笑っている感じがするからだ。

「勘だよ、勘。ところでニュースって何だろうな？」

確かに、白川君の言うとおりだ。ニュースとはいったい何だろう？

「良くぞ聞いてくれた！今日のニュースはみんな喜ぶぞー！」
もったいぶらないで早く教えてほしい。

「なんと、わがB組に転校生が来ました！拍手！！」

おーっ！とクラス中が明るくなった。おおきな拍手がわき起こる。

「先生ー！それって男？女？」

すかさず山田君が尋ねる。

「残念！男だよ！」

その言葉に女子が反応する。すごい騒ぎになっている。

「おーい、みんな静かにしろー。うるさくて入りづらいだろ。」

「あははー、確かにー！みんな、静かにしようぜー。」
山田くんが言うのと途端に静かになる。不思議だ。

「よーし、じゃあ入って良いぞー！」先生がドアに向かって大声で言うのと、少し間をあけてドアがゆっくりと開く。

！！！！

そこに立っていたのは……金髪碧眼の少年だった。

凸凹コンビ

「空!?!」

私は思わず大きな声を出してしまった。

「あれ? しずく!?!」

どうやら向こうも予想外だったようで、ひどく驚いていた。

「なんだ、雨野、知り合いか?」

静まりかえった教室に増田先生の声が響く。

「えっ、あー……はい。」

「ほおー。じゃ、今日は晴野、雨野の隣に座れ。そのほうが良いだろう。」

「えっでも……。」

「今日は小野、休みだそうだから問題ない。」

「そ、そうなんですか……。」

「じゃそういうことで!」

「ちょ、ちょっと待ったー! まだ自己紹介して無くない?」

山田くんが良いタイミングで話し出すと、クラスがざわざわと騒がしくなった。

「雨野さんの知り合いなの？ど、どういう関係かな？」

「さあ……？でもすっごいカッコイイよね。金髪だし、ハーフかな？」

「雨野さんって、あーいうキャラだっけ？」

「いや、しゃべったことないし。」

いろんな声が聞こえてくる。

そこに突然、カッカッカッという硬い音が鳴った。

声をかき消すように大きな音を立てて、空が黒板に字を書き始めたのだ。

晴野 空

達筆な字で書かれたその字に見入っていると、彼は話し始めた。

「はじめまして、晴野空と言います。ちなみにこれ、地毛です。よろしくお願いします！」

「なんだー、バリバリ日本語しゃべれんじゃん！よろしく、空！」
山田くんがそう言うのと、みんなが拍手して歓迎した。

さすが山田くんだと思った。私なんかより、ああいう人が委員長になるべきなんじゃないだろうか……？

駄目だ、どんどんネガティブに考えてしまう。

ふと見ると、空は嬉しそうに笑っていた。

「……あの、空、そんなに……見ないで。」

私は教科書をまだ持っていない空のために机を寄せて一緒に見ていたのだ。でもなぜか彼は私の顔をずっと見ている。正直そんなに見られていたら集中できない……。

「えっ？ あー、……ごめん。」

いったい何なんだろう。この人のことが、まだ良くつかめない。見た目も変わっているが、中身も変わっている気がする。

「……ノート、とらないの？ ないんだったら裏紙あるけど。」

「平気だよ。」

にっこり笑って言うけれど、本当に大丈夫なのだろうか……。

「そう、なら良いんだけど。」

……？ 今度はまた違うところに目線が移った。空はまたじっと何かを見つめている。

「しずく、字きれいだね。」

ああ、私のノートを見ていたのか。

「そうかな……。」

「うん。先生みたいな字。」

「えっと、そうなんだ。」

字なんて特に意識していなかったので少し驚いた。

出会ったときからずっと思っていたけど、空の瞳には何か別世界の

ものが映っているように感じる。その澄んだ瞳の裏に何かを秘めているようにも思える。不思議な気分になるのだ。

「空ってやっぱハーフとか？それ地毛なんだろう。」

休み時間に入るやいなや、山田くんが好奇心に満ちた様子で空に尋ねてきた。友達を作ることにに関して彼の右に出る者はいないと思う。同学年だけでなく先輩や後輩にもたくさんの友人がいるのだ。人懐っこい性格だからだろう。

「うーん、たぶんね。」

「なんだ、その曖昧な答え！」

そう言いながら山田くんは楽しそうにケラケラと笑う。

「おれ、両親早くに亡くしてるから、親のことよく知らないんだ。………。どうして、そんなことを今日はじめて会った人に言えるのだろう。しかも、笑顔で……。」

「そっか、じゃーもしかしたらどっかの王子かもよ？」

「ぶっ。それはないと思うけどね。」

良かった。山田くんはやっぱ良い人だ。空もすごく楽しそうだし、私も嬉しい。

「あっそうだ、おれ山田直哉。ナオって呼んでよ。」

「うん。よろしく、ナオ。」

「そんで、こっちが優一！」

ぐいと白川くんを引っ張りながら山田くんは言う。

「フルネームは白川優一。こいつが時々変な呼び方するけど、普通に優一でいいから。」

「えーっ！別に変じゃないし！ひどいな、ゆうたん！！」

「だからその呼び方やめろ。」

「可愛いじゃん。マジ萌ー！」

「キモイ。」

私は思わず吹き出しそうになったが、必死に笑いを堪えた。

「二人って本当面白いね！漫才やってるみたい。」

空はお腹をかかえて笑っている。

「何を言ってるんだね！空くん、君は今日から我々の友達だ。これからは君も入ってトリオだぞ！」

「……。こいつの言ってること、気にしなくて良いから。」

山田くんのハチャメチャなボケと白川くんの冷静なツッコミが本当によくあって面白。

「まったく、冷たいなー。」

「くくっ。本当良いコンビだね。これから毎日見れると思うと楽しみだよ。」

こうして、あっという間に空に二人の友達ができた。二人といるとき空はとても楽しそうだった。私はとりあえず一安心した。

初めての友達

4月の終わりくらいだったと思う。放課後、私は夕飯の材料を調達するため、街を歩いていた。商店街の中心は週末の夕方になると人通りが増す。ぼうつとしていると人にぶつかりそうになる。ひき肉が安かったので今日の夕飯はハンバーグ。玉ねぎも買って帰ることにした。買い物に満足して、来た道に戻ろうと向きを変えると、なにやら危機迫る女の子の声が聞こえてきた。

「ご、ご、ごめんなさい。あの、は、離していただけませんか？」

「はあ？こっちなあ、てめえがぶつかったせいでコーヒー、シャツにこぼしちゃったんだぞ。弁償しろ、弁償。」

強面の男性がシャツを弁償しろと迫る。女の子は必死に謝っている。高校生のようだ。しかも私と同じ制服を着ている。楓高校なのか……。できれば助けてあげたい。しかし勇気が出ずに立ちすくしている、男性が彼女の胸倉をつかんで、拳を振りあげた。危ない！

「ん！？腕が動かねえ。」

「あの、乱暴な真似はやめてください。警察呼びますよ。」

無意識に超能力を使ってしまった。とりあえず、冷静に男性に話しかける。

「なんだてめえ。関係ねえやつはすっこんでろ。」

「関係なくはないです。私は彼女と同じ高校の生徒ですから。」

「くそっ、黙れよ。うぜえんだよ。」

今度は私の目の前に拳が飛んできた。当たる直前にその動きを止める。二度も突然に自分の腕が動かなくなったため、彼は明らかに動揺していた。腕が動かないのなら、というふうに今度は足を出す。そのあきらめの悪さにはさすがに呆れてしまう。

このままだと收拾がつかないので、私は手を使わずに彼を軽く吹っ飛ばした。すると彼は恐れおののいた様子で「なんだこいつ。化けもんだ。」とはき捨てて逃げてしまった。

「……………」

女の子はしばらく呆気にとられていたが、状況を理解したのか、ゆっくりと私に近づいてきた。

「あの、助けて下さってありがとうございます。」

「どういたしまして。ああいう性質たちの悪い人には気をつけたほうが良いですよ。」

「あっはい。あの……雨野さんですよ？ 私一応同じクラスの者なんですけど……。」

「えっ！？ あっ、そういえば見たことあるかも……。ごめんなさい。私、人の名前とか覚えるの苦手で。」

「いえ、謝らなくても良いですよ。全然気にしてませんから。私影薄いんで、しょうがないんです。」

「そ、そんなことないと思うけど。むしろ私のほうが影薄いんじゃない……。」

「雨野さんは影薄くなんかないですよ！！委員長ですし、晴野くん

と仲良いですし。すごく存在感があって羨ましいです。」

ものすごく真剣な目で彼女が言うので驚いた。羨ましいだなんて、未だかつて言われたことがないので、どう答えたら良いのかわからない。でも、なんだか少し嬉しかった。

「えっと、あなた名前は？」

「加賀春菜です。春菜って呼んでください。」

「あっ、うん。わかった。春菜ね。」

春菜

それから長い沈黙がつづいた。春菜は時おり何か言いたげに口をぱくぱくしている。決心がついたのか、やっと口を開いた。

「あの、わ、私の勘違いだったら、すごく失礼なんですけど……。その、雨野さんって超能力というか、あの、そういう特別な力をお持ちなんですか？」

やっぱり、そのことか……。人に自分の力について知られたくはなかったが、手を使わずに人を吹っ飛ばすのを見られてしまったからには、さすがに誤魔化せない。

「……う、うん。実はそうなの。気味悪いよね。」

彼女はと思うだろう。やっぱり私を怖いと思うだろうか……。その顔を見るのが恐い。

「――あの、別に人に危害を加えたりはしないから、大丈夫よ。さつきはあなたが危なかったから、つい、使っちゃっただけで……。あの、だから……。私のこと、恐がらないでほしいの。」

彼女がずっと黙っているの、不安になって付け加えた。

「あっあの、私、雨野さんのこと、そんなふうに思ってますんよ！むしろお友達になりたいです！！」

「えっ……と、友達？……なんで！？わ、私のこと恐くないの？」

「何言ってるんですか！超能力使えるなんてすごいじゃないですか！！私、靈感あって幽霊とか見えるんですけど、誰も信じてくれないし、人の役にも立てないし。だから雨野さんが羨ましいんです。」

超能力ってすごく便利だし。それに、雨野さんは名前も知らない私なんかをその力で助けてくれたんですから、良い人に決まっています！ 恐がる理由なんてどこにもないです！」

その言葉を聞いたら、なんだか急に涙が出そうになった。でもいきなり泣くわけにもいけないので、必死に堪える。

「あ、ありがとう。わ、私なんかと友達になってくれるの？」

「はい！私、雨野さんともっと仲良くなりたいんです！」

「そう……。そんなふうに言ってくれるの、すごく嬉しい。ありがとう。」

「あの、じゃあ、友達の証に、名前で呼んでも良いですか？」

「うん。」

「し、しずくさんですよ。」

「なんで、さん付けなの？」
思わず笑ってしまった。

「だって、尊敬する人と呼ばい捨てにはできませんから！」

「そ、尊敬って……私、そんな大した人間じゃないよ。」

「いいえ、しずくさんはすごい人です。私もしずくさんみたいに強い人になりたいんです！」

「あの、私そんなに強い人間じゃないと思うけど……。」

「そんなことないです。しずくさんはもっと自信もって下さい。せっかくすごい力持ってるんですから。」

その笑顔がまぶしかった。この子の言っていることは全部本当のことなのだろう。とてもまっすぐな瞳だった。嘘をつくような人間にはとうてい見えない。だから余計に嬉しくなった。心の底から私のことを“良い人”だと言ってくれたのだとわかったから。

それから私と春菜はクラスでもよく一緒にいるようになった。彼女は腰は低いが、言うことはちゃんと言う。意外と頭もいいことがわかった。正直私より成績が良いと思う。でもそれを誇示するようなことはしない。その謙虚さがまた彼女の人の良さを際立たせた。

私はそんな彼女と一緒にいるのが心地良い。ずっと友達と呼べる人がいなかった私にとって春菜は初めての友達だった。

届かない

俺は、彼女にはもう二度と会えないと思っていた。いや、会いたくなかったと言った方が正しいか……。しかし空は彼女に再び出会ってしまった。

どうやら彼女は俺と空のことは記憶にないらしい。まあ、無理もないか。あんなひどい記憶なら、無いほうがまだ。

正直、空の目を通して彼女を見るのは嫌だ。思い出してしまうから。あのとき、最後に見た彼女の姿を。空は先に気を失ってしまったから知らないが、俺は知っている。空が聞き逃したあの言葉の意味が何なのかを。

彼女を追い詰めたのは俺だ。空じゃない。あいつは俺の存在を知らないから、全部自分のせいだと思っている。そして、自分は見捨てられたのだと勘違いしている。馬鹿なやつ。優しすぎるんだ、空は。お前は悪くない。悪いのは俺だ。俺なんだ。彼女を笑わせていたのは空で、彼女を泣かせていたのは俺だ。

彼女は俺を知らない。それは昔も今も同じだ。彼女が笑いかけるのは、いつだって空だ。俺じゃない。わかっている。ちゃんと、わかってる。俺は彼女に関わるべきじゃない。彼女を悲しませ、苦しめることしかできないから。

でも、それでも彼女のまっすぐな瞳から目を逸らすことができない。本当に馬鹿なのは俺のほうだ。その艶やかな黒髪にも、雪のような白い肌にも、触れることはできない。俺の声は届かない。空が羨ましい。

そして、何もできない自分に腹が立つ。その気になれば目覚める

ことはできる。彼女に会える。でも、そうしないのは、そうできないのは……恐いからだ。また、彼女を失うのが恐い。恐い。どうしようもなく、恐い。

あつという間にもう5月半ばになっていた。つい先週初めての席替えをした。窓側が良かったが、廊下側の一番後ろになった。あまり気が進まなかったが、幸運にもしずくの隣の席になったので満足している。

「……そら……空、空っ！」
ぼうつとしていたのか、しずくが呼ぶ声に気づかなかった。

「晴野、教科書忘れたのか？」
どうやら先生に当てられたらしい。

「――教科書35ページだよ。」
小声で彼女が教えてくれたので、なんとかその場をしのげた。

「さっきはありがとう。」

「あー、うん。珍しくぼうつとしてたね。」

「うん。なんか良く覚えてないんだ。もしかしたら寝てたのかも。」

「ふふっ、目開けたまま寝てたの？」

最近彼女はよく笑うようになった。前より自然に笑ってくれるので、おれも嬉しい。

「白昼夢、っていうのかな？……まあいいや。本当に助かったよ。ありがとう。」

「うん。あっそうだ、今日私、委員会あるから先に帰って良いよ。」

「あーうん。でも大丈夫？遅くなるんだったら待ってるよ。危ないし。」

「ありがとう、でも大丈夫。そんなに遅くならないから。」

「わかった。」

なんだか胸騒ぎがしたが、彼女が大丈夫と言うので、先に帰るところにした。

あなたは誰なの？

委員会が長引いて、思ったより遅くなってしまった。学校を出ると辺りはもう真っ暗だった。夕飯は大丈夫だろうか？昨日の残りものなんかを適当に食べてくれると良いな。洗濯物も結構溜まっていたし、帰ってからやらなきゃいけないことがたくさんある。

色んなことが頭の中をめぐっていたときだった。

！！！！

突然あの耳鳴りがした。空が倒れたとき感じた耳鳴りと同じだった。それから頭痛。今度はこの前よりひどい。頭がふらふらして、足もおぼつかない。どうしよう。どうしよう。早く帰らなきゃ……。駄目だ。足が動かない。もう立っているのがやっとだ。耳を塞ごうにも腕がうまく動かない。

そのとき突然風が吹いた。自分でもよくわからなかったが、何かが近づいてくるような気がした。激しい風に飛ばされそうになりながら前を向くと、夜の闇に二つの紅い光が浮き上がっていた。どんな近づいてくる。あれは何？見たことが、ある……。

夜影だ。紅い光の正体に気づいた次の瞬間にはもう、大きな鎌が目の前にあった。冷たい銀色だった。

私、ここで死ぬのかな……。

そう思って目を閉じたとき、不意に金属と金属がぶつかり合う音

がした。恐る恐る目を開けると、そこには大きな背中があった。

「下がってろ。」

背中が言った。その低い声は、静かに、頭の中に響いた。私は言われたとおり、一步後ろに下がろうとした。しかし安心したせいか、体の力が抜けて、そのまま尻餅をついてしまった。

情けないけれど、私はその背中を見ていることしかできなかった。その動きは速くて、しかも無駄がない。この人は、強い。単純にそう思った。そして、とても頼もしく思った。

彼はあっという間に夜影を追い詰め、剣を高く振り上げた。夜影は真つ二つになった。闇を裂くような悲痛な叫び声が響き、紅い光は消えた。そして辺りに黒い羽根が飛び散った。その中を彼はまっすぐこちらに向かって歩いてくる。その顔は私のよく知る少年そのものだった。しかし、その瞳は空色ではなく、緑がかった青色だった。

「大丈夫か？」

そう言って、私の両手を掴んで引っ張り、起き上がらせてくれた。その吸い込まれそうな瞳を見ると、自分が深い海の中に放り込まれたような気分になった。彼の瞳には不思議な力があるように思えてならなかった。

「助けてくれて、ありがとう。」

「ああ。……怪我はないか？」無表情のまま、彼は静かに言った。

「うん。」

黙って私をまっすぐ見つめるその深い青色の瞳は、やっぱり海のようにだった。私は強く思った。知りたい。この人がいったい誰なのかを。

「――あの、あなたは……誰なの？空じゃ……ないよね？」

「……。」彼は少し、困ったような顔をしている。

「隠さなくても良いよ。でも、言いたくないなら……。」

「俺は名前を持っていない。」私が最後まで言い終わる前に、彼のほうが口を開いた。

「名前、ないの？」

「特に必要なかったからな。」そっけない返事だった。彼はずっと無表情で、何を考えているのか全然分からない……。

「そうなんだ。でも、名前あったほうが良いよね？」

「別に。」

「……。あったほうが良いと思うよ。」

「何故だ？」

「えっ、何故って言われても……。だって、空と区別つかないし。それに私もっとあなたのこと知りたいの。もっと話してみたいの。でも名前なかったら、話しづらいでしょう。」

「……なら、お前が名前をつければ良い。」

「えっ、わ、私が付けても良いの？」

「俺と話したいんだろう。だったらお前が勝手に名前をつければ良いことだろ。」

「はあ……。確かに。」怒らせてしまっただろうか。でも無表情なのでよく分からない。ただ分かったことは、彼は意外と口数が多いということだ。

それにしても名前なんて、そんな大事なものを私なんかが決めて良いのだろうか……。その瞳をもう一度見てみる。やっぱり、その色から浮かんでくる名前は、一つだけ。

「——うーんと、じゃあ、海っていうのはどうかな？」

「かい、か……。まあ、お前がそう呼びたいなら、それでかまわない。」

「あのね。あなたの瞳の色、深い海の中みたいだったから、海って書いて“かい”っていう名前にしたんだよ。」

「……。俺の瞳の色、空とは違うのか？」少し驚いた様子で海は言った。

「う、うん。空は澄んだ空色だけど、海は緑がかった深い青色なの。」

「そう、なのか。」納得したように彼は少し下を向いた。

「私、空の瞳も好きだけど、海の瞳も好きだよ。なんか、海の中にいるような気持ちになるから。」

「……。」海は黙って下を向いている。

「海、聞してる？」その肩に軽く手を置くと、彼の体がビクッと弾んだ。

「悪い。今、お前何か言ったか？」

「あつ、ううん。なんでもない。あつそうだ、私、自己紹介してなかったよね。私の名前は、」

「雨野しずく。」

「えっ！？なんで、知ってるの？」

「さあ、なんでだろうな？」

「……わ、わからない。なんで？」

「教えてほしいか？」何だろう。なんか、意地悪されてるみたいだ。

「う、うん！教えて。」

「俺は、空の見聞きしたものなら何でも知っている。」

「……そ、そうなんだ。じゃあ、かおるのことも知ってるの？」

「ああ、お前の弟だろ？」

「う、うん。やっぱり全部知ってるんだ。」

「……。」彼が急に黙ったので見上げると、その瞳は少しも動かず、私を見ていた。

「——お前、あまり俺と関わらないほうが良い。」静かに、ゆっくりと海は言った。

「……どうして？」

「お前は知らなくて良い。とにかくお前は必要以上に俺に関わるべきじゃない。今回は空じゃ対応できない相手だったから仕方なく俺が退治しただけだ。これからもあいつに倒せない夜影が現れたときにな、俺は出てこない。」

わからない。どうして関わっちゃいけないの？どこからが必要以上のの？空が倒せない夜影ってどんな夜影？今度あなたに会えるのはいつ？もっと話したいのに。もっと海のこと知りたいのに……、どうしてあなたは私を突き放そうとするの？

私はしばらく言葉が出てこなかった。「わかった」なんて言えない。だって全然わからないから。海がいったい何を考えて、そんなことを言うのか……。わからない。だから何も言えなかった。

罪悪感

くそっ。何なんだ俺は。会いたくない、関わりたくないと思っておきながら、「お前が名前をつければ良い。」……って、何言ってるんだこの馬鹿。自分でも何でもそんなことを言ったのかわからない。もう二度と関わりたくない決めていたはずなのに、自分の言動はそれにことごとく矛盾している。

それに「これからも」って何だ。これからも彼女の前に現れるつもりなのか……？ 認めたくはないが、本当はもっと会いたい、話してみたい、という気持ちが無意識のうちに言葉に出てしまったのだ。しかし言い方がまずかったのか、彼女には通じていないらしい。逆に落ち込んでるように見える。さっきからずっと黙って下を向いて俺の少し後ろを歩いている。

「黙って」というのはもしかしたら間違っているかもしれない……。時々後ろを伺うが、何か話しかけている様子がないので、自分が勝手にそう思っているだけかもしれないのだ。そうだ、もしかしたら俺の背中に話しかけて完全無視されたために落ち込んでいるのかもしれない。

でもそれを直接聞くのも気が引ける。耳が聞こえないことを自分から公言するようなことはしたくない。彼女に対してはなおさらだ。そんなことが知れたら妙に気を遣われそうで、いたたまれない。

しかし、この空気はどうかしなければ……。重い。夜の闇が一層その空気を重くする。この重い空気を作ったのは他ならぬ自分なのだが、さすがに堪えられなくなってきた。とはいうものの、何と切り出せばいい？ ……………。

「おい、時間……平気なのか？」いきなりこれは不自然かと思いつつ、とりあえず足を止めて後ろに振り返った。

「えっ、あー、う……うん。」なんだこの微妙な返事は……。

「もう8時近い。夕飯とか大丈夫なのか？」

「多分、大丈夫。かおるなら、残り物とか適当につまんでると思うし。」

「そうか……。」

「うん。」

「……。」会話終了。早すぎだろ……。口下手な自分に嫌気が差す。空が相手ならきつとすらすら会話が進むのだろう。いつも、楽しそうに話しているし……。って、待て待て俺。今空は関係ないだろ。あ、ー！ー！ー！くそっ！何を、何を言えば良いんだ！！

「あ、あの。海は何か食べたいものある？大したもののは作れないけど、折角だから……。」

声にならないうめき声をあげていたとき不意に彼女が口を開いた。

「いや、食べたいものは特にない。お前が作りやすいもので良い。」

我に返って、自分の言ったことに呆れる。飯まで食うつもりかよ。図々しいにもほどがあるだろ。

「わかった。あっそうだ、海は食べれないものある？」

「ない。」もちろん即答である。

「ふふっ。そっか。じゃあ何でも良いんだね。すごく助かる。」
あっ、笑った。俺の前で笑うの初めてじゃないか？どこにハマったのかはよくわからないが、とにかく彼女は笑った。これで一安心だ。

「よし、じゃあ、とつとと帰るぞ。腹が減っては戦はできぬ。」

「もう戦終わったでしょ。」そう言いながら彼女は笑いを堪えているようだった。

なんだ、俺にも彼女を笑わせることはできるんだな。しかし何だ、この気持ちは。なんだか自分がすごくいけないことをしているみたいだ……。それはつまり、罪悪感だ。

結局俺は彼女を騙している。彼女の記憶がないことを良いことに、正義の味方気取りをしている。卑怯なやつ……。何を考えてんだ俺は。正義の味方なんて、俺はそんなお綺麗な役回りじゃないだろう。

そもそも彼女を守るためなら手段は選ばない。それが俺の存在意義だったはずだ。でも……それが彼女を傷つけていたのを俺は知らなかった。あの時目の前の彼女の姿を見て、ようやく気づいたのだ。遅すぎた。俺は救いようのない馬鹿だった。もう二度と同じ過ちは繰り返さない。そのために彼女に関わることを切り捨てたはずだった。そう、切り捨てたはずなのに……。

おれは自分の欲望に負けた。

不思議な瞳

「はい、どうぞ。」

そう言って私は彼の前にお皿を差し出した。夕飯は残り物を合わせて作ったオムライスだ。

「……。いただきます。」

こちらを一瞥した後、海は礼儀正しく胸の前で手を合わせ、スプーンを手にとった。一口、また一口。特に味についての感想はないが、スプーンを持つその手に迷いはなく、黙々と食べ進めていく。これはつまり、不味くはない、ということだろうか？

時々こちらを窺うが、彼は何も言わない。じつとその様子を見つめていると不意にその手が止まった。あれっ、と思った直後、目が合った。私の瞳はそのまっすぐな瞳に捕らえられてしまう。不思議だ。目が離せない。吸い込まれそうになる……。

「お前は食べないのか？」

話しかけられて我に返った。そうか。私の食が進んでいないことを気にしてくれたのか……。

「たっ、食べるよ。」

そう言いつつ慌ててスプーンを握った。なぜか軽く手が震える。耳も少し、熱い気がする。どうしちやっただらう、私……。

部屋に響くのはスプーンと食器がこすれる音だけ。でも私のなかでは心臓の鼓動する音が大きく響く。

今度はいつ会えるのかな……。そういえば「これからあいつに倒せない夜影が現れたときにしか、俺は出てこない。」って言って

たよね。「これからも」、ってことは会えるチャンスはまだあるってこと？

「ごちそう様。うまかった。」

いつの間にか彼のお皿は空っぽになっていた。って、あれっ？…
…今、「うまかった」って言った？どうしよう。すごく、すごく嬉しい。抑えようとしても口元が緩んでしまう。

「良かった。」

「…。じゃあ、そろそろ戻る。」

一瞬私は“部屋に”戻る、ということかと思ってしまった。しかし海は席を立つ様子もなく、ただじっとこちらを見ていた。つまり彼が意図したのは、“空のなかに”戻る、ということだったのだ。

「うん。今日は、ありがとう。」

本当はもっと何か言いたかった。もっと聞きたいことがあった。でも、言えなかった。先ほど彼に言われた言葉が頭の中をよぎったから。

“お前は必要以上に俺に関わるべきじゃない。”

それは、あなたが私に関わりたくない、ということ？
痛い。胸に何かが突き刺さる。

「あれ？しずく、いつ帰ってきたの？」

空色の瞳が不思議そうにくるくると回った。見慣れたその澄んだ瞳を見ると、数秒前まで見ていた深い青緑の瞳が幻だったかのよう
に思えてくる。

「えっと、8時過ぎかな。」

「そうなんだ。なんかおれ、ぼうつとしてたのかな？いつの間にか夕飯食べ終わってるし。」

そう言いながら空は辺りを見回した。

「そうだね。空、疲れてたみたいだよ。」

「……しずく、何かあった？」

心配そうに見つめるその瞳の色が青緑でないことを確認している自分に気づく。駄目だよ私。今日の前にいるのは空。海じゃない。

「大丈夫、何にもないよ。」

声が少し上ずってしまったように思う。空は気づいただろうか……。

「そっか……。なら良いんだけどさ、もし何かあったらおれに言
って。しずくのためなら何でもするから。」

にっこり笑う空は眩しくて、そして、綺麗すぎて……直視でき
なかった。

まさかの・・・

おかしい。絶対何かが変だ。

おれが覚えている限り最後に時計を見たとき、時刻は7時過ぎだった。そして気がつくと目の前にしずくがいて、もうすぐ8時半になっていた。

約一時間半の空白。これはいったい何なんだ？しずくは「疲れてみたいだよ。」って言ってたけど、どうもそれだけとは思えない。ぼうっとしてただけなら、当然その間も意識はあるわけだから記憶もあるはずだ。でも実際記憶はなくて、空白の時間に自分が何をしていたのか全く思い出せないのだ。

今日は帰りが遅いな、と思いながらソファに横になって彼女を待っていたところまでで、おれの記憶は途切れている。そして気がつく、空いた食器が置かれたダイニングテーブルが目の前にあった。一瞬何が起こったのかわからなかった。これは正直異状だ。ぼうっとしていたってレベルじゃない。

夢遊病ってやつなのか？眠っている間に外を歩き回る人がいると聞いたことがある。もし自分がそれでしたら、と思うと背筋が凍る。まさか、そんなことはないよな。まだ証拠も揃ってないし、断定するには早すぎる。とりあえず様子を見たほうがいいか……。

「おはよう。今日は遅かったね。」

昨日は自分が病気なんじゃないかとか、色々深刻に考えすぎて眠

れなかったんだよ……。心の中では言い訳をするが、口には出さない。

「うん。ちょっと寝坊しちゃったみたい。」

とりあえずそれだけ言って席に着こうとしたとき、背後で物音がした。何かが窓を軽く叩いているようだった。何だろうと振り返ってカーテンを開けると、そこには一羽の白い鳩が待っていた。

「何だった？」横からしずくが覗き込む。

「たぶん、伝書鳩。」そう言いつつ窓を開ける。

「えっ？伝書鳩？」いまどき珍しい単語に彼女が聞き返す。返事はせずにしゃがみ込み、鳩の足元にくくり付けられた紐を解いて手紙はずす。そして丸まった手紙を逆方向に丸めてから広げた。

「……。火凧本部からだよ。」

それは除影師を総轄する非公式組織。本部から伝書鳩で連絡が来るのは前から知っていたことなので別に驚きはしなかった。活動が公になるのを防ぐためにこの様な原始的な手法を取っているのだ。鳩には結界が張られていて一般人には見えないようになっているのだが……。しずくなら見えてもおかしくはないか、と妙に納得してしまった。しかし、受け取った手紙の内容には戸惑いを隠せなかった。

「三級除影師、晴野空殿。上記の者の準二級除影師への昇級を認める。20××年5月18日。火凧関東支部長、赤川忠文。……昇級？すごいね、空。」

自分でも状況がよく理解できていないため、彼女に説明すること

ができない。何で……？何でおれが昇級？正直あり得ないのだが、支部長が認めてるんだから、間違いではないみたいだ。でも、何でおれが？

「えーっと。とりあえず、しずくには昇級制度とか、よく分らないよね。まずは認定試験の話をしないと……。」

というのは口実に過ぎない。自分でも一度落ち着いて状況整理をしたかったのだ。

「うん。でもその前に朝ごはんね。遅刻しちゃいそうだし。」

確かに。この辺り、しずくはちゃっかりしていると思う。とりあえず今は時間がないので、この話は後回しになった。

認定試験って？

「よし。ごめんね、待たせちゃって。」

玄関の鍵を閉めてから私は門の前で待っているその背中に声をかけた。

「こっちこそ、ごめん。戸締り全部任せちゃって。」

私が追いつくの見計らって空は歩き出した。

「さっきの話の続き、聞かせてもらっても良い？」

「うん。最初に言っとくけど、説明でわかんないところあったら言ってね。」

答えられるかは別として、と自信なさげに苦笑いしつつ彼はそう付け加えた。

「はい。お願いします。」

急に改まって返事をしたのが可笑しかったのか、彼は笑いを堪えていた。落ち着いてから軽く咳払いをして、彼は話し出した。

「では、これから認定試験及び昇級制度についてお話します。」
「なんだか偉そうなその口ぶりに笑いそうになってしまったが、かろうじて吹き出さずにすんだ。」

「――まず、除影師見習いが正式に除影師として認められるために認定試験が行われます。これは志願者が本部に受験を申請して、本部がそれを認めることで初めて受験資格が得られます。除影師認定試験は誰でも受けられるわけではなく、少なくとも除影師一名の推薦が必要だからです。」

すらすらと滑らかに話すその様子はまるでアナウンサーのようだった。

「じゃあ、空も誰かに推薦してもらって受験したんだ。」

「うん。おれは師匠に推薦してもらったんだ。」

「なるほど。」

「そのようにして受験資格を得た志願者は認定試験に臨むことになります。認定試験の内容は実技一本。そもそも除影師の素質を持った人材が稀なので、筆記試験でふるいにかける必要がないためです。」

「待って、あの、除影師の素質って？」

「一つ目は夜影の姿を確認できること。ある程度は靈感がないと夜影は見えないからね。二つ目は身体能力。いくら見えても戦えなければ意味がないってこと。」

「私、そんなに運動神経よくないし、大丈夫かな？」

「しずくは超能力あるし、戦い方はこれから身に付けていけば大丈夫だよ。それに日程が決まってるわけじゃないから焦らなくても良いよ。」

「それどういうこと？ 日程決まってないの？」

「うん。火凧の除影師認定試験は全国一斉に行うわけじゃないんだ。志願者が受けたいと思ったときに申請して、受験資格が得られ

たら本部が詳しい日程を決める。だから、しずくが受けたいときに受けられるんだよ。」

「そうなんだ。」

「えーっと、どこまで話したっけ？」

空はちよっと困ったように笑いつつ、頭を掻いた。私が話を脱線させてしまったので、申し訳ない気分だ。

「たぶん、認定試験が実技一本ってところまで。」

「あっそうだ、そこだ。その実技試験の内容はいたってシンプルで、受験者が自力で夜影一体を退治できれば合格となります。」

「誰の手も借りずにひとりで、夜影を倒すってこと？」

「うん。そういうこと。立会人は手助けも、助言も一切許されないんだ。」

「じよ、助言も!？」

「うん。だから立会人はただ見守ることしかできない。」

「そうなんだ。シ、シビアだね。」

「そりゃ命に関わる仕事ですから。自分の身を守れないやつには除影師なんて勤まらないよ。」

まあ、おれが言えるようなことでもないけど。と最後に彼は少し表情を曇らせながら呟いた。

それは空自身が過去に私に助けられたことを言っているんだと気づくには少し時間がかかった。

違和感

「認定試験のことはだいたいわかってくれた？」

「うん。」

彼女はこっちを見ながらゆっくりと頷いた。

「それじゃ、今度は昇級制度だね。まず、除影師には階級があつて、それは倒せる夜影のレベルによって決まるんだ。」

「夜影にも強いのと、弱いのがいるってこと？」

小首をかしげる仕草が可愛すぎて見ていられないので、さりげなく顔を背ける。

「うん。そうゆうこと。夜影のレベルは一番上からS、A、B、C、Dの5段階に分けられる。それにあわせて除影師のレベルも5段階に分かれているんだ。上から一級、準一級、二級、準二級、三級っていうふうだね。」

「なるほど。」

「さっき話した認定試験では一番下のDレベルの夜影を自力で倒せれば合格になるんだ。無事試験を終えて除影師になると、その時点で三級除影師に認定される。」

「そっか。じゃあ私も除影師になれば、自動的に三級除影師って肩書きになるのね。」

「うん。そうだね。」

「えーと、それで、どうやったら昇級できるの？」
眉間を寄せて難しい顔をした彼女が言う。

「それは簡単。昇級試験に合格すれば良いんだよ。」

「また実技だけ？」

「うん。でも認定試験のときと違って、受験申請する必要はないんだ。昇級を望まない人なんかいないだろうからね。」

「あー、そうだね。」

「で、もう一つの大きな違いは、昇級試験は抜き打ちで行われるってこと。」

「ぬ、抜き打ち!？」

彼女は驚いて目を見開いた。

「うん。本当の実力を計るためにあえて試験の日程を本人に知らせないで行うんだ。本人にバレないように立会人もなし。カラス型のロボットが映像を本部に送って、本部の審査員が合格か否かを判断するんだ。」

「じゃあ、いつ試験だったか本人は分からないのね。」

「そうだね。」

「うーんと、つまり昇級試験では自分より格上の夜影と戦うんだよね。でも、そんな都合よく一つ上のレベルの夜影が現れるのかな

？」

なかなか理解度が高い。おれは初めて昇級制度のことを聞いたとき、こんな質問思いつかなかった。

「確かに、望んでいるレベルの夜影が偶然自分の前に現れるなんてことは稀だね。だから本部が他の場所からそのレベルの夜影を送るシステムになってるんだよ。」

「あつ、そっか。それならいつでも試験ができるね。すごい。」

「うん。まあ、これは全国にネットワークを張り巡らせている火凧だからこそ、できるシステムだね。」

「なるほどね。……あつそうだ。そういえば、夜影のレベルってどうやって知るの？」

「それは除影師の剣にはめ込まれている石が教えてくれるんだ。霊石っていうんだ。」

「れいせき……？」

彼女はおそらく初めて聞く言葉に戸惑っている様子だ。

「霊力をもった石だから、霊石っていうんだ。その石が夜影を合体前のひとつひとつの魂に分解する。そして分解された魂はそれぞれのあるべき場所に戻っていく。」

「その石のお蔭で夜影を倒せるのね。」

「うん。霊石様さまだよ。」

「でも、石がどうやって夜影のレベルを教えるの？」
不思議そうに大きな瞳がこちらをのぞく。

「色だよ。いつもは透明の石なんだけど、夜影が現れるとそのレベルに応じて色を変えるんだ。Sレベルの夜影は赤、Aは黄色、Bは緑、Cは青、Dは白に光る。」

「へえー。便利ね。」

「うん。これは除影師の身を守るために必要不可欠なんだ。格上の夜影に出会ったら、逃げる。これ鉄則だからね。でも昇級試験のときはレベルが分かんないように夜影に細工をする。受験者が逃げないようにね。」

「あの……でも、それだと霊石が光らなかったとき、試験だつてことが分かっちゃうんじゃない？」

「あー。霊石が光らないときって意外とあるんだよ。例えば何体かの夜影が同時に現れたときとか。あとは……どこのレベルにも属さない夜影が現れたときかな。例えば夜影の強さがAとBの中間で、どっちとも言えないような微妙な位置だと霊石は光らない。」

「そっか……。あつ、また話戻るんだけど、昇級試験でその夜影を倒せなかったら、受験者はどうなるの？」

彼女は不安そうな顔で、慎重に尋ねた。

「そのときは近くで待機している試験官が助けてくれる。試験官は特殊な結界を張って姿が見えないようにしているから、どこにいるかは分からないけどね。」

「そっか。良かった。」

彼女は安心したように肩をなでおろした。

「で、こっからが本題なんだけど。今日伝書鳩でさ、おれに準二級への昇級が認められたっていう手紙が来たでしょ。あれ、おれ全く身に覚えがないんだよね。」

「えっ！ そうなの？」

予想通りの反応。

「うん。だって今まで戦ってきて、霊石が反応しなかったことないし。格上の夜影なんか今のおれに倒せるわけないし。」

「でも昇級認定されたってことは実際試験を受けて合格したってことなんだよね？ 本部の人が間違えるってこともあるの？」

「本部がそういうのを間違えるなんてことは絶対ないと思う。でも、どうしてもおれは信じられない。」

「そっかあ……。あっ！！」

急に彼女が大きな声を出すので、

「ど、どうかした？」

恐る恐る聞いてみると、ちょっと待ってね、と言って彼女は目を瞑って考え込んでいた。というより、何かを必死に思い出そうとしているようにも見えた。

「昇級試験のとき、霊石は反応しないから……。えーと、つまり石の色は透明なんだよね。」

ゆっくりと自分に言い聞かせるように彼女は言った。

「うん。透明だね。」

「昨日……あなたが夜影を倒したとき、剣の靈石光ってなかった。透明だった。」

昨日は夜影に出会ったという記憶さえない。それに、いつもは名前で呼んでくれる彼女が、なぜか“あなた”という言葉を選んだのに少し違和感を覚えた。

「昨日って、おれ、夜影と戦った覚えはないけど……。」

「うん。空は記憶にないみたいだけど、でも確かに夜影を倒していた。私、一緒にいたから。」

彼女の言い分が正しいとすれば、記憶がぶっ飛んでいる間におれは夜影を倒したということになる。つまり、あの空白の時間に夜影と戦ったということだ。

まさか眠った状態で戦ったなんてことはあり得ないし……いや、もしかしたら可能なかもしれない。じゃなきゃこの事実の説明ができない。

「あのさ、そのとき何が起こったのか、詳しく知りたいんだけど……。」

彼女は困ったような顔をして、しばらく黙っていた。そして途切れ途切れに話し始めた。

「あ、あのね。こんなこと突然言われても……混乱っていうか、その、信じられないと思うんだけど……。」

そこまで言いにくいことなのかな……？そんなことを思っていると不意に視界がぼやけて、意識が飛んでしまった。

あれ？

「おい、こら。」

突然低い声がしたと思ったら、頭を軽く小突かれた。見上げると、そこには青緑の瞳があった。

「か、海!？」

驚いて思わず声が裏返る。彼は眉間にしわを寄せて真っすぐこちらを見ている。と言うか、睨み付けている。

「今お前、空に俺のこと話そうとしただろ。」

この人、今自分がどれほど恐い顔してるか分かってるんだろうか……。ものすごい迫力に圧倒されてしまって、何も言えなくなる。

「……はい、その通りです。」目を逸らしたいけれど、一度この瞳に捕まってしまうと自分からは逸らせなくなる。本当に不思議。

「この馬鹿。余計なことするな。」そう吐き捨てながら彼は目を逸らした。やっと解放されて安堵の溜息が漏れる。

「ごめんなさい。」素直に謝罪する。海のことを全然考えていなかった私が悪いのだから。海は自分のことを空に知られたくないのだろうか？

「……まあ、しかし、隠し通すのもそろそろ限界だとは思っていた。」

これは、私をフォローしてくれているのか、それとも別段深い意味はいいのか……分かりにくい。

「あの、私なんかが首を突っ込むことではないかもしれないけど、空にはちゃんと海のこと伝えなくちゃいけないと思うの。」

少し控えめに、それでも彼の目を見て私は言った。

「それは俺が一番よくわかっている。全くもって大きなお世話だ。」

うわー、お、怒らせちゃった。余計なこと言い過ぎたかな……？

「そう……だよ。出すぎたこと言ってごめんなさい。」

どうしよう。目が、恐い。何て言えば許してもらえるの？……むしろ何も言わないほうが良いのかな？

「……。お前からは何も言うな。俺が事情を説明する。」

「えっ、海が説明するって……ど、どうやって？」

「簡単だ。空宛に手紙を書いておけばいい。」

「あ、そっか！確かにそのほうが簡単だね。」

「お前も読んでけよ。まだ俺のこと、これっぽっちも知らないだろうからな。」

そう言いつつ、海は人差し指と親指の間にほんの少しだけ隙間をつくって見せた。それ、1ミリもないじゃないですか……。

「うん。わかった。」

「紙あるか？」

「えーっと、ノートの切れ端で良いなら、あるよ。」

自分のノート使えば良いのに、と思ったがすぐに納得した。そういえば空がノートを机の上に出してるところなんて見たことがない。授業中はいつも寝てるか、本を読んでいる。つまり、そもそもノート自体持ち歩いていないから、海は私にそう言ったのか……。

話しながら歩いていたので20分ほどかかる学校までの道のりも、次の角を曲がればすぐ校門というところまで来ていた。

「じゃあ、あとで一枚くれ。」

「良いけど、いつ書くの？」

「……授業中。」

「えっ……その手紙って、すごく大事なことを書くんだよね？あの、良いの？授業中なんか書いて。先生に見つかったら没収されちゃうかもしれないよ。」

「大丈夫だ。対策は練ってある。」

ええー！？何それ。た、対策って、本当に大丈夫なの……？

「ああ、そう。なら良いんだけど……。」

心中は穏やかではないけれど、私は必死に平静を装った。もう校門も通り過ぎて、昇降口に入るところだった。

「あっ、しずくさん！おはようございます！」

自分のクラスの下駄箱までたどり着くと、ちょうど上履きに履き替えようとしていた春菜が私に気づいて声をかけてくれた。

「あー、おはよう。」

何気なく後ろを振り返ると、先ほどまでそこあった無表情の顔が

ないのに気づいた。いつの間にか海は自分の下駄箱の方に行ってしまったらしい。この単純作業はあまり好きじゃないな、と思いつつ私も靴をしまつて上履きに履き替える。春菜はにこにこしながらそれを待っていてくれた。

「しずくさん、いつもなら私より先に教室にいるのに、今日はどうしたんですか？」

「そ、それはね。今日はちょっと出かける前に色々あったから。」

「えーっと、ごみ捨てとかですか？」

「うん。まあそんなところ。」

「遅い。」

「わっ！……ご、ごめんなさい。」

突然低い声がしたのに驚いて、思わず反射的に謝ってしまった。その声の主は仏頂面で目の前に立っている。

「まったく、こっちまで遅刻になるだろーが。」

だったら私なんか待たないで、さきに行けばいいんじゃない？……。と思っている私の隣では春菜が目丸くしている。一瞬の沈黙の後、我に返ったのか彼女は慌てて口を開いた。

「すすみません！私が悪いんです！私が声をかけたせいで、しずくさんにタイムロスさせてしまったんです……。あの、だから、しずくさんは悪くないです。」

「お前が謝る必要はないだろ。さっさと行くぞ。」

そう言いつつ海は足早に歩き始めた。少し遅れて私と春菜がそれに付いていく。

「おっ、空じゃん！おはよう！！」

教室に入ると窓際に固まっていた男子の中から声が聞こえた。山田くんだ。

しかし海はそれには目もくれず、まっすぐ自分の席のほうに歩いていった。

「あれっ？今おれ、めっちゃスルーされた？」

山田くんは大して気にした様子もなく、おどけて言った。さすがに人気者は器が大きい、と私は妙に感心してしまった。でも、さっきの海の様子はどうも引かかる。無視したというより……。

「いや、気づかなかったんじゃないか？」

そう、私もその意見に賛成だ。誰が言ったのか大体の予想はつくが、念のため彼らの様子を窺うと、案の定白川くんの意見だった。

「えー、でも今の声のデカさで気づかないやつっていんのかなー？」

山田くんの隣の男子が皮肉じみた声で言う。

「空って結構ぼうっとしてること多くないか？今のも何か考え事してたとか。」

白川くんの言うとおりだ。確かに空は何か考え事をしてるときは、そこに意識が集中してしまって、周囲に十分注意が回らない。実際昨日も先生に当てられたのに気づかなかった。

しかし、海もそうなのかと言われると、正直よく分からない。

「そっかし、じゃ、悪気はないんだな！良かった、良かった。」
笑顔で山田くんがそう言うので、隣の男子も納得したのか、それ以上は何も言わなかった。

デジャヴ

……なんだか妙に視線を感じる。もしや、登校早々やらかしたか？
今まではそれほど不便には感じていなかったが、学校生活においては耳が聞こえないのは致命的なのかもしれない。誰かに話しかけられてもわからないから、意図せずとも相手を無視することになるからだ。

正直のところ、面倒くさい。人間関係とか、そんな複雑なものをいちいち気にして生きるのが人間の本質なのかもしれないが、俺としては面倒くさいこと極まりない。

できるだけ、誰とも目を合わせないように下を向いて歩く。静かに席に着き、机の木目を眺めて視線が散るのを待つ。こんなやつ、見る価値ないだろ……。早く、早く解放してくれ。

気持ち悪い。同じような光景が、重なって見える。……デジャヴ。

不意に隣の椅子が引かれる。白い手。続いて黒い髪が視界に入る。そんなつもりはなかったが、いつの間にか顔がそちらを向いている。長い睫毛。漆黒の瞳。微かに赤みを帯びた頬。桃色の唇。洗練された横顔に息を吸うのも忘れる。

そうしているうちに、彼女の顔がこちらに向けられる。口が開いたのでその動きに視線を集中させると、頭の中で瞬時に言葉に変換される。全くよくできてるな、と他人事のように感心する。

「はい、これ。さっき紙ほしいって言ってたでしょう。」
その柔らかな微笑みに一瞬思考が停止する。

「ああ。悪いな。」言ってから気づく。こういうとき、もっと良い言い方があるだろ……。

「足りなくなったら言ってね。」

あまり感じの良い返事ではなかったはずなのに、彼女の顔は形状記憶でもされているのかと思うほど、先程と全く変わらない笑顔だった。

「……。もう一つ、頼んでも良いか？」

「うん。私、何すれば良い？」

彼女は一瞬不思議そうな顔をした。この顔は俺にしか見えていない。

「授業中に俺が指されたら教えてくれ。」

「うん、わかった。」

1時間目は英語だ。リスニングの問題が当たったらどう切り抜けようかと考えあぐねていたのだが、幸運にも今日は教科書の長文がメインだったので、その心配はいらない。ふと周りを見回すと、机の下で本や漫画を読んでいる生徒が何人か見受けられる。当たる順番が席順なので、気楽に内職ができるというわけだ。俺にとっても好都合である。

さて、何から書こうか……。彼女が読んでも問題ないように書かねばならない。そこが一番厄介な点なのだが、手紙を読めと言ったのは自分なので引くに引けない。余計なことを言わなければ良かったのだが、もう遅い。

とりあえず頭の中で文章を考える。ある程度形になるとノートに書いてみる。すると改善点が浮き彫りになるのだ。この表現は分かりにくいかもしれない。こっちの言い方のほうが良いか、いや、むしろないほうが良いような気もする……。そんなことを繰り返しながら少しずつノートの白い部分が埋まっていく。

半分ほど埋まった頃に肩を軽くたたかれた。振り向くと彼女の口が動いているのが分かった。

「和訳。」そう言ってから自分の教科書を俺の目の前に差し出す。どの文だろうと思っていると、彼女が指で教えてくれた。

「騒音に掻き消されて彼女の言うことは彼に聞こえなかった。」

……訳すところ間違えたか？ 答えた途端に前の席の女子が驚いたように振り返った。他にも同じような顔をしてこちらを振り返る生徒がちらほら。先生のほうを見ると、これまた驚いた様子で、目を丸くしている。

「晴野くん、いつも寝てるから指してなかったんだけど……やれぼできる子なのね。その文、実は今回の単元で一番難しいところだったんだけど、すごい綺麗に訳してくれて……先生、正直負けた気分だわ。」

……は？ 負けた？ 何に負けたんだ、あんたは。最後のコメントはよく理解できない。

「晴野くん、すごいね。」前に座っていた女子が話しかけてきた。

「何が？」

「えっ？……何って、英語できるのが、すごいと思ったんだけど。」

「いや、別に大したことじゃないだろ。」

「えっ、あっ、そうなんだ。」

今の言い方はまずかったか……？若干引かれている気がする。

「はいはい、みんな静かにして！次の文、隣の雨野さんね。訳して。」

先生が両手を叩きながらそう言うので、俺は慌てて彼女に教科書を返した。

優等生なんかじゃない

海って、勉強できるんだ……。ちょっと失礼かもしれないけれど、かなり意外だった。英語とかペラペラなのかな？海が英語読んでるところとか、ちょっと聞いてみたいな……。なんて思ってみたり。

それにしても、やっぱり空と海は正反対だ。性格はもちろんのとだけ、知識とか、頭の回転まで違うみたいだ。得手不得手も違うかもしれない。

正直、空はそこまで頭が良いほうではないと思う。でも、絵が上手で色のセンスも良い。美術は先生にも褒められていたくらいだから、芸術の才能があるのだと思う。

海は、と言うと、まだ知らないことが多い。でも、少なくとも頭は良いのだと思う。英語だけかもしれないけれど……。

2時間目は数学。私の苦手な石神先生だ。厳しいと評判の石神先生は、数学が苦手な生徒にも容赦なく難問を当ててくるのだ。しかも席順や番号順ではなく、ランダムに……。いつ当たるか分からないので、どの生徒も気が気でない。この緊迫した空気の中で内職するなんて、すごい神経だと思いつつ、ときどき隣の様子を窺う。

真剣な目。やっぱり睫毛が長い。見れば見るほど綺麗な横顔にいつい見入ってしまう。そうしていると、いつの間にか背後に人の気配を感じた……。しまった!!

「俺の授業で内職とは、良い度胸だな。」

私の不注意で見つかってしまった。今更ながら、彼の左肩を軽く

叩く。振り向いてやっと彼はこの絶望的な状況に気づいたようだった。しかし、何故か表情が一ミリも変わらない。

「……何のことでしょうか？」

無表情のまま、後ろの石神先生をまっすぐ見つめて彼は言った。

まさか、まさか対策って……しらばっくれるってこと！？

「何のってお前……。」

まさかの言い逃れに先生も呆れ顔になった。しかし次の瞬間、その表情が一変した。目を見開いて、何かを見ている。なんだか意識がどこかに飛んでいってしまったかのように。しばらくその状態が続いたが、突然、何事もなかったかのように先生は口を開いた。

「——悪い。見間違いだったみたいだ。じゃあ空、問2の答え、よろしく。」

そう言って先生は教卓のほうに戻っていった。

見間違いって、どう見ても手紙書いてるのバレバレなのに……。

先生一体どうしちゃったんだろう？

海のほうを見ると、こちらも先程とまったく同じ無表情だった。そして何も言わずに横から私の教科書をかつさうと、そのまま席を立てて黒板のほうに歩いていった。

教科書の問題を見ながら黒板に途中式を書いていく。さすがに無駄がない。しかも速い。あっという間に解が出てきた。やっぱりこの人、頭良いんだ……。

「……お前、今日どうした？熱でもあるのか？」

真剣な顔で石神先生が言うので、クラス中に笑いが湧き起こった。いつもの空では、絶対解けないような難問を、海はいとも簡単に解いてしまったのだ。先生はちょっと悔しそうに丸を付けた。

「今日の空すげーな！マジ優等生！！」山田くんの声がさらに笑いを誘う。石神先生の授業とは思えない盛り上がりだった。その中で依然として無表情の海はかなり浮いていて、思わず私も笑ってしまった。

「笑うな。」席に戻ってきた海が私に教科書を手渡しながら仏頂面で言った。

「ごめん。みんな笑ってる中で海だけ無表情なのが、すごく浮いてて可笑しくなっちゃった……。」

「俺は、熱もなければ、優等生でもない。」

席に腰を下ろしながら静かにそう言った声は、一瞬怒っているようにも聞こえたが、そこはかとなく、寂しそうにも聞こえた。

私は何と言ったら良いのかわからなかったので、ただその横顔を見ていることしかできなかった。

白い夢

変な夢をみた。

真っ白な床、真っ白な壁、真っ白な天井。どこもかしこも真っ白な長い廊下を歩いている。

ここはどこなんだろう？見たこともない場所。病院だろうか？いや、なんとなく違う気がする。

ある部屋の前で足が止まる。見上げると1－Aと書いてある。教室だ。じゃあ、ここは学校なのか……。それにしても、静か過ぎるな。

ドアを開ける。そこにいた子どもたちの視線が一斉にこちらに向けられる。

うわっ。気持ち悪っ。

みんな同じ顔だ。

正確に言うと、「同じような顔」。制服を着ているから一見すると全員同じに見えたのだ。しかし、よく見ると髪形や顔のパーツが少しずつ違う。男女比は3対2くらいか。

何なんだ、この学校。何で、こんな似たような子どもばかりが集まっているんだろう？

気持ち悪い。全員がおれのことをじろじろ見てくる。何でこんなに見られなきゃならないのか、わからない。そんなに見ないでよ……。ああ、気持ち悪い。

できるだけ、誰とも目を合わせないように下を向いて歩く。静かに席に着き、机の木目を眺めて視線が散るのを待つ。

不意に隣の男子が肩を叩く。あれっ。おかしいな。声が聞こえない。

い。確かに何か喋っているのに……。でもその口を見ていると、自然に頭の中に言葉が浮かび上がってくる。不思議な感覚。

「おはよう。イチゼロゴニー。」

は？1052？何それ、変なあだ名……。

「……おはよう。キューサンイチ。」

おれの口が言っている。なんだか勝手に口が動いているみたいで、変な気分。いや、それより、何でお互い番号で呼び合ってるんだ？おれは1052で、この子は931？意味が分からない。そういうあだ名が流行っているのか……。？いやいや、そんなわけないだろ。

「コードネームはテイルだよ。」

コードネーム！？スパイごっこでもやってるのかな。

「――あの子、何で1052は耳が聞こえないの？」

何でって、こっちが聞きたいよ……。

「知らない。」

また勝手に口が動く。

「知らないの？自分のことなのに……。」

なんか感じの悪い子どもだな。

「うん。教えられてないから。」

「ふーん。じゃあさ、博士に聞いてみたら？教えてくれるかもよ。」

博士？誰それ……。本当、何なんだこの夢。妙にリアルだけど、全然理解できない。

「……うん。」

ふと周りを見回すと、前の席の女子二人がこちらをチラチラ見ながら話している。

「アメノ博士の新作なんだって。」

雨野？しずくの親戚？さっきの子が言ってた博士っていうのも、その人のことなのか？

「でも、耳聞こえないんでしょう？どうしてかな？」

女の子は明らかにおれの顔を見て言った。もしかして、いや、もしかしなくてもおれのこと？……ちよつと待て、ってことはおれは雨野博士の新作ってことになるんじゃないのか？新作って、一体どういうこと……？

「うーん、なんかね、博士が新しい分野に挑戦してみたんだって。だから、いろいろ問題が多くて、耳聞こえなくなっちゃったんじゃないかな？」

「あー、そっかあ。そういうことなんだ。失敗作じゃあ、仕方ないよね。」

失敗作！？何だよそれ。人間に言うことじゃないだろ！ふざけんな！

「さっきはごめんな、1052。」

女子の発言にいきり立っていると、隣の931がおれの肩に手を置いた。

何だよ、その目は。あからさまに可哀相って目で見るのやめてくれよ。

「何のこと？」

おれの口がまた一言で返す。なんか、勝手に口が動くのにも慣れてきたな。

「だってほら、さっき嫌なこと聞いちゃったからさ。普通、失敗作だから、なんて自分で言いたくないじゃん。」

うわ、うつぜー！ー！！なんだこいつ、喧嘩売ってんの！？最悪だ。何で隣がこんなやつなんだよ……。

おれは931を思いっきり殴ってやりたかったけれど、自分の体はいつの間にか教室を出て走っている。体が勝手に動いているんだ。何か、逃げてきたみたいで嫌だな……。そのまま教室から一番離れた場所にあるトイレに駆け込んだ。

ドアを閉めて呼吸を整える。何とはなしに見上げた先には鏡があった。

驚いた。そこに映っていたのは……おれじゃなかったんだ。

顔は幼い頃のおれと全く同じ。しかし、瞳の色が違った。

空色じゃなくて、緑がかった深い青色。海の底みたいな、深い色だった。

誰なんだろう？そう思いながら鏡に映る少年を見ると、その瞳から大粒の雨が降り始めた。無表情のまま、ただ静かにその子は泣いていた。その姿は、見ているだけで苦しくなるほど痛々しかった。

何でだろう。何度も同じ光景を見たことがあるような気がする……

∴。
デジャヴ？

もう一人のオレ

「なるほど。そういうことか……。」

驚いた。というのも、手紙を読み終わった空の様子が、予想に反してとても落ち着いたものだったからだ。もっと衝撃を受けるかと思っていたのに……。

「あの、びっくりしなかった？」

私は恐る恐る聞いてみた。

「えっ、あー、そりゃ驚いたけどさ……言われてみれば、まあ、納得って感じかな？」

彼は苦笑いを浮かべつつ、テーブルの上にその手紙を置いた。先生に取り上げられることなく無事生還した手紙は家に帰ってから空に読んでもらうことになっていたのである。

「そっかあ。じゃあ、その手紙の内容、全部信じる？」

「うーん、とりあえずね。……ていうか、字まで別人だよね。」
頬杖をつき、いたずらっぽく笑う顔はいつもの空だったので、少し安心した。自分の中にもう一人、別の人間が存在するというのは、どんな気分なんだろう……。私には想像もつかない。

「――あっそうだ、何か最後にしずくにも読ませてほしいって書いてあったんだ。」

思い出したようにそう言って彼は手紙を私に手渡した。

これが海の字か……。本当に空とは全く別人の字だ。なんという

か、機械的な字だった。

空へ

とりあえず、落ち着いて読んでほしい。俺はお前の中のもう一人の人間だ。名前は海。かい、と読む。しずくが付けた名前だ。瞳の色が海のような緑がかった青色をしているから、そう名づけたらしい。

話が逸れたが、簡単に言ってしまうえば、晴野空は二重人格者だ。晴野空という人間の中に空と海という二人の人間が存在する。俺とお前、二人合せて晴野空だ。

俺は耳が聞こえないし、痛みも感じない。しかし、記憶力はお前より遥かに良い。一度覚えたことは絶対に忘れない。だから必要であれば力を貸す。俺とお前は切っても切れない関係だからな。俺とお前は密接に関わっているんだ。これからそのことを詳しく書く。

俺はお前が見聞きしたものは何でも知っている。お前の目を通してものを見たり、耳を通して音を聞くことができる。でもお前の考えていることまでは分からない。

俺は自分が晴野空として行動することもできる。つまり俺は好きなきに晴野空の体を支配することができる、言い換えれば自由に体を動かせるというわけだ。

一方お前は俺を知らない。それはなぜか。正確にはよくわからないが、俺の勝手なイメージだと、お前は俺の前に立っているからだ。

俺はその後ろに立っているから、お前のすることが全部見える。それに對してお前は真っすぐ前を向いていて、絶対に後ろを振り返らない。だから俺の存在自体も知らない。おそらく俺とお前はそういう立ち居地で晴野空の中に存在するのだと思う。説明が下手で申し訳ない。

それから、俺が晴野空のときにしたことはお前の記憶には残らないらしい。現にお前には昨日の夜7時くらいから8時半ごろまでの記憶がないはずだ。そのとき行動していたのは俺だからだ。

そのとき何が起こったのかを教える。

まずは、なぜ俺が出てきたかというところ、近くに夜影の気配がしたからだ。お前には倒せそうにない相手だと瞬時に分かった。だから俺が代わりに斬らなければと思って家を出た。

気配のするほうへ行くと、夜影が人に襲いかかろうとしていた。俺はなんとか間に合って助けることができた。まさか、それがしくだとは思わなかったが……。

夜影を倒したとき靈石が光っていないことに気づいたが、CとDの間のレベルだからだろうと思って大して気にしなかった。昇級試験だとは微塵も思わなかったんだ。

身に覚えがないのに昇級認定なんてされて驚いただろう。試験を受けたのが俺だとしても外見は晴野空なわけだから問題ないといえは問題ない。しかし、お前が嫌なら昇級は取り消してもらって構わない。

とりあえず、今お前に伝えたいことは全部書いた。わからないこと、聞きたいことがあったら言ってほしい。それから、俺が晴野空として行動したときは極力その記録をしておく。あとちょっと試してみたいことがあるから、またお前宛に手紙を書くかもしれない。

追記

まだ俺のことを十分理解できていないと思うので、しずくにもこの手紙を読ませてやってほしい。

海より

なるほど。空と海の関係はなんとなくわかった。それより、海は耳が聞こえなくて、痛みも感じないなんて……知らなかったし、気づかなかった。

今朝、山田くんが声をかけたのに気づかなかったのも、耳が聞こえないからだだったのか……。言われてみれば納得。でも、どうして最初に言ってくれなかったんだろう。言ってくれば私も気をつけられたのに……。

私のこと、信用してくれてないのかな？

少しだけ、寂しいな。

もっと海に近づきたいと思うのは、いけないことなのだろうか……。

「ねえ、海ってさ、本当におれと瞳の色違うの？」

なんの前触れもなく尋ねられたので、一瞬何を聞かれたのかわからなかった。

「あつ、うん。空は澄んだ水色だけど、海は深い海の底みたいな緑がかった青色なの。」

「青緑？」

そんなに気になるのかな……。空にしては珍しく真剣な顔だ。

「うん。青緑。」

「そうか、じゃあ、あの夢に出てきたのって……。」眉間に皺をよせた顔が、海みたいに見えた。

「夢？」

「あっいや、なんでもないんだ。ありがとう。」

またいつもの絵に描いたような笑顔に戻った。やっぱり空はこういう明るい顔が似合う。

それにしても、空はどんな夢を見たんだろう？ なんだか意味深長な発言だった。もしかして海と何か関係のある夢だったのだろうか……。気になる。

赤点

あの夢に出てきた少年。それが海、つまりもう一人のおれだったのか……。

6月に入って、そろそろ梅雨入りかと思う今日この頃。5月の終わりにあった中間テストの解答が返ってきた。予想通りボロボロ。数学、英語、古典は追試決定だった。絶望するおれの顔を見て笑ったはずくのほうは、どの教科も平均くらいだと言っていた。ちくしように、全敗だ。

「ナオは追試じゃないの？」

昼休み。おれは教室の壁に貼られた追試の掲示を見ながら言った。

「全部ぎりぎりセーフ！」

いつもの彼らしい満面の笑みがこのときばかりは憎らしく思えたけれど、それを表に出さないように必死に顔の筋肉を制御する。

「空、追試なのか？」

後ろから声が聞こえたので、二人ともそちらを振り向いた。

「まあ、ね。」

唇の両端を無理に引き上げる。その顔が余程可笑しかったのか、それを見た二人が同時に吹き出す。

「空、優一に勉強教えてもらえぼ？」

笑いがおさまってからナオが口を開いた。

「優一って頭良いの？」

「別に、普通。」

優一はいつも通り冷静に答えたが、それを聞いたナオは目を大きく見開いている。

「普通！？学年トップのお前が普通だったらおれらは何になるんだよ！！！」

「学年トップ！？」

ナオの興奮気味の声につられて思わず大きな声を出してしまった。とたんに教室にいた生徒たちの視線がこちらに集中する。

「別になろうと思ってなってる訳じゃないし。」

こんなことを、ひどくどうでも良さそうに言えるところが羨ましい。しかしながら今の優一の台詞、海が言いそうだな……。

「何それカッコイイ！！そう言うこと言ってみたいわー！」
ナオはすごく楽しそうだ。

「やっぱトップの言うことは違うよなー。」

人気者の声に賛同して他の生徒も話しに加わってきた。自分も追試だから勉強を教えてくれなどと言っている声も聞こえた。

「とりあえず、追試のやつの勉強みるくらいならできるけど。」
いつの間にか優一はたくさんの生徒に囲まれている。その中には女子も混ざっていた。

「じゃあ、まず空をなんとかしてやってよ！」

ナオが真っ先にそう言ってくれたのが非常にありがたかった。

「本当に、よろしくお願いします。」

人にもものを頼むのだから、と思っておれは優一に向かって丁寧に頭を下げた。

「そんな、かしこまなくても普通に教えるって。」

笑いを堪えつつ優一は承諾してくれた。良い友達に出会えてよかった、としみじみ思った。

“俺が追試を受ければ良いんじゃないのか？”

右手がノートに書いた文字だ。おれは左利きだけど、彼は右利きなのだ。相変わらず機械的な文字を書く。

「それはまずいんじゃない？だっておれの試験だし。」

おれは口でそれに答える。これ、はたからみたら異様な光景だな。独り言の甚だしい変なやつみたいだ……。自分の部屋だから人目を気にせずこんなことができる訳だけど、外では絶対できない。

何でこんなことをしているのか、と言えば海とおれが会話をするにはこの方法しかないからだ。おれが行動しているとき、海は同じものを見て聞いている。しかし、おれが右手にペンを持って海に話しかけなければ、彼はその手を動かすことができない。つまり、おれが体を支配している間、海はおれが誘導しない限り体を動かすことができない、というある種のルールみたいなものがあるらしい。

“あんなひどい点数みたら心配になるのは当たり前だろう。俺なら満点取れる。”

「すごい自信だな。でも、おれが満点なんか取ったらカンニングしたんじゃないかって疑われそう。」

“確かに。お前が満点とか、あり得ないからな。”

おいおい、そこ否定しないのかよ、と内心つつこみを入れる。

「だから追試も自分で受けるよ。学年トップの優一が勉強教えてくれるって言ってるし、たぶん大丈夫。」

“わかった。頑張れよ。でも問題見て無理そうだったら、諦めてシャーペンを右手に持ち替えるんだぞ。”

なんか海と話していると、お前はおれの兄貴かつ！って思うときがあるんだよね……。もしかして年上なのかな？

海が存在を知ってから多重人格者について少し調べてみたけれど、人格によって年齢も性別も違ったりするらしい。しずくから聞いた話だと海は頭が良くて、運動神経もおれより上のようなようだ。戦いに慣れている感じがするとも言っていたな。

確かにちよつと口が悪いけれど、基本的に落ち着いた話し振りだし、（これもしずくが教えてくれたのだけど）おれが倒せそうになり夜影に出会おうと代わりに倒してくれたりするし、面倒見が良いのは認めざるを得ないので、本当に年上かもしれない。

「まあ、できるだけ自分の力で頑張るよ。じゃあね。」

すると右手が静かにペンを机の上に置く。こうしておれと海の会話は終わるのだ。

ノートを閉じて椅子にもたれて少し考える。海はもう何度もしずくに会ってるんだよな。どんなこと話してるんだろう。なんか気になる。話、噛み合ってるのかな？

ていうか、しずくは海のことどう思ってるんだろう……。なんか聞きづらいし、聞くのもちょっと恐いな。

部屋の中は空気が淀んでいて、畳と雨の匂いが混ざって何ともいいない匂いがしていた。

懐かしい声

今日は朝から雨だった。

「空は今日追試だね。」

傘を開きながら私は言った。今はまだ小雨だが、予報によると夜には本降りになるらしい。

「うん。遅くなるから先帰って良いよ。」

彼も青い傘を開きながら答えた。

その表情や声はいつもと変わらないはずなのに、なんとなく違和感があった。何が違うのかは分からなかったけれど、やっぱりいつもと違うような気がした。

「――おれ、雨苦手なんだよね。」

しばらくお互い黙って歩いていたが、突然思い出したように空が口を開いた。

「えっ。あっ、そうなの？」

「うん。あっでも、しずくとは全然関係ないよ。雨が苦手なだけで。」

なぜそこで私の名前が出てくるんだろう？三秒ほど考えて私はやっとその言葉の意味が理解できた。

私の苗字の話だ。雨は苦手だけれど、雨野、つまり私のことは苦手ではない。空が言いたかったのはそういうことだろう。

「どうして雨が苦手なの？私はわりと好きだけど。」

「なんでって言われてもなー。自分でもよくわかんないんだけど、なんとなく雨の日は落ち着かないんだよね。湿気多いのが苦手なのかも。」

「そっかあ。感じ方は人それぞれだもんね。」

そう言いつつも、彼はどうなんだろう？と考えている自分に気がつく。6月に入ってからまだ一度も会っていないのだ。空と同じように彼も雨が苦手なのだろうか……。

それは2時間目の物理の時間だった。また突然耳鳴りと頭痛がし始めたのだ。もう慣れっこになったはずの現象だけれど、今回はいつもより酷かった。それだけ夜影のレベルが高いのかもしれない。それにしても学校にいるときに夜影が現れるのは初めてのことだ。早く退治しないと先生や他の生徒まで危険な目に遭ってしまう。保健室に行くのを口実に授業を抜け出そう、そう思って私は先生に声をかけようとした。

「先生。雨野さん、気分が悪いそうなので俺が保健室まで連れて行きます。」

ちょうど1秒ほど早く隣から声がして、先を越されてしまった。さらに私を驚かせたのは、その声が久しぶりに聞く低い静かな声だったことだ。

「えっ？あーそうか、じゃあ行ってきなさい。」

先生はチョークを持ったまま、こちらに振り向いて言った。

「立てるか？」

余程私の顔色が悪かったのか、彼は心配そうに尋ねる。本当に心配してくれているかどうかは不明だけれど……。

「うん。大丈夫。」

強がってそう返事をしたは良いが、足に力が入らなくてよろけてしまった。やはり一人で立ち上がるのは無理だったようだ。

「馬鹿。全然大丈夫じゃないだろ。」

口は悪いけれど、海はちゃんと手を貸してくれた。その手が温かいことを、私は知っている。

ああ、だから頼ってしまうのかもしれない。私が危ないときはこの人が絶対助けてくれる、そう思い込んでいるのだ。なんの確証もないのに、そんなふうに思っている自分がおかしくもある。でも、やっぱり頼ってしまう。その声に、その手の感触に、安心してしまいうから。

「ごめんね。私、こんなじゃ戦えないよね。」

「お前は戦わなくていい。保健室で寝てろ。」

私の肩を支えて階段を下りながら、海はいつも通りそっけない口調で言った。

「うん。ごめんね。」

「……。夜影がどこにいるかわかるか？」

やっと階段が終わった。もう保健室はすぐそこだ。

「たぶん、旧校舎のほうだと思う。ごめんね。もう自分で歩けるから、行って良いよ。」

保健室は一階の一番東側にあるため、旧校舎からは一番遠いのだ。夜影から少し離れたせいか、頭痛も耳鳴りも治まってきていた。

「わかった。……お前、『ごめんね』って口癖なのか？」

ああ、私、無意識に「ごめんね」を多用していたのか……。ごめんね、ごめんねって何度も謝る女ってどうなんだろう。……あまり良い印象ではない。

でも、他に何と言ったら良いのか思いつかない。

彼はしばらくの間、私が何か言うのを待っていたようだが、耐えかねたのか溜息を漏らしながら言った。

「——こういうときは、『ごめんね』じゃなくて、『ありがとう』だろ。」

なんだ、そんな簡単なことだったのか。本当に彼の言うとおりだ。私、馬鹿だった。

「うん。ありがとう。」

海は三秒程こちらをじっと見てから、何を思ったのか無造作にぐしゃぐしゃと私の頭を撫でた。そして何事もなかったかのように、「ちゃんと寝てろよ。」とだけ言って旧校舎のほうへと駆けていった。

今のは何だったのだろう。頭の上にはまだ手を置かれた感覚が残っていた。

彼の顔を思い出して少し顔が熱くなる。今日も彼の瞳の中には、綺麗な海が広がっていた。

「しずく。」

どこかで私を呼ぶ声がした。

「しずく。」

忘れかけていた優しい声。

「しずく。」

何もかも包み込んでしまうような、温かい声。

「しずく。」

それは私がずっと会いたかった人の声。

「しずく。」

本当なら、もう会うことのできない人の声。

「しずく。」

私の大好きな、お母さんの声。

優しい雨とさようなら

旧校舎の裏の空き地が思いのほか広くて助かった。近々取り壊す校舎だが、派手に破壊すれば騒ぎになって面倒だからな。

しかし、妙だ。たった今、目の前の夜影は倒したのに、まだ夜影の気配が残っている。

もしや、また別の夜影が現れたのか……？

不意に額に冷たい雫が落ちた。少しの間止んでいた雨がまた降り出したらしい。

とりあえず、保健室に戻るか。

剣をピアスに戻して走り出す。

気持ち悪い。正直吐き気がする。きっとこの灰色の空のせいだ。歪んだ重い空気が容赦なく肺の中に攻め込んでくる。

ああ、そうか。同じなのか。知っているけれど知らない、あの空と同じなんだ。

早く、どこかに行ってしまいたい。この空を見ていると……死にたくなるから。

自分でもわからない。なぜ、そんな気分になるのか。

知りたいけれど知りたくない。いや、知るのが怖いんだ。

怖い。怖い。怖い。

自分の知らない自分が怖い。

会いたい。彼女に会いたい。

この鉛のように重くなった心を、空気のように軽くしてくれる笑顔。

彼女を切り捨てられないのは、きっとそのせいだ。

彼女に依存しているから。

保健室に戻ると、彼女の姿がなかった。ちょうど居合わせた生徒に聞くと、突然起き上がった部屋を出て行ったらしい。とりあえず札を言って廊下に出た。

教室に戻ったのか？いや、突然驚いたように起き上がったと言っていたから、やはりもう一体の夜影に気づいたのだろう。だとしたら、夜影のいるところに彼女もいるはずだ。

微かに感じるまがましい気配を追って行く。

無事だろうか。まだ剣の扱い方も知らないような女が夜影に太刀打ちできるわけがない。超能力で防御はできるだろうが、いつまで持つかわからない。

早く、早く見つけないと、まずい。気持ちと連動するように足の回転が速くなる。

無心で気配を追って行くといつの間にか屋上まで来ていた。

時間がないので自然と扉を開く手に力が入る。開いた扉が壁に勢いよくぶつかった。きつと物凄い音がしたのだろう。そこにいた人物が驚いたようにこちらを振り返った。

黒髪の女。雨で濡れたその髪は恐ろしいほどに黒く、美しかった。しかし、それはしずくではなかった。

それは……………あの人だった。彼女が5年前に死んだと言った、あの人だった。

いや、正確には、あの人を形をした夜影だ。その瞳は夜影特有の燃えさかる炎のような紅だった。また、雨に紛れてはいるが、確かにそれはあの邪悪な気配を放っていた。

すぐ後ろにしずくの姿が見えた。ピアスに軽く触れる。地面に突き刺さった剣を引き抜き、両手で強く握る。霊石が光る。青か。Cくらいなら一発でいけるな。

目を閉じて、息を吐く。そして大きく息を吸いながら、もう一度目を開ける。

こちらに近づこうとしていた相手の動きが止まる。

しずくは俺の目を見ているだろうか？そこまでは分からなかったが、下手に動かれるよりは夜影と一緒に動きを止めてしまったほうが良いだろう。

右足で思い切り地面を蹴る。風のように一瞬で獲物の目の前へ着地する。衝撃で水が宙に舞う。顔に冷たい雨水がかかる。かまわず剣を真上に振りかざす。消えろ、偽者。

！？

目の前の夜影を斬ろうとした瞬間、不意に凄まじい衝撃が全身を走った。そのまま体が吹っ飛ぶ。地面に叩きつけられる。肋骨何本かいったな。予想だにしない展開に困惑しつつも冷静にそんなことを考えている。

しかし、なぜだ？夜影は確かに動きを止めたはず。一体誰が……。

しずくだ。しずくしか考えられない。こんなことができるのは彼女だけだ。

気づくと彼女は俺のすぐそばに跪いて、泣きそうな顔で何か言っている。

「ごめんなさい。ごめんなさい。海が、お母さんのこと斬ろうとするから……止めなくちゃって思ったら、こんな、ひどいことしちゃって……。本当にごめんなさい。」

その時、後ろに銀色の刃が見えた。咄嗟に彼女を思いきり突き飛ばす。なんとか間に合った。

しかし俺のシャツはみるみる紅く染まっていく。痛みは感じない。ただ、体が動かない。血が雨で流れていく。このままでは、まずい。しかし、体は動かない。

焦るな。大丈夫だ。

もう一度目を閉じて、意識を集中する。

目を開ける。よし、捕まえた。その真っ赤な瞳はもう俺の支配下だ。相手の動きは完全に封じた。さて、これからどうするか……。

「しずく。よく聞け。今から何があっても俺の目を見るな。」
目を逸らせないので彼女の反応は分からない。

「――絶対に俺の目を見るなよ。今俺の目を見たら、体が動かなくなるぞ。お前の身動きがとれなくなったら、他にこの夜影を倒せる人間はいない。」

くそっ、顔を見れないと不安だ。彼女が気を失っていたらどうする？もうすでにこの目に囚われていたらどうする？

もしそうだとしたら、ジ・エンドだ。しかし、今は彼女に賭けるしかない。

「――体が動けるんだったら、自分の剣を出してこの夜影を斬れ。いいか、これは恵さんじゃない。夜影だ。」

彼女にこの声が届いていることを切に願う。

「――これは夜影だ。夜影なんだ。お前なら出来る。お前なら斬れる。大丈夫だ。」

長い沈黙。彼女は何か言っているかもしれないし、何も言っていないかもしれない。しかし、どっちにしろ俺にとっては沈黙と同じだ。

「――しずく、お前を信じてる。」
半ば神に祈るように言った。あんな非現実的なもの、これっぽっちも信じてはいないのに。

雨が酷くなった。空気が冷たい。指先が微かに震える。

ぼんやり考える。俺はこのまま死ぬるだろうか？
いや、駄目だ。しずくが危ない。こんなところでくたばってどうする……。

彼女を守らねば。彼女を死なせるわけにはいかない。

“死ぬなよ、メサイア。”

忘れかけていた俺のコードネーム。どこかで聞いたことのある声が頭の中で響いた。でも、それが誰だか思い出せなかった。

突然、目の前の真っ赤な瞳が大きく見開いた。次の瞬間黒い羽根が辺りに飛び散った。同時に分解された魂が在るべき場所に帰ってゆく。流れ星のようだった。

夜影の姿が跡形もなく消えると、その向こうに彼女が立っていた。また泣かせてしまった。俺は何度、彼女を泣かせれば気が済むのだろう。

「さようなら、お母さん。」

彼女は静かにそう言った。剣が地面に吸い寄せられるようにその手から滑り落ちた。

雨は彼女を包み込むように、絶え間なく降り続けた。優しい雨だった。

嘘はつけない

ごめんね。お母さん。

私、自分の目よりあの人の言葉を信じるよ。

さっき、初めて名前を呼んでくれたんだよ。

信じてるって言うてくれたの。

ひどいことしたのに、私のこと信じてくれたの。

だから、ごめんね。

さようなら、お母さん。

涙と雨で曇った視界。手の甲で水滴を拭くと、そこに彼がいた。

「上出来だ。」かすれた声で言う彼の顔は青白かった。

恐くなった。たまらなく恐くなった。

早く傷を治さなきゃ。近寄ってその紅く染まったシャツに手を伸ばす。その指が小刻みに震えた。

私のせい、私のせい、私のせいで……海がいなくなったりしたら、どうしよう。

どうしよう、お願い、お願いだからどこへも行かないで。

私、あなたがいないと駄目だよ。なんにもできないよ。

だからお願い、お願いだから……。

「しずく。」

不意に名前を呼ばれて顔を上げる。

「――落ち着け。大丈夫だ。このくらいで俺は死なない。」

震えがとまった。不思議だ。この声を聞くと、安心する。

溢れる涙をもう一度拭うと、いつの間にか雨がやんでいた。

ごめんね。

そう言おうとして、途中でやめた。先ほど彼に言われたことを思い出したから。

“ こういうときは、『ごめんね』じゃなくて、『ありがとう』だろ。”

そうだよ。だから、今度はちゃんと言うね。

まっすぐに、その綺麗な瞳を見つめて口を開く。

ありがとう。

声にならなかったけれど、その言葉は確かに届いていた。そうわかったのは、笑ったから。初めて彼が笑ったから。

偽りの無い、真っ白な優しい微笑みだった。

ああ、この人はこんな風に笑うんだ。なんて綺麗な笑顔なんだろう。

思わず見とれていると、さっきと同じようにぐしゃぐしゃと頭を撫でられた。

「じっとしててね。すぐ治すから。」

熱くなった頬を誤魔化すようにそう言いつつ目を閉じた。それから意識を集中させる。

治れ、治れ、治れ。

しばらく経って目を開けると、彼は目を閉じていた。相変わらず、睫毛が長い。

「終わったか？」

不意に大きな瞳が現れて言った。

「うん。ちゃんと傷口塞がってる？」

私が聞くと、彼はおもむろにシャツのボタンを開け、傷があった場所をゆっくり手でなぞった。引き締まった体にはもう傷などこ

にも見られなかった。

「跡形も無いな。……ありがとう。」

またいつもの無表情に戻っていた。でも、嬉しかった。ありがとうって言うてくれたから。

「――しかし、このシャツで教室戻るのはまずいな。」

シャツのボタンをしめながら困ったような声で彼が言う。もちろん無表情。

「そっそうだね。あの、できるか分かんないけど、白い状態に戻してみるね。」

指先でシャツに軽く触れ、もう一度目を閉じて意識を集中する。

戻れ、戻れ、戻れ。

目を開けるとそこには、たった今洗濯したばかりのような真っ白なシャツがあった。

「お前、こんなこともできるのか。」

彼は驚いたように大きく目を見開いて言った。それが可笑しくて笑ってしまった。

海は見た目以上に感情豊かなのかもしれない。ただそれが表情に出にくいだけで。

ああ、今なら話せるかもしれない、そんな気がした。

ゆっくり深呼吸をしてから私はまっすぐ彼の顔を見た。

「海。私、あなたと空に嘘をついているの。」

「……。どういことだ?」

心臓の鼓動が速くなる。言おう、この人に嘘はつきたくない。

「私のお母さん、病気なんかじゃなかったの。」

「……そうなのか？」

彼はいきなり真剣な顔になった。

「うん。」

沈黙。

「——本当はね。お母さんは……」

ああ、やっぱり言いたくない。言いたくないよ。でも、まっすぐ私を見ているその青緑の瞳に嘘はつけない。

「——処刑されたの。」

約束

彼の瞳が大きく開いた。

「……なぜだ？なぜ、処刑なんて。」

「お母さんは大きな罪を犯したの。だから、その責任をとって……。」

「……………」

「私、それしか知らないの。お父さんは詳しいことは何も教えてくれなかったから。」

「……………」

「私、お母さんが処刑された日の朝、約束したの。帰ってきたら一緒にケーキ作ろうねって。でも、お母さんは帰って来なかった。次の日も、その次の日も。」

「……………」

「頭ではわかった。もうお母さんは帰ってこないって。でも、いつかひょっこり帰ってくるんじゃないかって、心のどこかでそう思っていたんだと思う。だから、夜影が変身してただけだったのに、本気でお母さんだと思っちゃって……。馬鹿だよな。」

「……馬鹿じゃない。お前の気持ちも考えずに斬ろうとした俺のほうが馬鹿だ。」

ずっと黙って私の話を聞いていた彼が、不意に口を開いた。

「海は馬鹿じゃないよ。だって、海は正しかったじゃない。それなのに私、あなたのこと攻撃して、本当に最低だよ。」

「大切な人を守りたいと思うのは、当然のことだ。それを考えてなかった俺が悪かったんだ。お前は悪くない。気にするな。」

そんなこと言わないでよ……。泣きそうになるのを必死に堪える。

「……ありがとう。海と一緒にいてくれてよかった。私、お母さんと本当の意味でお別れできたのは、海のおかげだと思うの。」

「……別に、俺は関係ない。」

「そんなことないよ。海が、私のこと信じてるって言うてくれたから、斬れたんだもん。私、海のおかげで、ちゃんとお母さんの死を受け入れられたんだよ。」

「……そうか。」

「うん。」

「……どうして、こんなことを俺に話したんだ？」

「それは……あなたには嘘つきたくなかったから。それに、私はもう大丈夫だって、自分に言い聞かせたかったんだと思う。」

「……ケーキ作ったことあるか？」

「えっ？……そういえば、一度もないかも。」

いきなり彼が突拍子も無いことを言い出すので、驚いた。

「じゃあ、今日ケーキ作るぞ。」

「どうしたの？急に。」

「お前、母親との約束をずっと引きずってたんじゃないのか？」

確かに、彼の言うとおりかもしれない……。私はお母さんを思い出すのが嫌で、無意識にケーキを作ることを避けていたのかもしれない。

「……そうかもしれない。」

「俺が代わりに約束果たしてやる。それじゃ駄目か？」

「駄目なんかじゃないよ。嬉しい。ありがとう。」

海は優しいね。

そう言おうとしたけど、言えなかった。何だか恥ずかしくて。でも、彼が本当はすごく優しい人なんだって改めてわかって良かった。

私はもう何度もこの人に救われている。

心の支えになっている。

どうしても頼ってしまうのは、きっとこの人の優しさに気づいてしまったからなんだろうな。

弟

最近になってやっと、しずくの弟のかおる君とも話せるようになった。といっても、おれが話しかけたら何かしら返事をしてくれるって程度で、彼のほうから話しかけてくれたことは無い。

「あれ？ かおる君、今日は朝練ないの？」

居間のドアを開けると、いつもはそこにいないはずの少年がテーブルに着いていた。

「……今日から中間テストだから。」

おれ、かおる君にあまり好かれてない気がする。いつものことだけれど、ちゃんと目を見て話してくれない。やっぱり中学生だし、反抗期とか？

「えっ、そうなの？」

「うん。」

そっけないな……。顔に「面倒くさい」って書いてあるよ。

「あー、じゃあ、頑張れ。」

「……うん。」

気まずい。すっげー気まずい。

「かおる、今日は午前中で帰ってくるんでしょ？ 昨日のグラタン、冷蔵庫の真ん中ね。」

自分の朝食をテーブルに用意しながらしずくが言った。助かった。

「うん、わかった。」

心なしか、しづくに対しては素直にみえる。何でだろう。反抗期だったら、世話焼きの姉って一番鬱陶しいんじゃないのか……。やっぱ、彼のことはよく分らない。

「あっそうだ。私、今日買い物して帰るから、何か欲しいものある？」

「……うーん、赤ペンとシャー芯。」

「シャーペンの芯って、0.5のHBで良いんだっけ？」

「うん。」

「わかった。買ってくるね。」

「あざーす。」

やっぱ、おれに対する態度と全然違うな……。

「あのさー、おれってかおる君に嫌われてんのかな？」
学校に行く途中にそれとなく彼女に聞いてみた。

「うーん、別に嫌われてはないと思うんだけど。」

「でもさ、なんか話しかけても『うん。』だけとか、ホント短い返事しかくれないんだよね。」

「大丈夫だよ。あの子、本当に嫌いな人には一言も喋らないから。」

「そっかー、じゃあ、まだ救いようはあるってことか。」

「うん。だから時間が経てばね、もう少し打ち解けられるんじゃないかな。」

果たして本当にそうなのか？少し疑問に思いつつも、そういうものだと自分に言い聞かせた。

なんとなく、かおる君は海に似ている。無口で、必要なことしか喋らないから、何を考えているのかわからない。

それから確か、かおる君は剣道部だったはずだ。去年は個人戦で県3位に入ったと言うから、なかなかの腕前だ。剣道をやっているからか、いつも背筋がピンとしている。

しずくの話によると、勉強はそこそこみたいだ。まあ、おれよりは出来るんだろうな。

仲良くするために、もっと彼のことを知りたいんだけど、あんまり知っても気持ち悪いかな。とかいろいろ考えてる自分が笑える。別に無理に仲良くしなくても良いのに……やっぱりしずくの弟だからかなあ。

第02

僕はあの人が嫌いだ。

どこが気に入らないのかと聞かれても困る。だって全部が気に入らないから。

あの何にも考えてなさそうな薄っぺらい笑顔とか、やたらと姉に馴れ馴れしいところとか、自分が美形だってわかってますっていう態度とか。もう言い始めたらきりが無い。

正直、姉が近くにいないければ完全無視する。できるだけ目を合わせたくないし、口もききたくない。嫌われてるのが分かってるなら話しかけんなよな……。

ホント面倒くさい。

今日のテストはまあまあ出来た。でも、明日は苦手な国語だ。僕は古文がさっぱりなのだ。

というわけで、今日は古文を中心に勉強することにした。

教科書とノートを一通り読んでから、プリントの問題にとりかかる。何だこれ。全然わかんねえ。どういう話なんだ……？

何度も読み返してみるが、全く理解できない。仕方が無いので姉が帰ってくるまで他の教科の勉強をすることにした。

「ただいま。」姉の声だ。

今日は買い物をしてきたからか、いつもより遅い帰宅だった。どうせあの人と一緒なんだろうな。家に帰ったら嫌でも会うのに、何でいつも一緒に帰ってくるんだろう……。

プリントとシャーペンを持って部屋を出た。階段を下りていくと

やっぱりあの人と一緒だった。舌打ちをしたくなるのを堪える。

「おかえり。」

まっすぐ冷蔵庫のほうに向かう背中に声をかけた。

「あつ、かおる。頼まれてたの、買ってきたよ。カバンの中に入ってるから自分で出してね。」

勝手に開けて良いのかよ、と思いつつ黒い学生カバンのチャックを開ける。いつもの文房具屋の緑色の袋が見えたので、それを引っ張りだす。袋を開けて出てきたのは、頼んであった赤ペンとシャー芯。それからピンクのマーカー。

「このマーカーは姉ちゃんのもの？」

「うん。テーブルの上置いという。」

言う通りにしてマーカーをテーブルに置き、とりあえず姉の手が空くまでソファに座って待っていいように思ったなら、そこにあの人がいた。さすがに隣には座りたくないのに向かいのソファに腰掛けた。頼むから話しかけるなよ、と何度も心の中で祈りつつ。

気づかれないように向かいの様子を窺うと、彼はなにやら分厚い本を読んでいた。良かった。今回は会話せずに済みそうだ。

「かおる、テスト勉強どう？ちゃんと休憩とってる？」

冷蔵庫の整理が終わったのだらう、飲み物をテーブルに置いてから姉が僕のとなりに座る。

この人は絶対に勉強しろとは言わないのだ。同級生は親が勉強しろというさい、と言うのだけど僕の場合は全く逆だ。勉強しろとは言われず、休憩をとれと言われるのだ。それは僕が勉強をしているのが前提になっていて、つまり僕は言われなくても勉強していると思われるのだ。姉はそこまで考えて言っているわけではないだ

ろうが、実はかなりプレッシャーになっていたりする。

「うん。あのさ、この古文の問題全然分かんないんだけど……姉ちゃん、分かる？」

「うーん、私そんなに古文得意じゃないからなー。わかるかな？」
と言いつつ、姉は僕のプリントを手取る。

「——ん？何これ、よく分かんない。」

「まあ、姉ちゃん理系だからしょうがないか……。明日先生に聞いてみるよ。」

「あつ、ちょっと待って！分かる人がいるから。その人に教えてもらうと良いよ。」

「えっ？誰？」

と言いつつ向かいで本に夢中の人に視線が向けられる。

「あー、空じゃないの。だってこの人、古典のテスト赤点だったんだから。」

その言葉に思わず吹き出してしまった。何でもできるような人だと思ってたけど、赤点って……相当頭悪いじゃん。

とはいえ、年下の僕が笑うのはさすがに失礼だ。嫌な顔をしているかと思っただけで本人は気づいていない様子だった。とりあえず一安心。

でも、この人じゃないとすると、一体誰が教えてくれるというのだろうか？

「じゃあさ、誰が教えてくれんの？」

「えーと、ちょっと待ってね。」

そう言っただけ姉は向かいの人が読み耽っている本を取り上げた。

「――カイ、ちょっとお願いがあるから、出てきてくれないかな？」

カイ？誰それ？……どういふこと？空じゃないって言ったのに話しかけてんのは空じゃん。意味わかんねえ。

本人は特に驚きもせず、何かボソツと呟いてからゆっくりと目を閉じた。それから三秒ほどの沈黙。

そしてもう一度目を開く。

驚いた。

そこに現れたのは空とは全く別人の瞳だったからだ。

うまく言い表すことができないけれど、一瞬でわかった。これは空じゃない。別人だ。

瞳の力が全然違う。なんかこう、吸い込まれるような、とにかく不思議な感覚に襲われるのだ。よく見ると瞳の色も違う。さきほどの澄んだ水色から緑がかった深い青に変わっている。

「……この人、誰？」

「カイ。もう一人の晴野空だ。」

声も違うのか……。それは落ち着いた低い声で、僕とは比べ物にならないくらい大人っぽい雰囲気を出していた。

「えーっと、つまりね。空って二重人格者なの。それで、晴野空の中のもう一人の人格が彼、カイ。ごめん、急にこんなこと言われてもわかんないよね。」

二重人格って……小説とか、漫画の中だけの話だと思ってた。マジかよ。本当にいるんだ。

「いや、あの、別人だってことは分かるよ。カイさんだっけ？何か空さんとは全然雰囲気違うし、目の色も違うよね。」

「そう。カイの瞳は海みたいな深い青色だから、海って書いてカイなんだよ。」

「あー、そう言うことなんだ。」

「……で、どの問題を教えれば良いんだ？」
急に話しかけられたので僕は一瞬固まってしまった。この人さっきからずっと無表情で何を考えているか全然わからない。

「えっ、あー、これです。」

何故だかわからないが自然に敬語になってしまった。
何だか妙に緊張している自分に気づく。まだこの状況に適応できてないからだろう。……ん？ちょっと待て。まだ姉ちゃん何も頼んでないのに何でこの人事情知ってるんだ？

「空の見聞きしたものなら俺は何でも知っているんだ。だから事の成り行きも把握している。」

この人エスパーかよ。今聞こうとしたことを先に答えられてしまった……。

「……なるほど。」

「じゃあ、私夕飯の準備するね。海、かおるのことお願いね。」

「了解。」

こうして僕はもう一人の空、海に出会った。

第03

すげー。超分かりやすい。この人相当頭良いんだな……。正直、学校の先生より教えるのうまいかも。

「そっか。そういう話だったんだ。じゃあ、この問題の答えは3番ってこと？」

感動で思わず敬語が抜けてしまったが、彼は相変わらず無表情なので、気に障ったかどうかはわからない。

「正解。理解できたみたいだな。」

「どうも、ありがとうございました。」

今度はちゃんと丁寧にお礼を言った。すると彼は何も言わず、微かに笑みを浮かべていた……。それは見間違いかと疑うほど一瞬の出来事だった。でも、その優しい微笑みはまだこの目に焼き付いているようだった。その笑顔はもちろん空とは全然違うし、父親とも姉とも違っていた。うまく言えないけれど、とにかく笑顔を作っているような、或いは何かを隠しているような気配が全くなかった。この人は本心から笑っている、僕はそう感じた。

「――あの、もし良かったらなんですけど、数学も教えてもらえますか？」

「俺で良いなら、構わない。」

駄目元で聞いてみると、案外あっさり承諾してくれた。というわけで、そのまま数学の問題も教えてもらった。

やっぱり、この人すげーな。数学もできるみたいだ。応用問題の

解法をいくつか教えてもらった。姉に教わるより、断然分かりやすかった。姉には申し訳ないけれど、本当に塾の先生にでもなったほうが良いんじゃないかと思うくらい説明がうまいので、今度からはこの人に勉強を教えてもらいたい。

「海さんって何でそんなに頭良いんですか？」

自分で聞いたいてなんだけど、ものすごい馬鹿っぽい質問をしてしまったと後悔。

「何でと言われても、答えられないな。それに、頭が良いというより、記憶力が良いだけだ。そんな大層なことじゃない。」

記憶力が良い……。つまり一度覚えたものは忘れないってこと？
それって天才じゃん！

でもその言葉に嫌みがないのは、自分の才能を鼻にかけたりせず、さらっと当たり前のように言うからだろうか……？

嫌いじゃないな。ていうか、むしろこういう人には好感が持てる。

「いやいや、大層なことですよ。」

「……さっきから言おうと思っていたんだが、別に敬語じゃなくていいからな。」

「えっ、い、いいの？じゃー、敬語抜きで話すよ。」

若干戸惑いつつも、彼のほうからそう言ってくれて素直に嬉しかった。

「ああ。そのほうが話しやすいだろ。」

「うん。まあね。」

「――あっそうだ、ちょっとお願いがあるんだけどさ……。」

「何だ？」

「また勉強でわかんないところあったら聞いても良い？ 実は……オレ、受験生なんだ。」

何となく、“僕”というのは恥ずかしかったので、“オレ”と言ってみる。

「ああ、そうか中3だったな……。まあ、基礎は出来てるみたいだから、そんなに心配しなくても大丈夫だろ。」

それって褒め言葉！？ うわ、マジ嬉しい。

「マジで？ ああ、オレ、楓行きたいんだけど、行けそうかな？」

「しずくと同じ学校が良いのか？」

「いや、そういうのじゃなくて、楓高校って剣道強いんだ。だから行きたいんだけど。」

姉が通っているというのも志望理由の一つではあるが、シスコンみたいに思われなくなかったので言わなかった。

「そうか。まあ、少し頑張ればなんとかなるだろ。」

「本気で言ってる？」

正直僕は姉ほど頭はよくない。いつも勉強は姉に教えてもらっていたのだから。

「本気だ。」

その真っ直ぐな瞳で言われると、なんだか本当になんとかなる気

がしてきた。不思議だ。

「……これで落ちたら海さんの所為にするよ。」

「馬鹿。落ちるとか言うな。俺が責任もって勉強みてやるから。」

「本当に良いの？」

「本当に良いぞ。」

僕の言ったことを同じように繰り返して言うので、危うく笑いそうになった。

「あざーす！」

内心ガッツポーズをしながら僕は顔の前で両手を合わせた。

この人が兄ちゃんになってくれたら良いのになー、なんて思いつつ。

このままで良い

何故こうなった……。あれから週に一度はかおるの勉強をみている。まあ、空に聞いても意味が無いのはわかるが、正直しずくに聞けば良いんじゃないのか？これじゃあ、まるで俺が彼の家庭教師みたいだ……。

「なんでって言われても……私にはよく分かんないんだけど。もしかしたら海、あの子に気に入られちゃったのかもね。」

そんな嬉しそうに言うなよ。彼女は食器を洗いながら、しかし顔はこちらを向いて喋っている。口が見えるようにと、気を遣っているのだろう。弟のほうはというと、今は勉強の休憩も兼ねて入浴中である。

「俺のどこが良いんだ？」

全くもって理解できない。

「説明がすぐく分かり易いつてかおるが言ってたよ。たぶん私に教わるより海に教わったほうが勉強になるって思ったんだと思うの。それに……。」

彼女は途中で顔を背けたが、遠目でみてもその肩が震えているのがわかる。何故そこで笑う？

「笑うな。それに、何だ？」

「かおると海って少し似てるところあるから。」

「はあ？一体どこが似てるんだ？」

明らかにお前にそっくりだろ。人見知りなところとか、めったに

弱音を吐かないところとか。顔とか。声とか。その他もろもろ。

「うーん、なんて言えば良いのかな？自分からは喋りたがらないところ……かな？」

俺はそういうやつだと思われているのか……。自分からは喋りたがらない、か。あながち間違いではない。しかも、それがかおるにも当てはまるということは俺にもわかる。教えている時、彼は勉強のことしか聞いてこない。中学生というのは今日あった面白いことなんかを人に話したがるものだが、彼にはそういうものが一切ないかといって学校が面白くない、という訳でもなさそうなのだ。現に学校についてこちらから聞いてみると、楽しそうに答えてくれる。しかし俺の記憶が正しければ、彼のほうから自分のことを話したことは一度もない。

「言われてみれば、そうかもしれない。」

そんなことを話している間に食器洗いが終わったらしく、彼女は手袋をとってから俺の隣の席に腰掛けた。

「あっ、もうひとつ似てるところ発見しちゃった。」

彼女は俺の目の前に広げられた弟のノートや教科書を眺めながら言う。今度は何だ……？

「――字が似てる。ほら、海の字とかおるの字って少し似てない？」

だから何でこんな下らないことで目をキラキラさせるんだ……？

「俺にはよく分からない。別に似てないだろ。」

「そうかな？何か、ちょっと角ばってるところが似てると思ったんだけど……。」

「――あつ、この『代』の書き方とか。」

彼女はノートに書かれた「江戸時代」の最後の文字を指差す。今日は歴史の勉強をしているのだ。

「確かに。」

「……ねえ。海は、こうしてかおるの面倒見るの、嫌じゃない？」突然話題を変えられ、しかも彼女が先ほどとは打って変わって真剣な面持ちで話し始めたので内心拍子抜けするが、顔には出さないようにする。おそらくこのことを話したいがためにわざわざ隣に座ったのだろう。

「別に。」

「嫌なら嫌って言うてくれて良いよ。毎週毎週、こんなこととして正直疲れるでしょう？」

「別にこのくらいなら、問題ない。」

「本当に良いの？」

思わず噴き出してしまう。まさか同じ顔でまったく同じ台詞を言うとは……本当にそっくりな姉弟だ。

「お前ら、本当にそっくりだな。今の、お前の弟が俺に言ったのとまったく同じ台詞だ。」

「えっそうなの？」

「ああ。」

「やっぱり姉弟だからかな。それで、本当に良いの？」

「本当に良いぞ。」

あえて弟に言ったのとまったく同じことを言ってみると予想通り彼女は軽く微笑んだ。

「ありがとう。」

途端に顔いっぱいの花が咲く。こんな顔されたら、断りようが無い。

ああ、このまま時間が止まってしまえば良い。本気でそんな馬鹿げたことを思った。この距離のまま、こうして彼女の笑顔が見れば、それで十分だ。それ以上のことは望まない。いや、望んではならないのだ。彼女のために。いや、それも違う。俺のためだ。きっと俺は、自分を守るために踏み出せずにいる。この胸の奥で荒ぶる波を理性が必死に堰きとめているのだ。

気づかれないように、傷つけないように、このまま、このまま、このままで良いんだ。

これが俺の正しい愛し方。

本音と嘘

ああ、金曜日が待ち遠しい。早く、金曜日にならないかな……。

「何でそんなに金曜日が楽しみなの？」

しまった。心の声のつもりが実際に口に出していたらしい。隣の席にカバンを置きながら空がこちらを覗き込む。

答えは簡単。かおるの部活が早く終わるので、金曜日は海がかおるに勉強を教えてくれることになっているからだ。つまり、これからは週に一度海に会えるわけで、私はそれが嬉しくてしょうがない。かおるにも最近妙に機嫌が良いと言われたほどだ。

でも、それを空に言うのは抵抗がある。というのも、空が見聞きしたことは全て海に筒抜けだからだ。かおるの勉強をみるのも本当は嫌々なんじゃないか、そんな風に思ってしまうこともあるし……。それに、あんまり期待を寄せると鬱陶しいと思われそうで、怖い。

「えっ、あの、その、毎週観てるドラマの続きが気になって……。」「」

「あー、そっかあ。『夕空マンデー』だっけ？」

「そう、それ、面白いよね。」

私って演技の才能ないかも……。心なしか空の笑顔が苦笑いに見える。

「ごめん、しずく。今の嘘。そんなドラマやってないから……。」

ああ、やってしまった。一気に背筋が凍りつく。そうして私が言葉失っていると、言いづらそうに空が口を開いた。

「――あのさ、もしかして金曜って、海がかおる君に勉強教える日？この前、あいつと話したとき、毎週家庭教師をやらなきゃいけなくなっただけって言ってたんだけど……。」

「う、うん。実は、そうなの。」

「なるほどね。」

空はいつも通りの爽やかな笑顔ではあったけれど、なんだか少し困ったような、というか悲しそうな色がその声色に見え隠れしていた。

それからしばらくの沈黙の後、彼は何事もなかったかのように違う話題について話し始めた。空は私が何故嘘をついたのか聞かなかったのだ。私にとってはありがたいことではあったけれど、その優しさは針のごとく私の胸に刺さって取れなかった。

「失礼します」

職員室のドアをゆっくり開けた。石神先生に呼び出されていたためだ。数学の成績に問題があるのかと内心ときどきしつても……。しかし、彼のデスクまで行くと違う理由だということが容易に理解できた。

「あっ、しずく来たよ。」

そう、石神先生は空の師匠なのだ。つまり彼も除影師である。

「おう、来たか。じゃあ、ちょっと外出るぞ。」

着いて早々移動である。きつとここでは話づらいことなのだろう。空とともに職員室を出た。

「あの、どこ行くんですか？」

前に行く先生に聞いてみると、彼は何も言わず悪戯っぽい笑みを浮かべた。その仕草が少し空に似ていた。というか、空が先生に似ているのか。

そのまま着いていくと、彼は何の躊躇も無く旧校舎の敷地に入って行った。今更ながら旧校舎に入ったのは初めてだったことに気づく。

角を曲がって裏の空き地に出る。こんなに広い場所があったとは知らなかった。驚きと感動で呆然としている私を尻目に、先生は一本の木に向かって真っすぐ歩いていった。

「おい、これ見てみろ。」

そう言って手招きする先生のほうへ慌てて駆け寄る。指差すところに視線を向けるとそこには獣が引っ掻いたような、大きな傷が残っていた。

「これかー。」

空が関心したように呟く。

「熊かなんかが引っ掻いた後……でしうか？」

私が恐る恐るそう言くと、先生と空が同時に噴き出した。

「熊って、おいおい。大丈夫か？お前。こんな都会で熊が出るかよ。これはどう見ても剣で斬った跡だろ。」

言われてみれば確かに、何か鋭利な刃物によって刻まれた跡のようにも見えた。

「もう一度言っとくけど、おれじゃないからね。」

空が念を押すように先生に訴える。ああ、そうか。先ほど職員室

でそのことを話してたのか……。

「包丁なんかじゃこんな大きな跡は出来ないからな。俺が思うに、これは誰かが夜影と戦った際に出来たんだろう。」

夜影と戦って出来た跡……？　そう言えば一度、学校に夜影が現れたことがある。そう、その時私は体調を崩して彼に保健室まで連れて行ってもらったのだ。

「あつ、もしかしたら……。」

「……なんか心当たりでもあるのか？」
探るような目で先生はゆっくりと静かにそう言った。

「海。たぶん彼がここで夜影と戦ったんだと思います。」

「えっ、そんなことあったの？」

先生より先に反応したのは空だった。

「カイ？　そいつは何者だ？」

「もう一人のおれ。つまり、おれの中のもう一人の人格だよ。」
どう説明して良いものかと考えていたら、空に先を越されてしまった。

「はーん、なるほど。二重人格のもう一方のやつってことか。」
先生はひどく納得したような顔をしている。普通もつと驚くことじゃないだろうか……？　しかし、よくよく考えてみると、この反応は空が海が存在を知ったときのそれとよく似ていた。

「――じゃあ、これはそのカイってやつがやったのか？」

「あっはい、たぶんそうです。」

「なかなかやるな。そいつ。」

先生は何故か嬉しそうに見えた。

「何？会ってみたいとか？」

空が珍しく苦い顔をしている。やっぱり一番気を許している相手だからだろうか？石神先生と話してるときの空はいつもと雰囲気が違う。

「うーん、会いたいというか、もう一度会ってるかもな。」

「えっ？そ、そうなんですか？」

思わず声が裏返そうになった。

「あの、澄ました顔で生意気なこと言うやつだろ。」

その言葉に空が噴き出す。私も釣られて笑ってしまった。確かに、良い得手妙である。

「そうそう、それ。それが海だよ。ってというか、話したことあの？。」

「ああ。俺が夜影追ってて一瞬見失ったときにお前に会ってな。

どこ行ったか聞いたら、『今俺が消しました。』って言いやがった。」

「ああ、海らしいですね。」

「ずっとおかしいと思ってたんだ。その時俺が追ってた夜影、Bレベルだったからな。いくら準二級に昇級したからって空には絶対倒せっこない相手だ。」

三秒ほどの間があった。おそらく空自身が一番気にしていることを言われたからだろう。

「……悔しいけどその通りなんだ。あいつの方がおれより強いみたい。昇級したのだってあいつのお蔭だったし。っていうかさ、さっき師匠、海のこと『なかなかやるな』って言ってたけど、何でそう分かるの？」

「あー、切り口だよ。真っすぐで全くぶれてないし、断面が綺麗だ。これは剣の扱いが上手い証拠だな。」

「へー、そうなんだ。」

棒読み。空はあからさまにふて腐れた様子だった。こんな顔もするのか、と内心面食らいつつ私はその横顔を見ていた。

よくわからない

梅雨明けの空は嘘のように青く、澄んでいた。

「今日から夏休みだね。」
長い黒髪が風に舞う。

「うん。でも、夏期講習あるから実際あんまり休めそうにないや……。」
7月上旬にあった期末テストが破滅的だったので、自業自得な訳だけだ。

「うーん、私も夏休みは休めそうにないかな。」
そう言いつつ彼女は髪の毛を耳にかける。おれはこういうちょっとした仕草に弱いみたいだ。

「えっ、何で？ しずくは講習ないよね？」

「あれ？ 私、空には言ってなかった？」

「何のこと？」

空“には”って……あいつには言ったのか？
聞きたいけど、聞けない。

「あのね。私、夏休みに石神先生に特訓してもらったことになったの。」

「特訓？」

「うん。自分の力で夜影を倒せるように、戦い方とか教わるの。」

「マジか……。あの人厳しいけど、大丈夫？ていうか、特訓おれも付き合おうか？」

「大丈夫。いつまでも空や海に頼ってたら、一人前の除影師になんてなれないもの。」

迷いの無いその言葉に圧倒されてしまう。彼女の瞳は真っすぐで、その強い意志を表しているようだった。

「そっか。わかった。でも無理しないでね。」

「うん。」

彼女ははるか遠くの入道雲を見据えて頷いた。

何で俺が夕飯作らなきゃならないんだ……。
と思いつつも、手を動かしている自分がいる。

「何これ、すげーうまい。」

目の前の少年は俺の作った麻婆豆腐を嬉しそうにほおぼる。
何で、かおると二人で夕飯を食べなきゃならないのか……。

全ては彼女の不在のため。特訓とかなんとか言ってたな。それは良いとしても、何で俺が……。

「辛くないか？」

「うん。平気。ていうか、むしろちょっと甘い。」

「……。甘いのか？」

途端にかおるが噴き出す。何故笑う……？

「うん。甘辛な感じ。海さんて辛いのが苦手なの？」

「知らん。」

「何だそれ。」

「またもや笑いながら言う。今日は無駄に笑うな、こいつ。別に面白くないことなんて何も言っていないはずなのだが……。」

「お前は辛いものが好きなのか？」

「うーん、普通？ そうだな、カレーで言ったら中辛くらいが好きかな。」

「なるほど。」

「姉ちゃんも、辛いのはそこまで好きじゃないと思うよ。まあ、でも姉ちゃんの麻婆豆腐、これよりは辛いかな。」

「……。」

どう反応すべきかわからない。何故そこで彼女が出てくるんだ？

「あつでも、この麻婆豆腐、本当においしいよ。」

「……それはよかった。」

「別に、気を遣ってるわけじゃないからね。」

彼は俺の瞳の中に何かを探しているような目で言った。こういうところが似ている。

「気を遣われてるとは思ってない。」

「えっ、あー、そっか。よかった。オレさ、海さんて辛いのが好きそうだから何か意外だなーって思ったんだよね。実は甘党だったりして。」

そう言って無邪気に笑う姿はやはり年相応である。

「甘党ってどういう基準で決まるんだ？」

「えっ？き、基準？えーっと、ケーキとかプリンとか、甘いものが好きだったり。あとは、だし巻き卵をすごい甘くしちゃうとか。」

「そういうのが甘党なのか……。」

「当てはまるの？」

「さあ、どうかな……。だし巻き卵は作ったこと無いからな。」

「じゃあ、今度作ってよ。」

「何でそうなる……？。」

「えっ、だって食べたいし。海さんが甘党かどうか判断したいじゃん。」

「……検討しておく。」

「おっ、それは期待しても良いってこと？」

「……お前の解釈に任せる。」

「何それ。」

そう言って彼はまた笑った。

何で俺の前だとこんなに子どもらしいのか……？週一で勉強を教えているせいか、俺とは普通に話してくれるが、空と話しているときのかおるは全く別人のように思えてならない。慣れってやつなのか？いや、しかし、慣れだったら空のほうが会う機会は多いはずだ。なのに空に対する態度は恐ろしいほど冷たい。何でだ……？思春期の子どもとはこんなに難しいものなのか……。正直よくわからない。

しずくとかおる

そろそろ食事が終わろうとしていたころだった。

「あ、あのさ。ちょっと聞きたいことあるんだけど、良い？」

少年がさきほどとは打って変わって真剣な眼差しで言うので、進路の相談か何かだと思った。しかし、なんだか様子が違う。いつになく慎重な物腰なのだ。

「何だ？」

「こんなことオレが聞くのも変なだけだよ……姉ちゃんって、学校に友達いる？」

「何でそんなこと聞くんだ？」

質問の意図が全くつかめない。

「いや、それはいろいろと理由があって……。でさ、ちゃんと友達いるの？海さん以外に。」

「俺以外か……ああ、よく一緒にいる女子ならいる。確か名前は加賀春菜といったな。」

するとかおるの顔が途端に明るくなった。

「あつそうなんだ。そっか。……友達いるんだ。よかった。」

何なんだ？訳が分からない。

「お前、そんなにあいつのこと心配なのか？」

正直シスコンにしか思えないが、ストレートに言ってしまうのも

気がひける。

「うーん、心配ってどうか、むしろ罪悪感ってどうか……。」「言葉を濁しつつ、彼は目を逸らした。」

「罪悪感?」

俺が聞き返すと彼は難しい顔でしばらく黙っていた。眼球がくるくる回る。言葉を探しているようだった。

「姉ちゃんが……その、魔女って言われるようになったの……オレのせいなんだ。」

かおるはまるで万引きをして尋問を受けている少年のような、重く弱々しい口調で言った。

「どうということなんだ?」

あまりに言いづらそうなので、出来るだけ圧力をかけないように、少し優しく言ったつもりだ。そのように聞こえているかは別として……。

「オレ、小学校のとき、その……いじめられてたんだよね……。ほら、かおるって名前、なんか女みたいじゃん。」
なるほど。そういうことか。だから言いたくなかったのか。

「――でさ、あるときクラスのやつに袋叩きにされて……それを偶然姉ちゃんが見つけて、助けてくれたんだ。」

「……超能力を使って?」

「うん。みんなビビッて逃げた。でも……そのせいであいつら、姉ちゃんのこと“魔女”とか言い出して。それからあっという間に

学校中にその噂が広がって……いつの間にか姉ちゃんの周りには誰もいなくなってた……。」

その瞳が水気を帯びてきたので慌ててティッシュを差し出した。彼は鼻をすすりながら小さな口でありがとうと言った。

「――オレが弱虫だったから、いけなかったんだ。一人でなんとかしてれば姉ちゃんまで辛い目にあわせずに済んだのに……。」

「お前のせいじゃないだろ。」

「オレのせいだよ。」

なんだか怒ったような顔だった。

「違う。お前のせいじゃない。」

「何で、そんなこと言えんの？」

目元にティッシュを押し付けながら言ったので、今度はどんな顔をしているか分からなかった。

「人は助け合って生きるものだ。誰か一人を守るためには他の誰かが傷つかなくちゃならない。」

「だったら、守らなきゃ良いじゃん。そしたら傷つくのは一人で済むよ。」

「それが俺も不思議なところなんだ。誰かが言ってたが、どんな人間でも生まれたときはみんな善人なんだ。だから傷ついた動物や交通事故なんかを見ると、本来の自分が顔を出して、その良心が痛むらしい。」

「……よくわかんないけど、人間ってもとはみんな良い人ってこと?」

「まあ。そういうことだ。だから、傷ついた人を守ろうとするのは当然のことなんだ。ましてや弟であるお前を、助けないほうがおかしいだろ。」

「……そうかもしれないけどさ。でも、オレを助けたせいで姉ちゃんが一番ぼっちになったって事実には変わらないよ。」

「そのことにお前は関係ないだろ。考えてみろ、悪ガキがあいつを“魔女”呼ばわりしたからそうなったんだ。だから、助けたのがお前じゃなくても、そいつらが噂を広めてたらあいつは一人ぼっちになってた。」

「……言われてみれば、確かにそうだね。でもさ、オレ、姉ちゃんに助けてもらったのに、なにも返せてないんだ。正直、どうやって恩返ししたら良いかもわかんないし。」

「お前が元気に毎日楽しく生きてればそれで良いんじゃないのか?」

「そんなに良いの? もっとさ、自立しなきゃいけないんじゃないの?」

ティッシュで鼻をかんでから疑わしげに言う。

「じゃあ、この家出て一人で暮らすか?」

「それは無理。」

予想通りこの提案には即答だった。

「だったら、あいつに心配かけないように空とも仲良くしろよ。」
頭を撫でながらそう言うと、かおるはくすぐったそうに笑った。

「検討しておく！」

さっきまでの浮かない顔が嘘のような、無邪気な笑顔にほっとした。

「こら。人の真似すんな。」

と言いつつも、不覚にも釣られて笑ってしまった。

まず一歩

「おはよう。……今日、早いね。」

その声に死ぬほど驚いたのは言うまでも無い。かおるくんが初めて自分から話しかけてきたのだ。

おれは予想だにしない展開に戸惑いを隠せなかった。実際、飲んでいた水を喉に詰まらせてむせてしまったし。すこぶるカッコ悪いところを見られて軽く落ち込む。

一体彼に何があったというのだろう……？絶対嫌われてると思っていたのに……何で急に話しかけようって気になったんだろう？

「あー、お、おはよう。……あの、おれ、今日から夏期講習なんだ。」

「へー。そうなんだ……。あつ、もしかして、テスト赤点だったから？」

失礼だな。まあ、その通りなんだけど……。

「うん、まあね。かおるくんは今日も部活の練習？」

「うん。もうすぐ中学最後の大会だから。」

相変わらずこちらを見ずに話しているけれど、いつもより口調が軽い気がする。

「そっか。じゃあ、夏の大会で引退なんだ。」

「そうだよ。だから、悔いの無いようにみんな頑張ってる。」

「……良い試合ができると良いね。」

「うん。」

彼はこのときだけは真っすぐおれを見て言った。“うん。”のたった一言だけだったけど、でも、今までの単なる相槌とは違う、ちゃんとした意思表示だった。

“まずはちゃんと目を見て話してやれ。”

“それから、質問に答えるだけじゃなく、必要な説明も加える。出来れば、自分から質問もしてみる。”

“少しずつで良いから、もっと空と話してみろ。そうしたら、お前の中での空のイメージが変わるかもしれない。”

朝食のトーストにキムチをのせる空の顔を見て、同じ顔の人が言った言葉を思い出していた。この人、辛いもの好きそう……。

最近気づいたことがある。この人、海とは真逆のタイプだけど、悪い人ではないってことだ。やっぱり自分から避けてたオレも悪かったな、と少し反省もした。

「辛いもの、好きなの？」

なんということもなく、聞いてみた。ホント、ただの好奇心。

「うん。中華料理とかカレーとかは、辛いほうが好きだよ。」

「――あと、パスタはタバスコぶっかけるし。それから……焼肉

行ったら、肉よりキムチばっか食べてるし。」

とか言いつつ空はいたずらっぽく笑った。“タバスコぶっかける”とか……そんな言い方するような人だとは思ってなかったの、正直驚いた。気取ってたんじゃないくて、オレと話すのに慣れてなかったから、ていうかむしろオレの態度が悪かったから、なんとなく余所余所しかったのかもしれない。

「へー、そんなに辛いのが好きなんだ。海さんとはホント真逆だね。」

「えっ、そうなの？あいつ、辛いのが苦手とか言ってた？」

「うーん、聞いてみたら……『知らん。』って言われた。」

若干眉間に皺を寄せ、低い声でそう言うとき空は大爆笑。海っぽい、と言いつつ腹を押さえていた。彼の笑いがおさまってから、オレはもう一度口を開いた。

「――姉ちゃんが家空けてたときに海さんが麻婆豆腐作ってくれたんだけど、なんか甘辛だったんだ。だからそういう話になって……あっ、そうそう、今度だし巻き卵作ってもらうんだ。あの人は絶対甘いと思う。」

「へー、それ、おれも食べてみたいな。」

「じゃあ、空さんの分、残しとくよ。」

「えっマジ？ありがとう。」

これまでの自分にはなんだか薄っぺらくみえていたその笑顔は、今や全く違ったものに見えた。なんだ、全然雰囲気違うじゃん。ち

やんと話してみると、自分がどれだけ勝手なイメージでこの人を嫌っていたかが分かった。

自分は他の同級生よりは大人だと思ってたけど、オレってまだまだ子どもだったんだな。なんだか自分で自分が恥ずかしくなった。

朝食を食べ終わり、身支度をして家を出た。姉はもうすでに出かけているので空が代わりに戸締りとゴミ捨てをかって出てくれた。案外気が利くな、と関心しつつ学校に向かった。

頭上の恒星は眩しく、青い絨毯を真っすぐな飛行機雲が切り分けていた。

副会長

夏休み中は特訓三昧で結局どこへも行けなかった。でも一つ気づいたことがある。かおると空が以前より打ち解けたみたいなのだ。少し気がかりだったので安心したのもつかの間、夏休み明けの9月は体育祭があり、クラスは応援合戦の準備に追われていた。

「委員長！赤のすずらんテープ足りなくなっただー。」
突然呼ばれて驚いてそちらを向くと山田くんが中途半端な長さのテープを右手で大きく振っている。

「ありがとう！買出しのとき一緒に買ってくるね！」
教卓から教室の一番後ろまで聞こえるように大きな声を出す、応援グッズを作っていた生徒たちが一斉に振り向いた。思ったより声を張りすぎたみたいだ……。

「しずくさん、そろそろ委員会の時間ですよ？あとは私がやって置くので、行って下さい。」
一緒にぼんぼんを作っていた春菜に言われて時計を見上げると、委員会の時間まであと3分ほどになっていた。

「えっ！もうこんな時間？ご、ごめん。ちょっと行ってくるね。」
委員会は1階の会議室で行うため、ここからだとして少し遠い。やむを得ず小走りで教室を出た。

なんとか間に合って会議室に着いたけれど、まだ半分も人数がそろっていないかった。どのクラスも応援合戦の練習やグッズ作りに忙しいみたいだ。

自分の席につくと、いつも通り隣には黙々と本に読みふける少年

がいた。相変わらずシャツのボタンはきっちり一番上まで留められていて、ネクタイもまっすぐで歪みない。読書のときだけかけているという黒縁眼鏡は知的な顔をさらに賢そうにしている。

「君がぎりぎりに来るなんて珍しい。」

本からまったく目を逸らさずに話すのが彼のデフォルトである。

「たつみくん、今度は何読んでるの？」

委員会は週に一度あるけれど、この人が同じ本を読んでいたことはない。どんな大作も一日で読み終わるらしい。

「デカルト。」

「……また哲学？」

「悪い？」

「いえ、別に。」

私は理系脳なので、彼の得意分野である哲学や文学のことはからきし解からない。今の本は同じ著者のを前にも彼が読んでいたので哲学の本だと見当がついた程度だ。

「……みんな遅いね。」

「えっ、あー、そうだね。」

こうして何事もなかったように突然話題を変える。最近になってようやく慣れてきたけれど、正直何を考えているのかさっぱり分からない。外見はさて置き、中身は少し海に似ているようにも思える。海と違うのは私の顔をまったく見ない、という点である。辰巳くん

が本から目を離して私と会話したことは一度もないのだ。

委員会は予定より10分ほど遅れて始まったが、体育祭の係り決めも無事終わり、やっと教室に戻れる。

もうダンスの練習に入っているころだろうか？急がないとまた居残り練習をしなければならなくなるので少し早足で廊下を歩いた。角を曲がると前方に良く知る少年がいた。彼と話しているのは、生徒会の副会長である。美人でしっかり者の副会長は男女隔てなく人気がある。しかし、空との接点はまったく思い浮かばない。何の話をしているのだろうと考えていると、用件が済んだのか副会長は足早に去っていった。

「あっお帰り！」

私に気づいた空が左手を挙げる。

「ただいま。さっき、副会長と何話してたの？」

さりげなく軽い口調で聞いてみた。空はなぜか目を丸くしている。

「副会長って何の？」

そんなこと聞く人は初めてだ。

「生徒会の。」

「生徒会の副会長なの？あの人が？」

何だろう？この反応は。

「うん、空、知らなかったの？」

「知らないも何も、さっき初めて見た。」

「えっ、全校集会で話してたと思うんだけど……。」

「寝てたし！」

満面の笑顔で言うので思わず噴き出してしまった。

「……それで、副会長と何話してたの？」

「うーん、何か知らないけど怒られた。」

「えっ？　どういうこと？」

「おれ今日初めてあの人に会ったのに、何で怒られたんだろう……。」

困ったように苦笑いを浮かべる空。それを見て、まさかと思う私。

「えーと、じゃあ、何て言われたの？」

「今度邪魔したらただじゃ済まないから、って。物凄い殺気でマジ怖かった。」

まさか、まさかまさか……。

「もしかしたら……それ、空じゃなくて、海に対して言ったんじゃないかな？」

「海？　ってことはさ、海はあの人に会ったってこと？」

「うーん、私は知らないんだけど……たぶん海が副会長を怒らせちゃって、でも副会長は海が空とは別人だって知らないから、空にそう言ったんじゃないかな？」

「あっそうか、なるほどね。じゃあおれには関係ないんだ。
よかったよかった、と安心する空の横で私は不安を覚えた。
どうしてだろう？ 頭の中を灰色の雨雲が永遠とめぐる。
何だろう、何だろう？ 何とも言えない気分だった。」

意外な繋がり

教室に戻ると机や椅子が移動されていて、もうダンスの練習が始まっていた。体育祭ではクラスの縦割りでそれぞれ団を組んでの対抗戦となるため、2年生は同じ団の1年生にダンスを教えなくてはならない。もちろん私も例外ではないのだけれど、ダンスなんてやったこともないので振り付けを覚えるのにも一苦労だ。

「あっしずくさん、お帰りなさい。」

私に気づいた春菜が声をかけてくれた。

「遅くなってごめんね。どこまでやった？」

「えっと、間奏の隊形移動が終わった後のところで、ちょうど今から10分休憩ですよ。」

「もうそこまでいったんだ……。どうしよう、私完全に置いてかれてる。」

「だっ大丈夫ですよ。私もまだ覚え切れてないですし、ナオちゃんなんか毎日白川くんにつき合ってもらって居残り練習してるくらいですから。」

一生懸命私をフォローしてくれている春菜に感謝しつつも、以前から気になっていたことが頭に浮かんた。春菜はクラスの男子のことはみんな苗字に君付けで呼んでいるのに、山田くんだけは例外で、下の名前で呼んでいるのだ。

「……そうなんだ。あの、私ずっと気になってたんだけど、何で山田くんはナオちゃんなの？春菜って男子のことみんな苗字に君付

けで呼んでるよね？」

「えっ、あ、それはそうなんですけど……ナ、ナオちゃんのは、昔からそう呼んでるので。えーと、つまり、私たち幼馴染なんですよ。」

「えっ、そうなの？　なんか意外だけど、そっか幼馴染だったんだ……。」

山田くんは誰に対しても同じように話すのでわからなかった。それに、春菜と山田くんが話しているところをあまり見たことが無かったのだ。

「――でも、クラスではあんまり話してないよね？」

「それは、高校入ってお互い忙しくなりましたし、学校でわざわざ話すこともあまりないので……。別に仲が悪くなったとかではないんですよ。だから、気にしないで下さい。」

「あっ、うん。わかった。」

なんとなく、それ以上聞かないほうがいい気がしたのでその話はそこで終わりにした。

休憩の後また一時間ほどダンスの練習をして、今日はお開きになった。春菜はその足で塾に行くと言って足早に帰っていった。そして今日は、金曜日。副会長のことがあって少し会うのが気まずいけれど、金曜日であることに変わりはない。

「お前、図を描くの下手過ぎだろ。定規使え、定規。」

「えー、めんどくさいじゃん。」

そう、金曜日は海がかおるの勉強をみる日なのだ。今日は数学の宿題と一緒にやっているらしい。一緒に、というよりは海がほとんどやっているようにも見えなくも無いけれど……。私はかおるの隣で自分の宿題をこなしながらその様子をみていた。

「……お前、円描くのも下手くそだな。」

「え、別にいいじゃん。」

「馬鹿。図がおかしかったら、ちゃんと計算できないだろ。」

「じゃあ、海さんが描いてよ。」

すると彼は渋い顔をしつつもかおるの持っていたシャーペンをとって円を描いた。それを見てかおるはポカンと口をあけている。彼の描いた円はコンパスを使ったのかと疑いたくなくほど美しい円だったのだ。

「ほら、ここの面積を求めるんだろ。」

大したことなんて何もない、と言う様に彼は斜線を引いた部分を指差す。

「うわ、エロ。」

いきなり何を言い出すのかと姉の私もビックリして飲んでいた麦茶を噴出しそうになった。咳き込みながら海の様子を窺うと、見るからに不機嫌な顔である。

「は？」

「友達が言ってたんだけどさ、円をフリーハンドで綺麗に描ける人ってエロいらしいよ。」

そんなわけないでしょ！と内心ツツコミをいれてしまう。一方、海は眉間に皺を寄せたまま固まっている。そして、しばらくの沈黙。まるで周りの空気が凍っているようだった。

「……なるほど。つまり俺はもうお前に勉強を教えなくても良いってことか。」

「うわー！すみませんでした！！真面目にやるから教えてください！」

「ったく、一体誰がそんな下らないことを言ってるんだか……。」

「バスケット部の山田ってやつ。確か高2の兄貴がいて、姉ちゃんと同じ楓だって。」

その言葉に思わず私は身を乗り出してしまった。

「えっもしかして、お兄さんの名前って直哉？」

確かうちの学年に山田という苗字の人は2人いるけれど、もう一人の山田さんは女子だったはずだ。

「あーそんな感じの名前。弟のほうは正哉だし。姉ちゃん、あいつの兄貴のこと知ってるんだ。」

「うん。同じクラスで、空の友達だよ。」

「そうか、あいつの弟が言ったのか。だったら不思議でもないな。」

「海、それちよつと失礼なんじゃ……。」

そんなこんなで新たな発見をしたはいいけれど、結局副会長のことを海に聞くタイミングを逃してしまい何も聞けなかった。

辰巳くん

久しぶりに夢を見た。

紅い夢。目に映るものすべてが紅。

地面も、空も、自分の手も、何もかもが同じ色。

まるで目の前に紅いフィルターがかかっているみたいに。

周囲には何もなく、何も聞こえない。

気持ち悪いくらい、静かだった。

たった一人で立ち尽くしていたのはおれなのか、彼なのか。

そして右手で強く握っていたものは、いったい何だったんだろうか……？

「空ー！」

突然ナオの大声が耳に入って現実に戻された。今朝見た夢の感触がまだこの右手に残っていて、無意識にその光景を思い出していたのだ。

「何？」

慌ててそちらに駆け寄ると、

「A組の委員長様からお呼び出しが。」

秘書みたいな口ぶりで言うのがおかしくて反射的に口を押さえる。と同時に少し違和感を覚えた。隣のクラスの委員長なんて顔見知りでも何でもない。もしやまた海の知り合いか、と思いつつそちらを見ると、これまた不思議なことに呼んだ当の本人が一番不思議そうな顔をしていた。

「君、誰？」

「えっ？誰って、そっちが呼んだんじゃ……。」

「オレが呼んだの、雨野なんだけど。雨野しずく。」

我ながら頭の回転が遅いため、事態を把握するのに数秒かかった。

「……あつ、なるほど。ナオが雨野と晴野を聞き間違えたのか。」
クラスの人は大抵しずくのことを委員長と呼んでいて、彼女を名前で呼ぶのはおれと加賀さんだけ。だから彼女を苗字で呼ぶのは先生くらいで、“雨野”は生徒にはあまり馴染みが無い。一方おれは名前か苗字が主流になっていて、つまり、おれは“晴野”と呼ばれることも多い。だからナオが勘違いしたのも無理もない、というわけだ。

「なんというか、わざわざ来てもらったのに申し訳ないことしたな。えーっと、君は……。」

「晴野空。空でいいよ。」

「空か。良い名前だね。」

えっ、そんな言われたの初めてなんだけどな……なんかこの人、ほかの人にはないオーラを持っている気がする。

「ど、どうも。」

なんか、すごいじろじろ見られてて落ち着かない。何なんだろう？この人。

「――あのさ、しずくに用があったんだよね。でも、今いないみたいだから、なんか伝言とかあったら伝えとくけど。」

「あー、そうか。君みたいに名前で呼べば間違われなくていいかもしれない。」

「はい？」

いきなり話題を変えられて正直ついていけない。この人おれと会話する気あるのか……？

「雨野って言ったたら晴野と間違えられたから、名前で呼べば絶対間違われないはずだ。」

「はー、確かに。そうだね。」

やばい。おれこの人苦手だ。なんか海以上に扱いづらい。

「じゃあ、しずくに伝えてほしいことがあるんだけど。」

うわ、早速名前と呼んでるし！何故か鳥肌が立つ。自分以外の男がしずくなんて呼ぶのを初めて聞いたからだろうか？

「あー、うん。」

「今日の委員会はなしになって、明日の4時半に変更。以上。」

「えーと、今日の委員会がなしで、明日の4時半からに変わったってことを伝えればいいんだよね。あってる？」

「うん。じゃあ、よろしく。」

「あっ、うん。」

おれが返事をするとは彼はそそくさと自分のクラスに帰って行った。その姿が見えなくなってから軽いため息。すると自分でも驚くほど、

どっと疲れが出てきた。

隣のクラスの委員長とナオが言っていた少年は自分と比べると少し背が低いけれど、シャツのボタンは一番上まで閉まっていて、ネクタイもまっすぐ。なんだか清潔感のある少年だった。そしてなんとなく、絡みづらい印象を受けた。

教室に戻ってきたしずくに先ほどの伝言を伝えると、なぜか笑われた。

「ごめんね。なんか、空とたつみくんが話してるところ想像したら、おかしくなっちゃって。」

と言いつつもまだ笑っている。たつみって名前なのか……。ていうか、それ苗字？名前？

「そんなに変な組み合わせ？」

「うん。ちゃんと会話できた？たつみくん、すごいマイペースだから、いきなり話題変わったりしてビックリしたでしょ。」

「ビックリっていうか、ついていけなかった。」

「そうだろうね。」

こんな些細なことで笑ってくれることがどんなに嬉しいか、きつと君は知らないんだろうな。

「そういえばさ、たつみくんって本名なんていうの？」

「辰巳理央。」

「りお？」

「うん。良い名前だと思うんだけど、本人はあんまり自分の名前が好きじゃないみたい。だからみんな苗字で呼んでるの。」

「あーなんか、分かるかも。ちょっと女の子っぽい名前だし、たつみっていう苗字のほがかっこいいしね。」

とにかく、たつみっていうのが苗字だとわかってちょっと安心した。でも同時にそんな小さなことを気にしている自分に気づいて情けなくなったのも事実だ……。

それからしばらくの間、彼のことを話していた彼女はとても楽しそうだった。それに対して、おれは何が面白いのかよくわからなかった。

彼女の中で自分がどう位置づけられているのかはだいたいわかってるつもりだ。

少なくとも自分は一番じゃない。そのくらいはわかる。わかるけど……いや、だからこそ、彼女の一番近くにいたいと思ってしまうのだろうか？

そばにいられるだけで十分とか、彼女の幸せが自分の幸せだとか、おれは本当にそう思っているのだろうか？

嘘つき。この大嘘つきめ。

おれは自分にも、彼女にも嘘をついている。

少しずつ

体育祭の準備も大詰めを迎えた。本番は明後日の土曜日。昨日の1年生との合同練習に引き続き、今日は隊形移動の最終調整をする予定だったのだが、台風接近に伴う大雨のために午後の練習はなしになってしまった。

「というわけで、今日は各自、家でダンスの復習をしておいて下さい。じゃ、今日はこれで解散!」

団長の臼井くんが1年生も含めたミーティングでそう締めくくり、生徒は散っていった。

「臼井くん!」

「あっ、委員長。」

帰っていく生徒たちの波に逆らうように振り向いた彼に駆け寄る。隣にはダンスの振り付けを担当している水橋さんもいた。

「今日やるはずだった練習、明日のいつに回す? 明日は予行練習だから、リハの持ち時間は通し練習に当てる予定だったよね。」

「そのつもりだったんだけど……でも、隊形移動もやっておかないとかヤバイよな。」

そう言いつつ額の前に手を当てる。本人は気づいていないようだが、何かを考えると決まって彼がする癖である。

「ヤバイ、マジでヤバイよ。今日は結構時間とれるはずだったから隊形移動を集中的にやろうと思ってたんだもん。」

臼井くんの隣で水橋さんは頭を掻き回していた。これが彼女の癖

である。二人ともそれぞれ特徴的な癖があって面白いな、と思っていると臼井くんが突然「あっ！」と声を上げた。

「今気づいたんだけど、昨日の予報だとさ、台風は今日の夜来ると言ってたけど、もう台風来てるじゃん。まだ昼過ぎたところだぜ？」

「えっ何？　どういうこと？」

水橋さんが手をとめて、首をかしげる。

「えっと、台風来るの早まったから、通り過ぎるのも早まるってことだよ。つまり、台風が通り過ぎてしまえば、天気はよくなるはずだから、明日の朝とか練習できるかもしれない。」

「さすが委員長！　そう言いたかったんだよ。」

「なるほど。でもグラウンドは使えないね。雨で地面ぐちゃぐちゃだもん。どこか良い場所あるかな？」

「うーん、旧校舎の駐車場とかどうかな？」

実は夏休みの間、石神先生と特訓をした場所である。それなりに広くて地面はコンクリートで舗装されているため、雨が降った後でも隊形移動の練習ができる。

「旧校舎って駐車場あったっけ？　あたし、行ったことない。」

「俺、一回行ったことある。グラウンド使えないときにそこで筋トレしたんだけど、結構広かったな。」

「隊形移動できそう？」

水橋さんが私のほうを向いて聞いてきた。大きな瞳を囲む長い睫毛がいかにも女の子らしい。

「たぶん、できると思うよ。」

「よし。じゃ、予報見て天気大丈夫そうだったら、明日は旧校舎の駐車場で朝練ってことでいいな。」

「何時からにする？あたし家近いから5時とかでもいいよ。」

「5時！？それは早過ぎだろ。せめて7時とかにしようぜ。」

「家遠い人もいるからね。私もそのくらいがいいと思うよ。」

「委員長が言うなら、しょうがない。7時でいいよ。」

「いやいや、団長俺だから。」と突っ込みを入れる白井くんを尻目に水橋さんはけけらと笑った。

「じゃあ、7時から朝練って、みんなに連絡しとくね。」

「おう。委員長、いつもありがとな。」

「白井くんと水橋さんに比べたら、私なんてそんな大したことしてないよ。連絡してるだけだもん。」

「何言ってるの！練習日程考えてくれたのほとんど委員長でしょ。あたしたち、そういうの全然できないからすごい助かったんだよ。」
水橋さんの言葉が嬉しくて、うっかり泣きそうになってしまった。

「役に立ててよかった。」

そう言う二人とも何も言わずに頷いてくれた。

最初は応援合戦の中心である二人に練習場所の割り振りなどを事務的に伝えているだけだったのが、その場の成り行きで一緒に練習日程を考えたりするようになり、今まで一度も話したことが無かった白井くんと水橋さんと仲良くなったのだ。

二人とも最初のころは私を少し怖がっている様子だったけれど、いつの間にか他の友達と同じように話してくれるようになった。いつ、どんなふうにして私たちの間にあった壁が消えたのかは、正直わからない。でも、ちゃんとお互い目をみて遠慮せずに話ができる相手というのは、つまり友達なのだと思う。

普通の人よりずっと遅いペースだけれど、少しずつ、友達ができるようにになったのは、空と出会ってからだ。私を“魔女”ではなく“普通の女の子”として見てくれたから、自信が持てた。

今思えば私の人間恐怖症は、他人と交わることで自分が傷つくのが怖かったからだ。でも今は、傷つきたくないという思いよりも知りたい、もっと関わってみたいという思いのほうが強くなった気がする。

帰り道、強風に飛ばされそうになりながらぼんやりとそんなことを考えていた。

どこへも行かないよ

一瞬何が起こったのかわからなかった。

私は強風で飛ばされた傘を追って走っていた。そして突然、今まで無かったはずの緑色が視界に入ってきた。と、同時に何かに腕を強く引かれた。

気づくと視界は真っ暗。

聞こえるのは、何かの悲鳴のような悲しい音と、規則正しく刻まれる優しい音。

頬を掠める冷たい風に怯えつつも、その暖かい振動に安心した。顔を上げるとキレイな金色の髪。

振り返ると道路に横たわる街路樹。

おそらく初めて人目にあらわになったであろう立派な根。

灰色の空はまだ大粒の涙を流し続けていた。

「早くどけ。」

少しかすれた声で彼は言った。覆いかぶさっていた体を退くと、彼はゆっくり体を起こして自分の頭をさすった。

「今日、木曜日だよ。」

なぜそんなことを口走ってしまったのか、自分でも分からなかった。もっと言うべき言葉があるというのに……。

「金曜以外は出てこない、と言った覚えは無い。」

青緑の瞳が当然のようにそう言ったのがおかしくて少し笑ってしまった。

「そうだよ。変なこと言ってごめんね。助けてくれて、ありがとう。」

「ああ。怪我はないのか？」

「軽く膝を擦りむいただけだよ。」

そう返すと、安心したのか口元が少し緩んだ。けれど、すぐに元に戻ってしまった。

思い切り下ろしたシャッターみたいに不意に閉じた瞼が、今までそこにあった深海を覆い隠すと、まるで電池が切れてしまったかのようにその体から力が抜けた。そのまま倒れてしまいそうだったので慌てて体を支えると、微かに息遣いが聞こえた。もしやと思ってそっと額に手をあてる。冷たくなっていたはずの手がみるみる暖かくなった。

このままではまずい。とりあえず家に戻って寝かせなくては。

頼りなく垂れたその腕を握って意識を集中する。

移れ！

次の瞬間には家の玄関にいた。バスタオルでびしょ濡れの服を拭き、いつかのときと同じように、先に帰っていた弟に手伝ってもらい病人を部屋に運んだ。彼の着替えは私がシャワーを浴びている間に弟に頼んだ。

「39度3分。よくこれで学校行けたよなって感じ。」

着替えてから彼の部屋に戻ると弟が驚きや呆れを通り越して、むしろ哀れみの意をこめたような口調でそう言った。

「熱、そんなに高かったんだ……。かおる、色々ありがとう。もう私一人で大丈夫だから部屋戻っていいよ。」

「あつ、そう。あのさ……、まあいいや。じゃあね。」

かおるは何か言いたげだったが、それ以上は何も言わず部屋を出て行った。

かつて夜影を倒した直後に気絶した空を家に運んで看病したときと同じように、私はりんごを剥いた。それから本を読みながら彼の様子をみることにした。何時間経っただろう？そろそろ推理小説も終盤にきていた。さすがに氷枕の氷も融けてしまっていたので、中を取り替えようと腰を上げた。そのときだった。

「行くな。」

確かにそう聞こえたが、瞼はしっかりと閉じられていた。空耳だったのだろうか……？しかし、もう一度立ち上がろうとしたとき彼の右手が私の服の裾を掴んでいることに気づいた。

「すぐ戻ってくるから、大丈夫だよ。」

言ってから後悔した。目を閉じている彼に私の声は聞こえない。

「行くな。行くな。頼むから……どこへも、行くな。」

どんな夢を見ているのだろうか？腰を下ろして、顔を覗き込む。

「——ち、がう。……命令とか、……とか、そ、なのは……関係ない。」

途中聞き取れない部分はあったけれど、彼の口から絞り出された声は何か必死に訴えているようだった。

「——ただ、わら、て、いて……ほしか、た。それ、だけ……だ。」

「――だめだ。お前は、消えちゃ……だめだ。や、めろ。いくな。……いくな。」

私は彼の右手を両手で握り締めた。だって……泣いてたから。そしてその涙は、この世界のどんな綺麗な水よりも透き通っていたから。だから、そうせずにはいられなかった。

彼がどんな夢を見て、悲しんで、涙を流しているかはわからない。わからないけれど、力になりたかった。私の声は届かないから、その手を握ることしかできなかったけれど、それでも繋がっていたかった。

“私はどこへも行かないよ。ここにいるよ。”

と、心の中で何度も唱えた呪文がこの手を伝って届いたなら、彼の悪夢もいい方向に変わるような気がしたのだ。

しばらくすると私の心の声が届いたのか、少しの間彼が私の手を握り返した。そして全身の力が抜け、もとの無表情に戻った。呼吸も穏やかになっていたので、私は両手をそっと離した。

私の声に答えた海の声。まだその温度と感触がこの手に残っている。

これは私の勝手な解釈、というか願望であることは確かだけど、それでも、私にはこう聞こえた。

“ありがとう”

静かに眠る彼の横顔を眺めてから、氷枕を手にも音を立てずに部屋を出た。

街路樹をなぎ倒した風も、もう飽きたのかすっかり静かになっていた。台所の窓を開けると、ひんやりとした空気が流れ込んできた。いつ止んだのか、雨もすでに止んでいて遠くに三日月が見えた。しばらくぼうっと見とれていると、不意にその真下に紅い点が現れた。

ほんの1秒ほどで消えてしまったが、その光は嫌な空気をそこに残していった。新しい氷枕を彼の首の下に滑り込ませた後、私は家を出た。

葵

嵐の去った夜の空気は少し冷たく、少し重く感じた。風も今は大
人しい。

道路にはどこから飛んできたかも分からないような看板や骨の折
れた傘、バケツなどが散乱し、私はそれらの間を縫うようにして前
に進んだ。

五つ目の角を曲がったあたりから、耳鳴りがひどくなり頭もズキ
ズキ痛み出した。そろそろ夜影の姿が見えてもいいころかもしれない。
い。

石神先生が言うには、私は夜影が発する超音波に敏感な体質であ
るために、このような症状が出てしまうらしい。だから夜影を見つ
けたら耳栓をしろ、と言われていたので今日もそれを携えている。

一度試してみたこともあるので、おそらくそれで事足りると踏ん
でいるけれど、多少なりとも不安は残る。というのも、以前学校に
二体の夜影が現れた際、足元もおぼつかないほどの頭痛に襲われた
ことがあったからだ。つまり、夜影の数が多かったり、夜影自体の
レベルが高かったりすると、その分超音波も強力になるようなのだ。
そのような場合、耳栓程度で対処できるかどうかは、まだ試したこ
とがないのでわからない。

しかし、今はそんなことを言っている場合ではない。海が動けな
い状態である以上、今は私がやるしかないのだ。

覚悟を決め、頭上の三日月を見上げたとき……目が合った。

紅く燃え盛る炎のような瞳。漆黒の体は闇に溶け込み、紅い二つ
の点だけがそこに浮かび上がっていた。夜影だ。

すぐさま耳栓をした。取り出す時間がもったいなかったので、力

を使って小さな容器の中の耳栓だけを瞬間移動させて自分の耳にねじ込んだ。そして右手の指先で胸元の雫型のペンダントに軽く触れる。瞬く間に剣に姿を変えたそれを両手でしっかりと握った。

微かに手が震える。

落ち着け、私。あれだけ特訓したんだから、絶対大丈夫。大丈夫。何度も自分に言い聞かせて紅い瞳をみた。そのまま片時も目を逸らさずに大きく息を吸って、吐いた。そしてもう一度両手で剣を握りなおし、左足で強く地面を蹴った。

自分の剣と相手の大きな鎌が激しくぶつかった。衝撃が体を伝う。耳栓をしているから私自身の耳にはそれほど大きな音は聞こえなかったが、金属がぶつかり、擦れる音が辺りに響き渡っているようだった。

何度も同じ動作を繰り返し、時折その黒い翼で軽快に飛んでみせる相手に私は必死についていった。

少し息が上がってきたころ、一瞬相手が隙を見せた。

今だ！

思い切り剣を突き刺した。

何とも言いがたい不思議な手ごたえとともに夜影の悲鳴が微かに聞こえた。

終わった。そう思って剣を引き抜こうとした。

しかし、剣はビクともしない。

黒い骨ばった鳥のような手が両手で剣を握っていたのだ。

まさか、そんなわけではないと思いながら相手の顔を見ると、信じられないことに瞳の中の炎は消えていなかった。

まずい。剣が抜けない。止めを刺さなくては。
どうしよう。どうしよう。……どうしたらいいの？

無意識に彼の顔が浮かんた。

こんなとき、彼ならどうするんだろうか？

彼がやりそうなことを頭の中で思い描いた。

そして、左足で相手を蹴った。

自分でも驚くほど強引な手段を選んできましたが、おかげで少し剣が抜けた。

しかし、それでも相手の手は固く、剣を握ったまま離さない。

仕方なくもう一度同じことをしようと左足をあげたとき、突然何かにぐいと引っ張られるようにして夜影が剣から抜けた。そして再び、今度は先ほどよりもけたたましい叫び声をあげた。それと同時にその真っ黒な羽根が飛び散り、魂が四方に弾けた。

在るべき場所に戻っていく魂たちを見送ると、夜影が消えたあたりには人が立っているのに気づいた。フードのついた真っ黒のコートを頭からすっぽり被っている。

耳栓をとって恐る恐る近づいていくと、相手のほうが先に口を開いた。

「雨野……しずくちゃん？」

確かにそう言った。なぜ私の名前を知っているのだろうか？

「はい。そうですけど……あなたは？」

慎重に尋ねると、相手は何を思ったのかずんずんと早足にこちらに近づいてきて私の手をとった。

何がなんだかわからず戸惑っている私に、その人は嬉しそうに話しかけてきた。

「あなたと一緒にだよ。アタシ、同じ女の子の除影師に会ったのって初めて。しかも知ってる子だったなんて……すごい嬉しい！」
そう言ってフードを脱ぐと、そこには見覚えのある顔があった。

「副会長!？」

思わず素っ頓狂な声を上げてしまった私に対し、彼女はちよつと複雑そうな表情だった。

「やっぱり、みんなそう言うよね。でも、しずくちゃんには名前前で呼んでほしいな。これから長い付き合いになりそうだしね！」
そう言って笑う彼女の顔は普段の知的で有能な美人副会長とは別人のようだった。

「えーと、た、たっ、たたべ、さん。だよね？」

確か副会長の本名は田々部葵。しかし、みんなの憧れの存在を目の前にして緊張したのか、うまく舌が回らなかった。

「あおいでいいよ。アタシの苗字、めっちゃ言いにくいでしょ？」

「あっ、じゃあ、あ、葵ちゃん。さっきはありがとう。夜影に止め刺してくれたの、葵ちゃんだよね？」

「あーうん。なんか剣抜けなくて困ってるみたいだったから。」

「ありがとう。すごく助かったよ。」

改めてお礼を言うと、くすぐったそうに彼女は笑った。

私は生徒会副会長ではなく、田々部葵という一人の女の子に、今日初めて出会ったような気分だった。

何だ、この気持ち

寝過ごした。

壁に掛かっている時計を見上げると、今まさに9時を回ったところだった。ちょうど体育祭の予行練習が始まる時刻である。

遅刻決定だな。

誰にということもなく、ただ畳に向かって呟いた。

職務を果たさなかった裏切り者を睨みつけると、申し訳なさそうに3時50分あたりを指したまま沈黙していた。電池切れか……。やり場を失った怒りは途端に溜息に姿を変えた。

じっとしていても何も始まらないので、気持ちを切り替えるためにもとりあえずシャワーでも浴びよう。そう思い、立ち上がったはいが、急な動作に体がついていかず軽く眩暈がした。思わず自分に舌打ちをする。かなりの時間眠っていたはずだが、さすがにまだ全快というわけにはいかないようだ。

気を取り直して着替えを片手に浴室に向かう。

誰もいない。時間が時間だけに、しずくもおるもすでに家を出た後なのだろう。

服を脱ぐと思ったより汗をかいていたらしく、Tシャツが微かに湿っていた。欠伸をしながらいつも通り左腕に手を伸ばすと、感触がいつもと違うことに気づいた。

一瞬思考が停止し、そして一気に目が覚めた。すぐに鏡で確認する。

嘘だろ……。

自分の顔から血の気が引いていくのがわかった。
あるはずのものがそこに無かったのだ。

ない……包帯が、ない。確かに昨日も巻いていたはずなのに……。

自分で取った覚えは無い。

ということは、誰かが取ったということに他ならないのだが、あまりの衝撃に脳が現実を受け入れるのに数秒を要した。

つまり、これを見られたってことだ。誰だ？ しずくか？ それとも弟か？

いずれはばれるだろうと覚悟はしていたが、まさかこんなに早くその日が来るとは思わなかった。まあ、別に見られたところで俺が困るわけではないが（空は多少困るかもしれないが）、良い気分はしない。

変なマーク、相手にはそれくらいにしか認識されないであろうそれは、俺にとっては一生付きまとう暗い影なのだ。もっとも空の師匠の計らいで、もはや原形は留めていないのだが、できることなら跡形もなく消してしまいたい。

この腕に刻み込まれた印は、俺と彼女の間に越えられない壁があることをまざまざと見せ付けるものだからだ。

改めて考えてみると、隠していたのは他人に見られたくないというのより、自分が見たくないという理由のほうが大きいのかかもしれない。現にじっくり見ようとしても無意識に目を逸らしてしまう。直視できないのだ。試しに何度か試みたが、途中で馬鹿らしくなつてやめた。

結論。見られたものは、もうどうしようもない。だからそう割り切ることにして久しぶりに動揺して冷や汗をかいた背中を中途半端な勢いのシャワーで洗い流した。

二度寝するかどうか迷ったが、結局制服に着替えて薬棚にあった救急箱をあさり、包帯を一巻き拝借した。

空に代わろうとしたが、うんともすんとも言わないのでそれは一端諦めて、しずくの残したメモ通りに礼儀正しくコンロの上に正座して待っていた土鍋の蓋を開け、中の白粥を器に盛って空っぽの胃に収めた。

どうせ遅刻なのだから、急ぐ必要は無いだろう。

食器を適当に洗い、念のために風邪薬を飲んでから、ジャージとタオルをかばんに押し込み、歯ブラシをしながら戸締りをした。

早く起きろよ……。

と、聞こえるはずも無いもう一人の自分に対してばやいてみたが、やはり無駄だった。

ここ最近、日中は体育祭の練習、夜中は夜影退治という生活が続いたせいか、かなり疲れが溜まっていたのだろう。

仕方ない。今日はゆっくり休ませてやるか……。

学校に着いたのは10時5分前くらいだった。ジャージに着替えて校庭に行くとするでに一つ目の競技の退場の練習をしていた。

「おー！ やつと来たか！ 晴野、今日は社長出勤だな。」

人ごみを掻き分けてやつの思いで自分のクラスの応援席にたどり着くと、空の担任の教師、確か増田とか言う小太りのおっさんが俺を見つけるやいなや大声で声をかけてきた。途端に周りの生徒の視線が一斉にこちらに向けられる。何食わぬ顔でその中に溶け込むうとしていた俺は、いきなり出端をくじかれた形になってしまった。

「おはようございます！ 社長！！」

そのネタ引っ張るなよ……。かおるに変なことを教えた奴の兄貴、山田直哉が被っていたキャップを脱いで腰を直角に曲げる。その大げさなお辞儀にどう反応すべきか迷っていると、他の生徒たちがそれを皮切りに次々に同じようにぺこぺこ頭を下げていった。

目の前の異様な光景に困惑していると、後ろから現れた優一が応援用のメガホンで直哉の後頭部を一発殴った。ポカッという軽い良い音がして、どっと笑いが沸き起こる。

「いちいちネタに走るな。突っ込むほうの身にもなれ。」

良かった。彼はまともだ。正直言ってこの学校の偏差値なら、まともな人間しかいないはずなのだが……。何はともあれ、まともな人

間が一人いて助かった。

「いってー。優一、容赦なさすぎ。」

そう言いつつも頭を上げた直哉は笑っていた。

「そういえば、空、熱はもう下がったのか？」

直哉には目もくれず優一は俺に尋ねた。

「ああ、下がった……。」

途中で気づいた。そういえば朝、体温を測るのを忘れた。

「――はず。」

しばらくしてからそうつけ加えると、珍しく優一が噴き出した。

「はずって何だよ。測ってないのか？」

隣の直哉も一緒に笑っている。別に笑わせようとしたわけではないのだが……。

「忘れてた。」

「まー、でも、なんか普通に元気そうだし、良いんじゃないね？」

相変わらず軽い調子だな。

なるほど、こいつの弟と仲がいいから、かおるもあんな感じなのか……と妙に納得した。

その後も直哉は何か下らない話をしていたみたいだが、それに付き合うのも面倒だったので、少し首を伸ばしてあたりを見回した。

しずくの姿が見えない。どこにいるのだろうか……委員会の仕事だろうか？

委員会……。

なぜか隣のクラスの委員長の顔が浮かんた。

そして、次に浮かんたのは彼女の笑顔だった。

“辰巳くんって面白いんだよ。”

何で、今思い出すのがそれなんだ？

それに、俺には関係ないだろ……。

目の前に繰り返し流れるその映像から顔を背けた。

偶然だった。本当に、偶然目に入った。人垣の隙間から見えた本物の映像。

彼女の穏やかな笑顔が向けられているのは……

あいつだった。

関係ない

今頃彼はどうしているだろう？

まだ寝てる？それとも起きたかな？

お粥はちゃんと食べてくれたかな？

薬の場所、分かったかな？

体の調子は良くなったのかな？

まだ熱が下がってなかったらどうしよう……。

頭の中は彼のことといっぱいで、隣にいる辰巳くんがいったい何の話をしているのかさっぱりわからなかった。いくら聞こうと思っても、いっこうに頭に入ってこない。

だから、仕方なく曖昧な笑みでごまかしていた。そんな私に彼は気づいていただろうか？よくわからないけれど、彼が機嫌を損ねたようには見えなかった。

やっぱり、病人を一人家に置き去りになんてするべきじゃなかった。

体育祭の予行練習は入退場の練習が主な内容だから誘導係の私が休むわけにはいかない。そう思って泣く泣く家を出たけれど……どうしても心配だ。

お昼休憩に入ったら一度家に戻って様子を見てみよう。トイレに行く振りをしてどこか人目につかない場所で瞬間移動を使えば、時間内に戻ってこれそうだ。

時計を忘れたので辰巳くんの腕時計を見せてもらった。誰もが知っているブランドのロゴが入ったその時計は持ち主に似て几帳面に時を刻む。太陽の光が反射して上品に光る針は10時を少し過ぎた

辺りを指していた。ということはお昼休憩までは少なくとも2時間はあることになる。2時間か……。授業がある日はあつという間に感じるけれど、今は途方もなく長く感じられた。

お礼を言った私に対して、いつものように短く返事をした彼は今日は眼鏡をしていない。

本人曰く、本を読む暇がないし、大事な本を砂まみれにしたいから、だそうだ。いつもレンズを通してみていた目元はいつもより切れ長に見え、初めて見た彼のジャージ姿はなんだか新鮮で、かつ、どこかアンバランスで不思議な雰囲気醸し出していた。

そういえば、本を読んでいない辰巳くんと話すのも初めてだ。やはり一度も目が合わない。癖なのだろうか？

彼の視線の先を目で追っていると、急に彼の足が止まった。なんだろうと思って私もそちらを見遣ると、綺麗な金髪が目についた。

あつ、と思った次の瞬間にはもう自分の足は動き出していた。自分でも驚くほどの速さだった。気づくと息切れしながらジャージの袖を掴んでいた。

それに気づいて振り返った少年の瞳は青緑だった。なぜかそれには驚かなかった。

普通なら声をかければ済むものを、わざわざ彼のすぐ側まで来て袖を掴んだのは、それを予期していたということかもしれない。

「熱は？」

肩を上下させながら言うと、呼吸が整うのを待ってくれたのか、海は少し間をおいてから私の聞きたいことを先回りして答えた。

「もう下がった。朝飯は食べたし、葉も飲んだ。戸締りも大丈夫だ。」

「体は、だるくない？」

「ああ。問題ない。」

そう言い終わる前に彼の視線が飛ぶ。つられて振り返ると、辰巳くんが軽く息を弾ませながら立っていた。

「急に走り出すから、驚いた。」

その口は私に向かってしゃべっていたけれど、その目は私を通り越して、後ろの青緑の瞳を見据えていた。

反射的に謝ろうとした私を制して、海が口を開いた。

「悪い。ちょっとこいつ、借りる。」

そう言って、袖を掴んだままだった私の手首を掴むと、駄々をこねる子どもの手を引く親のように私を引っ張って歩きだした。強制的に連れて行かれる形になった私は戸惑いつつもそれに従うことにした。

その背中が何を考えているのか皆目見当もつかなかったけれど、なんだか少し怒っているように見えたのだ。顔は見えないのに、なぜかそんな感じがした。

体育館裏にたどり着いたところで彼はやっと手を離れた。そのまま柱の前に腰を下ろし、それにもたれて一息つく。私は少し迷ったけれど、同じように柱に身を任せるようにして隣に座った。

絵に描いたような横顔。改めて見ると、その美しさに見とれてしまう。

「お前……あいつといて楽しいか？」

まっすぐ前を向いて言うので、一瞬誰に向かって言っているのか

分からなかった。しかしこの場合、どう考えても私以外には考えられない。

「えっ、まあ……楽しいよ。辰巳くんって、ちょっと変わってるし。」

答えを聞くと彼はすぐに顔を背けてしまった。

しばらくの沈黙。

しっかりと結ばれた口元は微動だにしない。次の言葉を待ってみたけれど、まったく動く気配がないので、仕方なくこちらから聞いてみることにした。

軽く袖を掴んで少しだけ引っ張る。するとゆっくりと首が回って重そうな長い睫毛を被った瞳が現れる。その中に見える深い海は、今日も綺麗だった。

「――どうして、そんなこと聞くの？」

「別に。特に意味は無い。」

目を逸らしながら早口に言う。例のごとく無表情である。

「――それよりお前……あれ、どこやった？」

何事も無かったかのように話題を変える。それ以上は聞くな、ということだろうか……？

「あれって何？」

「包帯。」

そう言って右手で左腕を軽く叩いた。

「えっ、知らないよ。もしかして……左腕、怪我してたの？」

「違う。怪我はしてない。」

「――そうか、じゃあ……かおるか。」

どういうことだろう？ 包帯はしてたけど、怪我じゃないって……。何だろう？ すごく気になる。

「かおるが、どうかしたの？」

「別に。大したことじゃない。」

ああ、まただ。面倒なことは全部「別に」の一言で片付けようとする。そうやって私には何も教えてくれないのだ。

「私って……そんなに信用できない？」

さすがのようにその瞳に訴えると、彼は軽く溜息を漏らしながら、やれやれといった風に肩をすくめた。

「安心しろ。信用してないわけじゃない。ただ、お前には関係ない。それだけだ。」

教えてくれるものだと思っていた私は愕然とした。そして同時に堪らなく虚しい気分になった。

近づいたと思ったら離れていく。掴みどころが無いというよりは、掴もうとするとさりとかわされる、そう、まさにそんな感じなのだ。

人は誰でも、他人には踏み込まれたくない領域を持っているもので、例えば思い出したいくない過去の経験や過ち、あるいはコンプレックスや誰にも言っていない自分だけの秘密などがそうだ。そして、それは彼も例外ではないはず。

だからこれ以上は聞いてはいけない。頭ではわかっているけれど……

“お前には関係ない”

その言葉がこんなにも残酷に胸に響いたのはどうしてだろう？
彼はそんなつもりで言ったのではないと思いたいけれど、

お前なんかには一生わからない。

と、目の前に線を引かれ、入ってくるな。と言われたみたいに感じた。

どんな悪い方向に考えてしまうのが私の悪い癖だということとは重々承知しているけれど、自分ではどうにも止められなくて、しまいはのどの奥からこみ上げてきたものを抑えこむのに必死になっていた。

するとそれに気づいたのか、それとも単なる気まぐれなのか、不意に彼が口を開いた。

「俺は、お前に余計な心配はかけたくない。だから、今はまだ知らなくていい。そう思っただけで……。」

こちらに顔を向け、真っ直ぐに私を見据えて言った。

「——お前には一生教えない、とかそんなふうには思っていないぞ。」

この人、エスパーなのかな……？

そう思ってしまったのは、それがまさしく私の言って欲しかった

ことだったからだ。

体育祭

長い夢だった。

でも、それがどんな夢だったのかは、どうしても思い出せなかった。

木目調の天井。

その隅に目をやると、相変わらず人の顔に見えてちょっと怖い箇所があった。

なぜか目が覚めたらそれを見るのが習慣になっている。

枕元で馬鹿みたいに喚く目覚まし時計をひっぱたいで黙らせた。

なんとなく寒いと思ったら、薄布団が蹴飛ばされてぐちゃぐちゃになっていた。

おれって、こんなに寝相悪かったっけ？

まあ、いっか。もしかしたら、おれじゃなくてあいつのせいかもしれないし。

やつれて文句を言う覇気も無さそうな布団を整えながら、ふと首をかしげた。

よく考えたら、何でおれ自分の部屋にいるんだ？

確か昨日、しずくの帰りが遅くて心配になって、嵐の中様子を見に行ってたはずなのに……。

ああ、そうだ。途中で意識がなくなったんだ。たぶん、あいつの仕業だ。

海が変わるときはいつも何の前触れもなく意識が遠のいていくん

だ。急に背中を引っ張られるような、そんな感覚。

なんとなくではあるけれど、少しずつそういうのがわかるようになってきた。慣れってやつかな？

とにかく、もしおれの勘が当たっているのなら海が何か書き残しているはずだ。おれは彼が行動しているときは意識がないから、海は自分が行動したとき何があったかを必ず紙に書いて記録しておいてくれるのだ。といってもそれは彼がおれに伝えるべきだと思った事柄だけを書いたものだから、あいつの興味を引かないような些細な出来事は完全にカットされているみたいだけど……。

おもむろに起き上がって机の上をのぞくと、案の定、そこにノートの切れ端が置いてあった。いつもの無機質で感情の籠っていない文字で端的に書かれている。

“嵐の中しずくを発見したは良いが、そのまま俺はぶっ倒れたらしい。熱がかなり高かったそうさ。しずくが家まで運んでくれたらしく、それから翌朝までずっと寝ていた。”

あっそうさ、思い出した。なんか昨日は調子悪かったんだ。

“起きて、学校に行こうとしてお前に代わろうとしたら、応答なしだったので俺が行くことにした。”

ん？海が学校に行った？

“予行練習が終わって帰宅してからは例のごとく、かおるの勉強を教えた。”

海がかおる君に勉強教えるのって金曜だよな。さっきまで今日が金曜だと思ってたけど、違うのか……？

“その後、もう一度お前に代わろうとしたが失敗におわり、その

まま寝た。”

あっそうか、ということはつまり、おれが倒れたのは木曜でその次の日の金曜は海がずっと行動してて、今日おれが起きたのは土曜ってことか。

“どうやら俺が行動している間、お前はずっと寝ていたようだ。最近、体育祭の練習やら夜影退治やらで疲れが溜まっていたんだろ。以上。”

なるほど。そういうことだったのか……。

でも、おれがダウンしている間、何で海は動けたんだろう？痛みは感じないって言ってたけど、体のだるさなんかも感じないのか？正直そこんところがまだよくわからない。

まあ、あいつがおれを寝かしといてくれたおかげで今日はすこぶる調子がいいし、考えてもどうせ分かんないだろうから、これでよしとしよう。

学校に着くと、運動場の周りの応援席は生徒でぎっしり埋め尽くされていて、これじゃ地上の酸素が足りなくなるんじゃないかと心配になったほどだ。それをナオに話したら盛大に笑われた。

グラウンドに整列し開会の言葉を聞いている間もそれをネタにからかわれたので、準備体操をしながら、やっぱり言うんじゃないかってと少しだけ後悔した。全校生徒がお決まりの音楽に合わせて同じ動きをする姿はどこか異様でもあり、それでいてどこか懐かしさも感じた。

軽快な音楽に合わせて小走りに退場し、自分の席に戻った。少し遅れてやって来たしずくが全員におそろいの緑色のはちまきを配っ

て、みんなそれを頭に巻いた。

しずくは普段あまり髪を結んだりしないので、彼女がその長い髪を二つに分けて三つ編みにした姿はすごく新鮮だった。加賀さんがやってくれたらしい。

ああ、もう直視できないくらい……かわいい。

似合ってる。

心の中で呟いた。それだけで頬が熱くなるのがわかった。これじや本人には一生言えっこないな……。

同じような感想をクラスの何人かが口にしていた。水橋さんなんかはさっきからずっとかわいいを連発している。しずくは照れながらも嬉しそうにしていた。

出会ったとき、彼女は友達がいらないと言っていたけれど、いつの間にか加賀さんと仲良くなっていたし、最近では体育祭の準備などで水橋さんや団長の臼井くんなど、いろんな人と気軽に話せるようになっていた。おれの知らない間にもうすっかりクラスに溶け込んでいたのだ。いや、溶け込むというより、むしろ彼女はみんなの中心にいる。委員長としての責任感が強くて、律儀でいつも一生懸命な彼女。“魔女”ではなく、そういう彼女の本当の姿が人を惹きつけるんだろうな。

そうやって彼女がたくさんの人に好かれていくということは、もちろん嬉しくもあったけれど、少し複雑な気分だった。ずっと自分しか知らない場所に隠れていた宝石が人目に露わになってしまったみたいな、そんな気分。いつそれを取り去る人間が現れても不思議じゃない。でも、だからといっておれが小さな箱にしまい込む権利はない。だって、はじめからそれはおれのものなんかじゃないから……。

はちまきを手に持ったまま、ぼうっとそんなことを考えていると、彼女が不意にそれをおれの手から抜き取って後ろに回った。

「自分で結べるから、いいよ。」

慌ててそう言ったが、彼女の返答は無く、代わりにはちまきが目の前に現れて、額にあてられた。

「この色……少し、似てるの。」

後ろではちまきを結びながら彼女は言った。

「えっ？何に？」

振り返らずにおれは聞いた。

「海の瞳の色。本物はもう少し青っぽいけどね。」

耳元で囁かれたので心臓が止まるかと思った。しかし一瞬にして急上昇した心拍数は、その言葉を頭の中で反復していくうちに急降下していった。

なんだ、海の話をしたかっただけのことか。確かにあいつのことが周りに知られたらまずいしな。だから、しずくはみんなには聞かないように言ったわけだ。

それだけ。たったそれだけのこと……。

「――はい、できたよ。」

振り返ると満面の笑み。さっきまで胸に突っかかっていた何かが一気に吹き飛んだ。この笑顔がおれに向けられてるってだけで、もう十分じゃないか。

贅沢は身を滅ぼす。

だから、今はこのままでもいい。

体育祭02

「……おさげ。」

「えっ？お、おさげ？」

予想外の第一声に、思わず聞き返してしまった。

「うん。昭和の女学生みたいだね。」

「……辰巳くん、本の読みすぎだと思うよ。」

そんな会話をしながら私たちは入場門へと向かった。彼とは同じ誘導係りなので、昨日に引き続き今日も一緒に行動することが多そうだ。

しかし、こんなにジャージが似合わない人もそういないのではないだろうか？派手な黄色のはちまきも少し長めの前髪の下で居心地悪そうにしていた。

「あっ、もやしっ子じゃん！相変わらずジャージ超似合わねー！」

列に並ぼうとしている生徒たちの話し声の中でも一際目立つその大きな声の主は、もはや見なくてもわかった。山田くんだ。楽しそうに辰巳くんを指差してけらけらと笑っている。

「盛り上がってるところ悪いんだけど、さっさと並んでくれないかな？バカ田アホ哉。」

辰巳くんは怒るわけでもなく、冷静に対応する。明らかに暴言を吐いているのに、なぜか汚い言葉に聞こえないのは彼の特権であろう。

その姿を横目に私は山田くんの言葉を頭の中で復唱していた。もやしっ子……。捲くったジャージから覗く彼の白い腕を自分の腕と見比べてみる。確かにそうかもしれない、と心の中で納得したのは内緒にしておこう。

「バカ田とか、もやしっ子に言われたくねーっつの！」

「お前も大して変わらないだろ。もやしっ子。」

白川くんの声を合図に、周囲にどっと笑いが巻き起こる。

「オレはあいつより筋肉あるから、もやしじゃないの！！」

「どっちでもいいから早く並ぼうよ。障害物競走、もうすぐ終わりそうだし。」

「よくない！そういう空だって、もやしっ子じゃん。血管浮き出てんし。」

「えー！？それはもやしっ子と関係ないでしょ。」

「整列に非協力的な緑団は、何点減点しようか？」

これぞ、鶴の一声というのだろう。辰巳くんの一言で辺りが一瞬にして静まり返った。

生徒委員は体育祭の進行を妨げる行為や、競技における不正行為を見つけた場合には、その生徒の所属する団の得点から減点することができるとだ。これは体育祭運営を担う委員の職権とでもいうべきもので、この制度は生徒会副会長である葵ちゃんが提案した“正々堂々、公平に”というスローガンを実現するべく設けられたものだ。

「すみませんでした。」

山田さんと空が口をそろえて謝罪し、いそいそと列の中へ入っていった。途中から声が聞こえなくなっていた白川くんはというと、当然のようにすでに整列していた。そのあたりはさすがである。

そうこうしているうちに前の競技も終わり、恒例のムカデ競走に出場する生徒たちを誘導する時間になった。うちの団のアンカーは山田くん、空、団長の白井くんなど俊足ぞろいのチームだ。

山田くんが中心になって放課後や空き時間によく皆で集まって練習をしていたので、かなり期待されていたのだが、途中で転んでしまい残念ながら4位に終わった。

午後は各団による応援合戦が始まった。音楽に合わせて旗を振ったり、短い劇をやったりと、10団それぞれに知恵をだしあった出し物がなされた。応援合戦はお客さんと先生方の投票で得点化され、競技の得点に加算されるので、どの団もかなり力を入れていた。

私たちの緑団はボンボンを持ってダンスをした。前日の朝練の成果もあり体系移動もスムーズにできて、なかなかの出来だった。担任の増田先生によると、お客さんにはダンスが可愛いと好評だったらしい。

応援合戦が終わると、緊張がほぐれた生徒たちは競技に熱中し、その姿勢に呼応するように周囲の声援もボリュームが増し、体育祭を盛り上げていった。

そして、日も傾き始めたころ、ついに最後の競技を迎えた。お待ちかねの選抜リレーである。

どの団も、各学年男女各3名選りすぐりの生徒を送りこむので、当然私たちのクラスの男子は山田くん、空、臼井くんの3人が選ばれた。一方の女子は水橋さん、陸上部の猪俣さん、そしてもう一人は……なぜか私が選ばれた。

すぐに他の人に代えて欲しいと増田先生に頼んだ私だったが、本気で勝つために100m走のタイム順に選んだベストメンバーだと一蹴されてしまった。

選抜リレーは、10の団が二つのグループに分かれて行う。私たちの団は第二グループだったので最後の最後の競技になり、言うまでもなく盛り上がりは最高潮に達していた。

今まで一度もリレーに選ばれたことがなかった私は、みんなの足を引っ張らないようにと懸命に走り、一番走者の臼井くんが三位でくれたバトンをなんとかそのまま死守して次の走者の一年生に繋いだ。

その後、一端4位に順位を落としたものの、山田くんの活躍で2位に浮上し、そのままアンカーの空にバトンが渡った。みんなの期待を一身に背負い、空は勢いよく走り出した。

しかし、その前を走る水色団のアンカーは、短距離の女王と囁かれる陸上部のエース……葵ちゃんだった。

体育祭03

葵ちゃんは去年、1年生にしてインターハイ出場という快挙を成し遂げ、生徒会役員選挙ではその知名度と成績の優秀さから圧倒的な支持で副会長に当選したのだ。

そんな葵ちゃんは、彼女相手に短距離で勝負したら、男子でも勝てないだろうと常日頃から言われていたのだ。

しかも、昨日の予行練習でも本気で走っていた彼女のことだから、本番でも絶対に手を抜いたりはいしないはずだ。だから余計に心配になった。

空！頑張って！！

皆の叫び声とともに私も叫んだ。

コーナーを曲がって最後の直線に入る。

山田くんが腕を大きくぐるぐる回している。

放送委員の実況の声にも力が入る。

もう少し、もう少し。

両手を強く握る。

並んだ。

行け！

ゴールテープを切った。

勢い余ってそのまま転がるように地面に倒れる。

駆け寄った臼井くんが起こして肩車する。

それに山田くんが猛ダッシュで突進。

猪俣さんも飛び跳ねる。

私の手を掴んだ水橋さんは真っ赤な顔で泣いている。

「一位は、緑団です!!」

空は雲ひとつ無い快晴だった。

「今日はお疲れ様。」

体育祭の打ち上げまではまだ少し時間があつたので、一度家に帰ってシャワーでも浴びようということになった。砂まみれの体操着から新しいTシャツに着替えた空に麦茶を手渡すと、一気に飲み干してしまいコップの中の氷がからからと涼しげな音を立てた。

「ふー、あれはホントきつかったよ。」

タオルで濡れた髪を拭きながら彼は言った。

「葵ちゃん、すごかったもんね。」

そう言って私も残りの麦茶を飲み干した。

「なんかもう、あれは女じゃないよね。もはや妖怪レベル。」

その言葉に思わず噴き出してしまった。まさか同じことを言うとは思っていなかったのだ。

そう。昨日の予行練習のとき、本気で走った葵ちゃんを容赦なく

抜かした彼もそう言ったのだ。

「空って、そういう言語センスは海と一緒になんだね。」

「えっ、何それ？」

空は目をまん丸にして手をとめる。

「昨日ね、予行練習のとき、たまたま一位でバトン貰った海が面倒くさそうにゆっくり走ってたら、葵ちゃんが本気で走って海を抜かして……。」

その光景を思い出してまた笑いがこみ上げてきたので慌てて口をふさいだ。

「で？」

早く続きを、というふうに空が私を覗き込む。

「そしたら、なんかスイッチ入っちゃったみたいで、海も本気出してすぐに抜き返して勝っちゃったの。」

「うわ、大人気ないな。あいつ。おれは団の優勝がかかってたから必死で走ったって言うのに。」

「私もそう思って、本番じゃないし相手は女の子なんだからもう少し優しくねって言ったら、『あれは女じゃない。もはや妖怪だ。』って言われて……。さっき、空が同じこと言ったからビックリしちゃった。」

「言語センスが一緒って、そういう意味だったんだ……。でも、自分がいっと同じこと言ったのかと思うと……なんか、ちょっと複雑な気分。」

眉間にしわを寄せながらピアスを付ける空がいつになく海に似ていたので、やっぱりこの二人にはいくらか共通点があるのだと確信したのだった。

しかし、このときの私は、海と空があのか葵ちゃんを“妖怪”呼ばわりしたことに対して自分が感じたある種の安堵感のようなものがあった。何なのかを、まだ知らなかった。

ケンカの発端

空は晴れて澄み渡り、体育祭のときの暑さはどこへやら、髪を揺らす風は冷たくなり、手先やほっぺが赤く染まる季節に変わりつつあった。そんな中、来月に定期試験を控えた11月末、私は困った状況にいた。

嘔吐き。

「何？なんか言った？」

声を出さずに言ったので、その内容までは空にはわからなかったようだ。でも、彼には確実に伝わっているはずだ。しかし、反応は無い。

「あっごめん。なんでもないの、気にしないで。」

空に対して言った言葉ではないので、そう言って私はその場を取り繕った。

やっぱりこの作戦は無理かな……。

怒らせて出てきてもらおうと思ったのだけれど、無反応だった。彼ならきつと毎日言ってもさほどダメージはなさそうだから、これ以上やる意味はないし、何よりそれをやっている自分を想像すると眩暈がする。そもそも悪口なんて私の性に合わないし、この作戦はもうあきらめよう。

そうなるも次の策を練らなくてはならないのだが、困ったことに新しい策が何も思い浮かばない。

でも、このままだと、かおるに悪いし……。どうしよう。

かれこれ海はもう3週間も鎖国状態で、一回も出てきておらず、金曜日の弟の勉強をみることも放棄してしまっている。これは私に対する嫌がらせだ。あちらから謝る気はさらさらない、という意味表示だろう。

つまり、私たちはケンカをしている。

どうしてこうなったのかというと、事は今から2ヶ月前にさかのぼる。

「断る。」

「えっ、そんな、きっぱり……。」

「俺がやる必要性を感じない。空の師匠にでも頼めばいいだろ。」
うろたえる私に構わず彼は無表情のまま答えた。

「それが……石神先生は職員会議で来れないらしくて。」

「じゃあ、空か、あの妖怪……葵とかいう名前だったか？あいつに頼んだらどうだ？あれも一応、除影師だろ。」

まさかそこで葵ちゃんの名前を出してくると思わなかった。彼は葵ちゃんが除影師だということをいつ知ったのだろう……？

「葵ちゃんは生徒会の仕事で忙しいし、空は……なんか、ちょっと頼りないというか……。」

「……。まあ、多少頼りないかもしれないが、お前の認定試験ともあれば、あいつだってそれなりにちゃんとするだろ。」

「ごもつともです。私もそこまで空を信用していないわけでもない。でも……認定試験の立会人は被験者のもしものときのために必要とされているわけだから、下手な人は選ばないのだ。」

「うーん。そうかな？でも、なんか駄目なの。」

「何が？」

先ほどまでの無表情が一気に崩れて眉間にしわがよる。私のはつきりしない態度に彼もその苛立ちを隠せなくなったようだ。それでも私は本当の理由をうまく言葉にできなかった。

「なんて言ったらいいのかな？なんか、安心できないんだよね。」

「……俺だったら安心できるのか？」

「うん。」

「どうしてかは、自分でもわからないけれど……やっぱり海じゃないと安心しきれない。」

「お願い。」

「そう心の中で祈りつつ、じっとその瞳を見つめると、長い溜息で返事をされた。」

「悪いが、俺には無理だ。」

「……どうして？」

期待させといて、突き落とす。彼はそういうのが得意らしい。

「立会人なんか俺にできるわけがない。」

「理由になってません。」

「無理なものは無理だ。あきらめて他の奴をあたれ。」
「どうして？無理なわけないでしょ。それにさっきから、ちゃんとした理由を一つも言っていないじゃない……。」

「わかった。でもそのかわり、左腕の包帯のこと教えて。この前ちゃんと話すって言ったでしょう？」

「なんだか腹立たしくなってきた、予想外にもそんなことを口走ってしまった。」

「言っていない。そんなことは一言も言っていない。」

「言ったよ。体育祭が終わった次の日に。」

「記憶にない。」

「あなたの記憶に無くて、私はちゃんと覚えてます。」

「……また今度な。」

「またそうやって引き延ばす。」

「仕方ないだろ。そういうのには時間が必要なんだ。」
彼は自分は悪くないと言わんばかりの口ぶりだ。

「私、軽蔑したりしないよ。絶対。だから……。」

「そういうのは関係ない。俺の問題だ。」

無表情で容赦なく言い放ったその言葉は、果てしなく高い壁へと姿を変えて私の目の前に立ち塞がる。

「……。」

「もう少し待ってくれ。」

「じゃあ、海が立会人やってくれるなら、認定試験終わるまで待ちます。」

「……お前、何怒ってんだ？」

「怒ってないです。」

「真顔で言うな。」

「どうするんですか？今ここで左腕の包帯のこと話すか、立会人やるって約束して試験が終わるまでその話は保留にするか。」

「要するに、やれば良いんだろ。立会人。」

さすがに堪忍したのか、投げやりな口調ながらも彼は承諾してくれた。同時に私は肩を撫で下ろした。

「ありがとう。終わったら絶対話してね。約束。」

「……はあ、仕方ないか。」

そう言って彼は渋々指切りをした。

しかし、無事認定試験が終わり、私の合格通知が届き、晴れて一人前の除影師になれたにも関わらず、彼がその話をしようとする気配は一向になかった。

春菜の勘

「約束、忘れたわけじゃないよね？」

彼がいつまでも話そうとしないので待ちきれなくなった私は金曜日、かおるが寝た後に直接聞いてみることにしたのだった。

「……かおるには見られたらしいしな。」

そう言っておもむろにTシャツをめくり左腕の包帯をはずし始めた彼は、妙に落ち着いていた。

「えっ、見てもいいの？」

話をするこことさえ嫌がっていた包帯を自らとるなんて……どういう風の吹き回しだろう？

「もう二度と見せないからな。」

そう言っで見せてくれたのは、やはり刺青だった。でも、それは私が予想していたものよりはるかにシンプルで、隠すほどの代物ではなかった。

「スイス？」

「字の下は横棒が長く伸びていて、その上に長方形とスイスの旗のような模様があった。筋骨たくましい強面の外国人がしているような、いかにもという感じの刺青とは質も量も全く違う。」

「……。」

「……そんなにすごいんじゃないんだね。隠してるくらいだからもっと派手なのかと思ってた。」

「よし、もういいだろ。」

そう言って彼は何事もなかったかのように包帯を巻き始めた。

「え、待って。これ、何の意味があるの？」

「特に意味は無い。」

彼は目線を逸らして早口に言った。絶対何か隠している、私は瞬時にそう判断した。

「嘘。」

「嘘じゃない。」

「だって、こういうのって普通もつとカッコイイ絵を彫るんじゃないの？ ほら、龍とか、虎とか。でも、わざわざこんなシンプルなを彫るってことは、何か特別な意味があるんじゃないの？」

「ない。」

即答である。

「本当はあるでしょ。」

「ない。」

なかなか往生際が悪い。このとき私のお腹の中に小さな火がともった。

「ちゃんと話すって約束したでしょ。」

「見ればわかるだろ。説明は必要ない。」

だんだん、お腹の奥底が煮立ってきた。このときはまだ中火くら

いだったろうか？

「必要あります。」

「……お前には関係ない。」

「またそれ？」

ああ、もう強火になってしまった。言葉にも熱が帯びていた。

「仕方ないだろ。関係ないものは関係ないんだから。」

この一言で鍋がひっくり返った。私のお腹の中は火の海と化す。

「嘔吐き！ちゃんと話すって約束したじゃない！」
思わず叫んでしまった。

「……。」

「海なんか、もう知らない！」

今このときに戻れるとしたら、私は真っ先にこの言葉を取り消したい。

なぜならこの一言が彼の怒りの炎を着火させてしまったからだ。そしてその炎は今なお消えていない。

「ああ、そうか、わかった。じゃあ、もう俺は必要ないんだな。」
椅子から立ち上がりそのまま自分の部屋へと向かおうとした私の背中に向かって彼は言った。

「えっ……。」

絶対に振り向かないと決めていた私だが、思わず反射で首が回った。

「お前がいくら泣こうが喚こうが、もう絶対出てこないからな。」

「ま、待って。」

そう言ったときにはもう、そこに海はいなかった。変わりにそこにいた空が慌てふためく私の様子にきよんとしていた。

そして今に至る。

相変わらず海が出てくる気配は微塵も無い。彼は頑として姿を現さないのだから謝ることさえできないのだ。

空には海とケンカをしていることは言っていない。もしかしたら海から聞いているかもしれないけれど、空は何も言わないのでわからない。ただ、ここのところ自分の意識がなくならない、つまり海が出てきていないことに気づいていることは確かだ。でも、彼はそれ以上海のことを私に聞いてくることはなかった。

いかにして海を折れさせるか思案しつつ私はお弁当の出汁巻き卵を口に運んだ。ほんのり甘いくらいがちょうどいい。いつか彼の作った出汁巻き卵は甘すぎて後味が最悪だったのを思い出す。かおるはお腹をかかえて、甘すぎて死ぬと叫ぶので、仕方なくフォローしてあげた覚えがある。

「そういえば、晴野くん。最近、ずっと水色ですね。」

「えっ、何の話？」

一緒にお弁当を食べていた春菜が突然思い出したようにそんなことを言い出した途端、それまで空中にふわふわ飛んでいた自分の意識が一気に現実に取り戻された。

「瞳の色です。ときどき緑っぽく見えるときがあつて、そのときの晴野くん、なんていうか……いつもと雰囲気違って、なんか別人みたいだなんて思ってたんですけど、今はそんなことなくって……」

その言葉に思わず卵を喉に詰まらせてしまった。驚いた。まさか気づいてる人がいたなんて……。

「――あの、変なこと言ってますいません。たぶん私の思い過ごしです。」

そう言つて春菜は大きさにむせる私を心配して背中をさすつてくれた。お茶を流し込んでやっと少し落ち着いた後、私は口を開いた。

「別に変なことじゃないよ。驚いただけなの。」

そう言つてから私は一端周囲を見回した。窓際のほうからは山田くんと白川くんの声とともに何人かの笑い声が聞こえた。一瞬クラス中の視線がそちらに向けられて静かになったが、すぐに元通りあちこちで話しが再開され賑やかになった。そのタイミングで私は春菜に近寄るよう合図した。

「――春菜は、いつからそのこと気づいてた？」

声を押し殺すようにして慎重に尋ねると、春菜は一瞬驚いた顔をしたが、その後すぐに真剣な目になって答えた。

「えっと、体育祭前あたりからですね。ちよくちよくそういう日があつて……。あの、もしかして、本当に……。」

「うん。そう。別人なの。」

その言葉に春菜はかなり動揺しているようだった。これが普通の人の反応だ。私は内心、少し安心していた。

「つまり……に、二重人格ってことですか？」

私の瞳の中を確認するように春菜はゆっくりと口を動かす。

「うん。緑っぽい瞳のほうは、海っていう名前なの。」

「なるほど、カイくんっていうんですね。」

その真っ直ぐな瞳からすると、私の言ったことを大かた信じてくれているようだ。

「あの、このことは誰にも言わないでほしいんだけど……。」

「わかってます。絶対誰にも言いません。約束します。」

「ありがとう。本当にありがとう。」

そう言って春菜の手を取ると彼女はなんだかくすぐったそうに微笑んだ。

これからは、一人で悩まないで済みそうだ。だってもう春菜は海のことを知っているのだから、ケンカのことにも相談できる。私はそれがものすごく嬉しかった。

暢気な鳥

「何が原因かは知らないけどさ、いいかげん許してあげたら？」

例のごとく右手にシャーペンを握って見えない相手に話しかけると、少し間をおいてから彼はノートの上に文字を書き始めた。勝手に自分の手が動くというこの奇妙な現象を前にしても、もう驚きもしない。初めてこうして海と会話したときは思いのほか緊張していた気がする。そうして半年以上も前のことを思い出しながら、おれは彼の声を目で追った。

“許す、許さないの問題じゃない。”

「何だそれ……。あのね、目が合うたびに『ごめん』って口パクで謝られるこっちの身にもなってよ。最初はわかんなかったけど、毎回同じ口の動きするから覚えちゃったじゃん。」

“それは悪いと思っている。今日のは何て言ったかわかったか？”

「わかんなかった。いつもと口の動き違ったし。何て言われたの？」

“『嘔吐き』”

予想外の回答に目を疑う。しずくがそんなことを言うとは……。そうとう頭にきているらしい。普段の様子からすると、彼女が他人に不満や文句を言うなんて想像もできなかった。でも、あのときの光景を思い出して頭の中でそれに台詞を当てはめてみると、妙にしっくりきて笑えた。

「嘘ついたの？」

“約束を守らなかったただけだ。”

「だけって……それは怒るでしょ。」

“俺の独断で行動するべきじゃないと思ったんだ。お前の承諾も得るべきだと。”

「何？どういうこと？」

“左腕のあれ。いつか話すと言ったのを覚えていたらしい。あいつの認定試験が終わったら話せと約束させられた。そんなにすぐに話せるようなことでもないから、手っ取り早く一回見せてしまっただけで納得させようと思ったんだが、甘かった。”

「えっ、見せたの？いつ？」

“3週間ほど前。”

「マジで？そういうのは早く言ってよ。」

“悪かった。”

「で？」

“見せたらそれで終わりにするつもりだったんだが、ちゃんと説明しろと食い下がってきたので断固拒否した。”

「それでしずくが怒ったってわけ？」

“ そういうことだ。 ”

「あのさ、おれもこのマークの意味、よく分かってないんだけど……海は全部知ってるの？」

“ 今あるマークに意味は無い。もとの印をわからなくするための上から彫ったものだからな。 ”

ということは、おれの腕には消さなくちゃいけないような印が刻まれてたってことなのか？ 何だよそれ……。

「もとの印って何？」

言いたくないのか……。しばらく宙を彷徨った右手は意味なく線を描き始めた。真っ直ぐ横に伸びていく。ノートの端まで達すると向きを変えて元きた道を帰っていく。それを3回ほど繰り返した後、急にその手が止まった。

“ 1052 ”

デジタル時計のような四角い数字。その下には長い横棒がひかれていた。

一瞬何かの年号かと思ったが、すぐに気づいた。これ、イチゼロゴーニーって読むんじゃないのか？

そうだ、あの夢でおれは、いや、海はそう呼ばれていたはずだ。でも、どうして番号で呼び合わなくちゃならないのか、おれにはまだ見当もつかない。

「その番号って何なの？」

“ 個体番号 ”

「は？」

“ バーコード。売り物にはみんな番号が付いているだろ。この番号もそれと同じだ。”

一羽の暢気な鳥は何も考えずに飛んでいた。ただまっすぐに。自分の生まれた場所も、自分の親鳥の顔も知らずに……。

でもその下にはそれを狙う猟師がいた。猟銃の音が聞こえたときにはもう遅い。鳥は撃たれてまっさかさまに地面に落ちていく。落ちながらも自分の身にいったい何が起きているのかわからない。大きな衝撃の後、上から声がする。「ああ、なんだ。おもちゃの飛行機か。」って。そこで初めて気づくんだ。自分が何者だったのかを……。真っ暗な世界で。

この暢気で愚かな鳥はおれだ。何も知らずに生きてきたおれ自身だ。

彼はおれの腕についていた番号は売り物のバーコードと同じようなものだと言った。……そう、つまり、この体は売り物だったって

ことだ。

どこで生まれたかも、親の顔さえも知らない。それを一度も疑問に思ったことは無い、と言ったらそれは嘘になる。知りたいと思ったことは何度もある。でも、師匠には聞けなかった。知るのが怖かったんだ。

そうやって、おれはずっと逃げてきたんだ。知らないままでいいと割り切って。でも海は、おれが割り切ったその余りの部分を、ずっと一人で受け持ってくれてたんだ。そう、今までずっと……。

不意にトンと軽い音がしてそちらを見ると、右手が「見ていろ」とでも言いたげにシャーペンを握りなおしてゆっくりと動きだした。先ほど書いた数字の5と2の周りに何本か線を書き足す。新たにできた4つの四角を塗りつぶす。すると真ん中に白い十字が浮かび上がった。それから思い出したように1と下の横棒を線でつなぐ。

ああ、なるほど。こうやってあのマークが出来上がったわけだ。

“お前の師匠がうまい具合に彫ってくれた。一応言っておくが、あの人は、ある人に頼まれてお前を引き取ってくれたんだ。商品として、お前を買ったわけじゃない。その証拠にちゃんと人間として育ててくれただろ。”

「うん。そうだね。」

石神龍一郎。師匠ではあるけれど、やっぱりおれにとっては父親みたいな人だ。

几帳面で、部屋を片付けないとすぐ怒るし、料理は味濃いいし。モテるわりに女遊びはしないけど、別れた女がストーカーまがいの行為に走り、家に押しつけてきたこともあるし、女を見る目がなさすぎる。それに全く酒が飲めないかわりに一日1箱はタバコ吸うし、伊達めがねはすぐ無くすし……。

でも、数学の成績が悪いと付きっ切りで勉強教えてくれたり、除影師になりたいって言ったら本気で特訓してくれたし、家から追い出しても学費は何も言わずに払ってくれてるし……やっぱり、頼りになる。そういう人なんだ。

おれはたぶん運がいいほうだ。普通の人間でも、犬や猫みたいに扱われている人だっているのだから、それを思うとおれは周りの人間にもものすごく恵まれている。

はつきり言って、今おれは幸せだ。これ以上望むものなんてない……というのは言いすぎか。でも、今幸せだと感じられるのも、きつとおれをここまで育ててくれた師匠のおかげだ。今度何か送ってあげよう……伊達めがねでいいか。

お節介

「あのさ、なんか話逸れちゃったけど、結局しずくのことはどうすんの？」

今日、海と話をしようと思ったのは、他でもないそのことについて話を聞きたかったからだ。まさか、あんな衝撃の事実を聞く羽目になるとは思っても見なかった。まあ、結果だけ見れば大きな収穫に違いないのだけど、心の準備というものが全くできていなかったためか、思いのほか気持ちの整理に時間が掛かってしまった感に否めない。心なしか沈んだ空気に少し反省しつつも、いつも通りの口調を指して口火を切ると、間髪いれずに彼は返事をした。

“俺たち、そろそろこの家出ないか？”

「はい？……何それ？急に。」

全くもって質問の答えになっていないその返答に、思わず間拔けな声を上げてしまった。

“急にじゃない。ずっと前から考えてた。”

ずっと前から、なんて言われても困る。もう一人の自分が考えることなんて知るわけが無いのだから。

「そんなの、言ってくれなきゃわかんないって……。」

半ば諦めながらも相手に聞こえるように呟いたが、やはり完全無視である。右手は迷うことなくシャーペン走らせていた。

“いつまでもこの家で二人に迷惑をかけるわけにはいかないし、しずくも一人前の除影師になったことだし、もうお前が一緒にいる

必要も無いだろう。”

「別に迷惑って感じじゃないけど……かおる君はむしろ、海にはこのまま家にいて欲しいって言いそうだし。」

“家出るってだけで、もう二度と会わないわけじゃないだろ。お前はもう少し自立するべきだって言ってるんだ。昇級して給料も上がってるだろうし、この辺の安い賃貸なら借りられるだろ。お前家追い出されたとき師匠に通帳と印鑑渡されたの、覚えてないのか？ あれは自分がいなくても、もう一人で除影師としてやっていけると思ったからだろ。その金で自分で部屋探せて意味だったんだよ。馬鹿。”

確かに。言われてみれば100万くらい入った通帳と印鑑を渡されたような気もする。もしものときに使えてことだと思ってたけど、そういう意味だったのか。

最後の殴り書きの『馬鹿』の文字を眺めながら溜息が漏れた。まあ、自分が馬鹿なことは認めるけど、漢字で書かれるとなんだか救いようの無いバカみたいに思えて仕方が無い。せめてカタカナにしてくれ。本質は変わらないのだけど、そのほうがいくらかましに思える。

「じゃあ、おれの自立のために家出るって言ってるわけ？」

“それもある。”

「『も』って何だよ。『も』って……。」

ああ、まただ。答えに詰まると、苦し紛れに関係ない線を描き始める。それが彼の癖らしい。今度は同じ円の上を時計回りにぐるぐ

る回っている。山手線みたいだと思いながらぼうつとその様子を眺めてみると、ちょうど新宿あたりで停まった。中央線にでも乗り換えるのだろうか？いや、ここはあえて地下鉄へ乗換えて東西線か？なんて下らないことを予想していると、右手はまるであざ笑うかのように品川方面へと走り始めた。逆周りとか、反則だろ。

“悪かったな、反則で。”

しまった。心の声のつもりが、うっかり実際に声に出していたらしい。

「だって普通乗り換えだって思うじゃん。新宿だよ？」

“新宿？何の話だかさっぱりわからん。”

「いいよ。どうせ海にはわかんないから。」

というのは嘘で、こいつに言ったら馬鹿にされそうで嫌だったただけだ。それに、「この位置だったら新宿じゃなくて目白だ。」なんてことを真面目に言いだしそうで恐ろしい。

“なるほど。大したことじゃないんだな。”

「うん、まあ、大したことではないね。で、何でこの家出たいの？」

“大人の事情。”

何だこれは。どう反応したらいいのか分からない。

「……それは、ウケ狙い？それとも本気？」

“本気に決まってるだろ。お前一人のウケ狙ってどうする？”

若干文字が乱れている。イラついている証拠だ。

「でも、それじゃ答えになってない。」

“知ってる。”

じゃあ、ちゃんと答えろよ。喉元まで出なかったツツコミはかろうじて飲み込んだ。

「あのさ、もっと分かりやすく説明してくんない？」

“年頃の娘の家に、若い男がいるってどうなんだ？”

「どうって言われても……。」

そんなこと考えたことも無かった。でもよくよく考えてみると確かにそれは問題ありな事態ではある。

“普通に考えて、かなりまずいだろ。父親に知られでもしたら、確実に殺されるぞ。”

「確かに。でもしずく、まだお父さんには話してないっぽいよ。現に、おれ生きてるし。」

“しかし、このまま隠し通すのは不可能だ。父親が帰ってきたら絶対バレる。どんなに忙しくても年末はさすがに帰ってくるだろ。”

「あー、だから今なの？」

“そういうことだ。”

「バレる前にドロン！ってわけか。」

“早いうちにドロシしたほうが良いだろう。ドイツにいるらしいから、おそらくクリスマス休暇で帰ってくるだろうしな。”

「ドイツ？何その情報……。おれ全然知らなかったし。」

“覚えてなかったただけだろ。”

「あ、そう。」

“そういうことだから、この家出ることは近いうちにお前から言っておいてくれ。”

「いいけど、仲直りは自分でしなよ。」

“検討しておく。”

何だそれ……。本当に仲直りする気あるのか？

もう怒っているわけではないみたいだけど、仲直りしろと言うと、やっぱりなんかこう、煮え切らないというか、曖昧な態度でかわされるのだ。しずくに嫌われたと思っているのか、それとも仲直りのタイミングが掴めないだけなのか、おれにはよくわからないけれど、彼なりに何か障害を抱えているのかもしれない。

それにしても、お節介なやつだ。お前はもう少し自立するべきだ、なんて……。どうも兄貴ぶっている感じがする。本音をいってしまえば結構うっとうしいのだけど、彼の言っていることは間違っていない、というかむしろ正論とも言えるべきものだから反論できないのだ。でも、まさかしずくのお父さんのことまで気にしてとは思わなかった。そんなに人の心配する余裕あったら仲直りの方法考えろよっ

て言いたくなる。まあ、結局言わないのだけど……。

何はともあれ、お節介焼きの相方に半ば呆れつつも感謝した夜だった。

そう、暢気なおれは知らなかったのだ。この相方が笑いを乗り越えて同情したくなるほど不器用な奴だとは……。

決めたこと

「というわけで、クリスマスまでにこの家出ることにしたんだ。」

「……わかった。」

空の言いたいことは理解できた。確かに、クリスマスにお父さんが帰ってきたときに空が家にいることがバレたらとんでもないことになる。その日だけどこかに泊まるという手もあるが、それだと部屋の荷物をどこかに隠さなければならない。ただでさえ居候させてもらっている身なのにこれ以上迷惑はかけられない、という気持ちもよくわかる。

けれど、一つ気になることがあった。お盆に父は帰国しないのかと海に聞かれたとき、毎年クリスマスだけは必ず帰ってくると言ったのは覚えているけれど、私は空に父がドイツに滞在中だと言った覚えがない。

「じゃあ、ちょうどいい部屋が見つかり次第、引っ越すから。」
風呂上りでまだ乾ききっていない髪の毛をタオルで拭きながら空は言った。それはまるで他人事のような口ぶりだった。

「うん。あの、一つだけ聞いてもいい？」

「何？」

「それは、空が決めたこと？それとも……。」
私がそのさきの言葉に詰まっていると、空はおもむろに先ほど牛乳を飲み干したコップを持ってソファから立ち上がり、冷蔵庫を開けて再び牛乳を注いだ。

「海には相談乗ってもらったけど、決めたのはおれだよ。」

冷蔵庫を片手で閉めながら早口に話す横顔がぎこちない。やっぱり、こういうところはよく似ている。嘘をつくときは、二人とも必ず目を逸らすのだ。彼はそれを誤魔化すために席を立ったのだろう。

「……家を出たって言い出したのは、海なんだね。」

少し非難をこめた目で言うと、案の定彼はうろたえて牛乳をこぼしそうになった。

「何でわかったの？」

納得がいかない、という風に口を尖らせる姿はいたずらがバレたときの子どものようだった。行きのときとは違う意味で重くなった足どりで再びソファに戻ってくる。彼が向かいの席に腰を下ろすのを待ってから私はそれに答えた。

「さあ、なんでだろうな？」

初めて会ったとき、どうして私の名前を知っているのかと聞いたら、あの人は温度のない声でそう言った。

「えっ、何で？」

「教えてほしい？」

空には悪いけれど、思い出して欲しかった。だからあえて同じことを言った。あのとき彼が言ったように、真っ直ぐにその瞳を見つめて。

「うん。」

「空と海って、嘘つくときは必ず目を逸らして早口になるの。だから、すぐわかったちゃうんだよ。」

「全然知らなかった。……やっぱり、お前からちゃんと話したほうがいいよ。」

一瞬大きく目を見開いてから空は頬杖を付いて言った。それは私に向かつてではなく、もう一人の自分に向けた言葉だった。

「うん。私もちゃんと話を聞きたい。この前は言い過ぎたって反省してるの。ちゃんと謝りたいし、もう腕の印のことは聞かないから、出てきてくれないかな？」

会いたい。何でもいいから、今私は無性にあなたに会いたい。お願いだから、その綺麗な瞳を見せて……。

「もういいじゃん。何、強がってんの？」

空は呆れたように右手に話しかけた。

「海。私、あなたに会いたいの。あなたと話がしたいの。」

祈るように言ったそのとき、いままでそこに広がっていた青空は、底の見えない深い海に変わった。

「お前は必要以上に俺に関わるべきじゃない。」

それは私と初めて会ったときに彼が言った台詞そのままだった。

有無を言わせぬ低い声で静かにはっきりと彼は言った。その言葉は私の体を突き抜け、後ろの壁に当たって跳ね返る。そしてもう一度私に止めを刺してから今度は彼自身に突き刺さった。

私にはそれがわかった。それを口にした本人の目があのときとは全く違ったからだ。

一言で言えば、悲しい目。底が見えないくらい、深い悲しみを抱いた目だった。

ああ、そうか。綺麗だと思っていた彼の瞳のなかの海は、彼の心の中に広がった悲しみの潮だったのだ。

掻き分けても掻き分けても、前に進まない。海は深く、視界の先に一体何が潜んでいるのかわからなかった。混沌。まさにカオスだった。

「どうして？」

答えは得られない。頭ではわかっているのに、私の口は頑固だった。

「……。」

何か言おうとして一端は口を開けたものの、すぐにあきらめたように彼はゆっくりとそれを閉じた。そのまましばらく目を伏せて黙っているの、私は彼の瞳がこちらに向けられるのをじっと待った。

「――できれば、俺のことは忘れてほしい。」

不意に現れた瞳は、少し潤んでいたと思う。そんなふうに見えた。

「忘れるなんて、できるわけないよ。」

毅然として、私は言った。ゆっくりと、一つ一つの口をはっきりと判別できるように。きっと伝わったのだろう。彼は上を向き、込み上げてきたものを押し戻すように飲み込んだ。

「もう二度とお前には関わらないと、決めたはずだった。あの夜、夜影に襲われていたお前を助けたのは偶然だった。まさかしくだとは思わなかったんだ。」

「……。」

「悪いが、もうお前の前に現れるつもりはない。」

「待って。あのときのことは謝るから、本当にごめんなさい。」

「そんなのはもう、どうだっていい。俺は怒ってもないし、お前が謝る必要は無い。」

「じゃあ、もう私の前には出てこないっていうのは……。」

「俺の問題だ。しずくは何も悪くない。」

「……いや。私、もっと海と一緒にいたい。話したい。」

「お前が何と言おうと、もう決めたことだ。」

「――でも、ありがとな。」

そう言って彼は私の頭をぐしゃぐしゃと撫でた。優しくて寂しそうな微笑みは初めてみる顔だった。

「海。私……。」

「さよなら。」

まるで今生の別れでも言うような口調だった。

「海！」

私の声は届かなかった。ああ、今度こそ、もう会えない。そんな気がした。

閉じられた瞼からこぼれ落ちる滴。相変わらず睫毛が長かった。

会いたい、会えない

空がいた部屋は彼の荷物がなくなり、すっかり元通りの殺風景となった。

家を出て行ったとはいえ、空とは学校で毎日会うし、途中まで一緒に帰ることもあるけれど、はつきり言う寂しい。空が来る前の状態に戻っただけなのに、その穴がものすごく大きく感じられた。

クリスマスに帰ってきたお父さんは年が明けたらすぐに仕事が始まるため、早々に飛行機でドイツに戻ってしまった。今回のお土産はお決まりのソーセージと、かおるにはドイツの有名サッカーチームのユニフォーム、私にはワンピースを買ってくれた。かおるは昔から好きだった日本人選手の名前と背番号が入ったユニフォームに感激していたけれど、私は嬉しいはずなのにうまく笑えなかった。

あれから海には一度も会っていない。

でも、空にとってはそのほうが良かったのかもしれない。なんとなく、もう会えないということを受け入れつつある自分もいた。

それでも、油断するとやっぱり駄目だ。ふとしたときに思い出して悲しくなる。そして無意識に空の瞳を確認してしまう。そこに海はないとわかってるのに……。

そのときもそうだった。放課後図書室に寄って本を借りた後、帰ろうと下駄箱に着いたとき、突然頭の中に海が現れた。

「遅い。」

腕組みをして仁王立ちした彼が仏頂面で言った。いつかの朝に春菜と話していた私を待っていたときと全く同じように。途端に視界がぼやける。

しばらく幻影に縛られたように動けずにいると、休憩時間に入っ
たのか、野球部の面々が昇降口までやって来た。下駄箱の奥に自販
機があるから、飲み物を買うつもりなのだろう。何人かが楽しそう
に話しながらこちらに近づいてくるのが分かった。その中には体育
祭で団長を務めた臼井くんの声もあった。

このままだと泣いている姿を見られてしまう。体育祭で仲良くな
った臼井君とはこの前の席替えて隣の席になったのもあり、以前よ
りもましてよく話をするようになった。野球部ではキャプテンをし
ていて常に仲間の一人ひとりのことを気にかけている彼のことだか
ら、私が泣いているところなんて見たら絶対に何事かと尋ねてくる
だろう。それはまずい。

脱いだ上履きを慌ててもう一度履きなおして私は廊下のほうへと
走った。先ほど借りた本が重くて息が上がる。なんとか鉢合わせは
逃れることができたので少し安心した。後姿だけなら見られても問
題ない。たいていの人間は何とも思わないか、何か忘れ物でもした
のだろうと思う程度だから。

階段の一番上までたどり着いて足を止めた。何も考えずに屋上に
行こうとしていたのだが、さすがに鍵が閉まっただけでは出られ
なかった。仕方なくその場に腰を下ろす。

後ろのドアの隙間から冷たい風が吹き込んできて、少し肌寒い。
でも、今の私には丁度いい温度だった。鞆と本が入ったトートバッ
グを脇に置いて呼吸を整える。

落ちて着いてきたところでまた目頭が熱くなった。ひざを立てて顔
を埋めた。スカートが落ちた滴で徐々に濡れていく。湿った布が足
にへばり付いて気持ち悪かったけれど、私はそれを止めることがで
きなかった。

会いたい。会いたいよ。

無理だよ。忘れるなんてできないよ。

海。どこにいたってあなたは私のすぐそばにいるんだよ。

その瞳も、声も全部覚えてる。

忘れるなんて、できっこない。

ねえ、お願いだから、もう一度だけ呼んで。

しずくって呼んで。お願い、海。

「しずく。」

声がして顔を上げると目の前に本があった。それは先ほど私が図書室で借りた本だった。

変わらない気持ち

「――さっき君が図書室で借りてた本、階段に落ちてた。」

驚いて見上げると、その先に肩を上下させた辰巳くんが立っていた。視界がぼやけているので顔はよく見えないけれど、声と話方でなんとなくわかった。眼鏡はしていない。

どうしてこの場所にいるとわかったのだろうか？と考えていると私の顔を見た彼が困ったような顔をしているのに気づいて慌てて顔を拭いて本に手を伸ばした。

「ありがとう。」

そう言ったつもりだったけれど、うまく声にならなかった。辰巳くんの眉間に皺が寄る。聞き取れなかったらしい。

そしてそれが私の涙腺を崩壊させてしまう。流れ出る大粒の雨に頬が濡れる。

私は馬鹿だ。本当に馬鹿だ。

今一瞬、あの人だったらきつとわかっただろうなと思ってしまった。

口の動きだけで私の声を聞いて、笑ってくれたんだろうなって……。

「大事な本を汚すなんて、君らしくない。ほら、ちゃんと拭いてやらないと。あと、こっちもね。」

いつの間にか辰巳くんの顔が目の前にあった。白いハンカチで本を拭き、その裏側で私の頬を軽く押さえるように拭いてくれた。とまらなくなった涙でハンカチがびしょびしょになってしまったけれど、彼は何も言わず拭き続けてくれた。

情けないし、恥ずかしかったけれど、でも嬉しかった。辰巳くん

は何も聞こうとせず、ただそこにいてくれた。それがごく自然で、まるで空気みたいに私の周りの背景と溶け込んでいた。

だからかもしれない。気づいたらぼつぼつと口から言葉が出ていた。

「大切な人が、いなくなっちゃったの。」

「――会いたくて、でも、もうきつと会えなくて……。」

「――自分のことは忘れてほしいって言われたけど、無理だよ。」

「――そんなこと、できないよ。どうしても忘れられないもん。」
視界が曇って辰巳くんの姿は見えない。でもまだそこにいるとわかる。心地よい空気がそこにあったから。

「――いつも自分勝手なんだから。」

「――ひどいよ。私だってさよならくらい言いたかったのに。」
頬に置かれたハンカチが、水滴を吸う。

「君はその人に恋をしていたんだね。」
ゆっくりと空気は言った。

その言葉で初めて気づいた。

自分の知らないところで海が葵ちゃんと会っていたと知ったときに感じた、なんともいえない気持ち。得体の知れない不安、苛立ちが何だったのか。

そして彼女を妖怪呼ばわりする横顔にほっとした自分。

あれは世に言うやきもち、つまり嫉妬だったのだ。

そうか、だから私は葵ちゃんが話しかけてくれるまで彼女を避けていたんだ。

美人で成績も優秀で誰からも愛されている人気者はまぶしすぎて、自分がいかにちっぽけな人間であるかを改めて認識させられるのが怖かったし、何より非の打ち所のない彼女に海を奪われてしまうのが怖かった。彼が空とは別人だと気づいてなくとも、葵ちゃんが海を好きになってしまったら、そして海も葵ちゃんを好きになってしまったら……と思うと怖くて仕方がなかった。

どうしてこんなに苦しいんだろう？

どうしてこんなに寂しいんだろう？

どうして、どうして、どうして……

どうして、こんなに好きになってしまったんだろう？

「好きだったよ。ううん、今も好きなんだと思う。もう会えないけど、やっぱり私はあの人が好き。どうしたって変わらない。大好きなの。」

「――絶対忘れないもん。……海のバカ。」

「うん。忘れなくていい。」

空気が辰巳くんという人間に戻った。それまでなんの感触もなかったものが、不意に現実味をおびてそこに現れた。私の頭をぽんぽんと優しく撫でるその手はとても温かった。

「――無理したら余計に辛くなるだけだ。だから泣きたいときは泣いてもいい。君の涙は僕が拭いてあげるから。」

まっすぐな瞳の色は青緑ではなかった。柔らかい黒だった。

ココロガ、イタイ

「バカじゃないの？」

つい大きな声を出してしまった。壁の向こう側まで聞こえているかは分からないが、隣の住人はいつも大音量で音楽を流しているので、たまには逆襲もいいだろう。

“お前に言われたくはない。”

「おれは仲直りしろって言ったんだよ。誰が別れの挨拶しろって言ったんだよ。」

“仲直りはした。邪魔者がいなくなったんだから、お前はもっと喜べ。”

相変わらず無機質な字を書く。もう少し感情を込めて書けないものかとも思う。

「はあ？赤い目で学校来るしずっと見て誰が喜ぶんだっつーの。大体、何で『もう二度と会わない』なんて言ったんだよ。」

“もう限界だと思ったから。”

「何が？」

“理性”

その二文字に思わず噴き出してしまった。理性の限界って、なんか生々しいな……。

「待て待て、じゃあ、お前……それで家出ようって言い出したわ

け？」

“○”

コンパスでも使って書いたのかと思うような、やけに綺麗な円だった。今回は山の手線ではなく、YESという意味の丸だろう。

「うわ、だから言いたがらなかったのか……。でも、それなら家出たことで解決したんじゃないの？もう二度と会わないってそこまでする必要あんの？」

また意味のない線を描き始めた。今度は四角だ。しかもこれまた綺麗な正方形。

何度もなぞった線が沈黙の時間をあらわしていた。

“壊したくないんだ。彼女自身も、その未来も。”

やっと無限のループから抜け出して書き始めた文字は、なんだか少し震えていた。

“約束したんだ。いつかはこの左腕の印のことを話すと。”

“でも俺の正体を知ったら、きっとまた苦しませる。そして彼女は耐え切れなくなってしまう。だから、もう会いたくない。このまま一緒にいたら、いつかは話さなくてはなくなる。俺なんかのために彼女の人生を潰したくないんだ。”

消え入りそうなほど薄く頼りない文字は、今の彼の心をそのまま映し出しているようだった。

「……潰れそうなのはどっちだよ。一人で全部抱え込むなって。」

“お前には借りがある。だからこんな重いものを背負わせるわけ

にはいけないんだ。”

「借り」って何だよ。おれはそんなもの貸した覚えは無い……。

「どうしても言いたくないなら聞かないことにするけど、その代わり弱音くらいは吐いてよ。じゃないと悪いこと全部お前に押し付けてるみたいで嫌だからさ。」

“ 良かった。”

海についてはまだわからないことだらけだ。だけど、気づいたこともある。それは、あいつはおれ以上にしずくを大切に思っているということ。

だけど、こいつは大事なことに気づいていない。いや、もしかしたら気づいているのかもしれない。でも、しずくが海に抱いている気持ちはこいつが思っている以上に強いはずだ。

正直、どうすればいいのかわからない。おれでは海の代わりにはなれないだろうし。でもこれ以上しずくが悲しむ姿も見たくない。一体どうすればいいんだ……。

あの日、彼女は言った。

「もう良い。」

「もう良いの。」

「もう、良いんだよ。」

何度も、何度も繰り返し返した。

「もう、いらないんだよ。」

「私には、もう空は必要ないの。」

「だから、さようなら。」

「全部忘れて幸せに、なってね。」

「いつかどこかでまた会おう」

そして彼女は自らのわき腹を刺した。

俺のせいだ。全部俺のせいだ。

しずくを守ること、最初はそれが自分の義務だった。そして同時に生きる理由だった。でも、その笑顔を見るたびに自分の中で何かが変わっていった。命令とか、使命とか、そんなのは関係なくなっていた。

ただ、笑っていてほしかった。それだけだった。それだけだったのに……。

それが彼女を追い詰めてしまった。

きつと、自分の存在が俺の自由を奪っていると思ったんだろう。だから、全部リセットしようとした。

俺の記憶を消して、自分自身も消えようとした。

もう二度と同じ過ちは繰り返さない。

そう決めた。だから、今度は俺が彼女の前から消えようと思った。彼女が思い出してしまいう前に消えようと。

俺がいないほうが彼女は幸せになれる。

だって、もう彼女には涙を拭いてくれる人がいるのだから。

苦しいとき、そばにいてくれる人がいるのだから。

俺なんかよりも優しく、頭を撫でてくれる人がいるのだから。

だから、もういい。もういいじゃないか。
それで、いいじゃないか。

そうやって全て納得したはずなのに、あの光景を思い出すと心臓
から血が流れそうになる。

痛い、痛い、痛い。

感じないはずの痛みが襲う。

この脳は痛みの信号を無視するようにできているのに、どうして
こんなに痛いのだろうか？

どうして、どうしてこんなに苦しいのだろうか？

イタイ、ココロガ、イタイ。

黒い影

それはある二月の夜のこと。一月にあった実力試験の結果に驚愕し、春菜と一緒に図書館で勉強し、たまたま借りていた本を返しに来た辰巳くんは英語の長文問題の解説をもらった帰りだった。それまでは解らない問題は全て海に聞いていたので、今更ながら自分がどれだけ彼に依存していたのかを実感しつつも早く家に帰ろうとしていた矢先だった。

初めてナンパというものを経験した。いや、あれはナンパじゃなくて、ただ酔っ払いに絡まれただけなのかもしれないけれど……。とにかく近道をしようといつもと違う道を選んだのが敗因だった。居酒屋から出てきた二十代後半といった感じの男性三人に声をかけられた。女子高生、女子高生、と赤い顔をした大人たちが鼻を膨らませる姿は少し間抜けで、それでいて不気味だった。

「君、どこの高校？」

「お兄さんたちと遊ばない？」

「可愛いね。俺らの中で誰が一番好み？」

そんな一度に質問されても困る。しかも妙に顔が近い。そしてお酒の匂いがぶんぶんする。

しばらく黙ってしかめっ面で男たちを見上げていると、急に一人が腕を掴んできた。

「あの、離してください」

「いいじゃん。ちよっとくらい。俺、二の腕フェチなんだ」

まさにそのときである。私の腕を掴んでいた手がいきなり引き剥がされたかと思ったら、次の瞬間耳を塞ぎたくなるようなボキッと

いう鈍い音がした。同時に男がぎゃつと声をあげる。そして腕を抱えて地面に蹲る。

「何だよ、お前」

その声が向けられた方向をみると、そこに黒い物体があった。暗闇に溶け込むような真っ黒のシルエット。顔はほとんど見えなかった。

二人がかりで黒い影に飛び掛る。一人は蹴りをまともに腹に食らってダウン。もう一人はみぞおちに一発で終了。

すごい、と感心していると手首を掴まれ、そのまま引っ張られる。さっさと逃げるぞ、という意味だろうか？

それに応じて足を踏み出す。そして一緒に走った。

黒い影は一言も声を発さずに走り続けた。

どこまで行くのだろうか？その背中を見ながら考えた。

家の近くの公園の前で足を止める。しかし何も言わない。振り向きもしない。

何かがおかしい。でも、助けてもらったお礼は言わなくては。

「あの、ありがとうございました。」

そのとき、私は気づいてしまった。

見覚えのあるマント。無駄の無い動きと足の速さ。お礼を言ったにも関わらず何の反応も示さないこと。そしてそれが無視ではなく、単に気づいていないだけだということ。

次の瞬間私は自分でも驚くような行動に出ていた。

その背中に抱きついたのだ。顔を見なくても、声を聞かなくても、わかった。

海だ。この人は確かに海だ。そう思った途端、眼の奥に溜まっていた水が溢れ出した。

背中が湿っていくのに気づいたのか彼の体が微かに動いた。

あれ？おかしいな。私、同じことを前にもしたことがあるような気がする……。

それは忘れ去られた記憶のフィルムが回りだした瞬間だった。

あの日の記憶

どうして？ 私はどうしてそんなに必死に彼の背中に抱きついてるの？

ああ、そうか。彼を止めようとしていたんだ。

斑に赤く染まった髪から血の匂いがした。

「もう良いよ。もう良いから、お願いだから、やめて。」

金切り声で叫んだ。でも、その声は彼には届かなかった。

いとも簡単にその体は私の両手からすりりと抜けていった。

立ち上がろうとする相手を容赦なく殴る。その口から赤い液体が流れる。私は両手で顔を覆った。嫌だ。見たくない。もう、人が傷つくところは見たくない。

その横顔はぞっとするほど白いのに、瞳は真っ赤に染まっていた。そしてその瞳からは大粒の涙が流れていた。

本当は誰も傷つけないんでしょ？

でも、私のためにそうやって戦って、あなたは傷ついている。

私がいるから、そうしなければならぬ。あなたはそうやってずっと私に縛られて生きていかなければならぬのでしょうか？

そんなの可哀相だ。こんな弱虫で一人じゃ何もできないような駄目な子のために、あなたは傷つかなくていい。今まで自由を奪ってしまっごめんさい。

もう、開放してあげるから。だから、泣かないで。

お母さんは言った。あの子の瞳が血の色になったら、もう誰にも止められない。だからそのときはこの言葉を言いなさいと。

「いつかどこかでまた会おう。」

それは緊急停止の合言葉だった。

見る見る彼の体が硬直し、動かなくなる。

突然シャツダウンされた脳から私の記憶が消えることを願いながら、私は襲ってきた相手が持っていたナイフで自分のわき腹を刺した。

これでいいんだよね。これでもう、あなたは自由になれるんだよね。

いつも守ってくれてありがとう。

さようなら。1052。

腕を解くと彼はゆっくりと振り返った。彼の瞳に語りかける。

「ねえ、どうして？ どうして、またあなたは私を守ってくれるの？」

「――それが、あなたの役目だから？」

最初に聞いたとき、彼が答えた言葉。

そのときはそれが何を意味するのか私は解っていなかった。でも、今ならわかる。

「違う。」

消え入りそうな声で彼は言った。

「違わない。あなたは私が生きている限り、ずっと私を守らなくちゃいけない。それがあなたに与えられた使命だから。そうでしょう？」

お母さんは言った。この子はどんなときも私の味方で、何があっても私を守ってくれる、と。

最初は嬉しかった。いつもそばにいてくれて、私をあらゆる危険から守ってくれるから。同級生にいじめられても、彼はすぐに駆けつけて助けてくれるから。

そう、私は勘違いをしていたのだ。彼は絶対に私を裏切らない永遠の友達なのだ。

でも、あるとき気づいた。それは私が作り出した単なる幻想に過ぎなかったのだと。

ある休日のことだ。アイスクリーム屋で私がチョコミントを選び、彼も同じものを選んだ。いつもそうだった。私が何かを食べるときは、必ず同じものを彼は食べた。

ずっとそのことを疑問に思っていたので、どうしてかと尋ねると彼は涼しい顔で即答した。それは万が一、私がアイスを落としてしまったとき、自分のをあげるためなのだ。

私は彼を友達だと思っていたけれど、彼にとって私は守るべき主人で、自分はその下僕でしかなかったのだ。

お母さんは私のために思って彼にその使命を与えた。でも、そのせいで彼はずっと私に縛り付けられていたのだ。

消えてほしくない

「違う！使命とか、命令とか、そんなのは関係ない。」

彼は私を思っただけで否定しているのだと思った。また私が馬鹿な真似をしないように……。

だけど、それも違った。私は彼のことを全く解っていなかったのだ。

「じゃあ、どうして？どうして、いつも私を助けてくれるの？」
じっとその瞳を見つめて尋ねると、まるで潮が満ちていくかのよう
に青緑の綺麗な海がみるみるこちらに迫ってきた。収まりきらな
くなった水がその目から零れ落ちる。

「す、……だ……ら。」

嗚咽とともに吐き出された言葉。声にならなかった音が何なのか
俄かにはわからなかった。しかし、二、三回聞くうちに彼が一体何
を言わんとしているのか大方理解できた。

「……き、……から。」

声が出ないのが悔しいのか、私の前で泣いている自分が情けない
と思ったのか、彼はむきになった子どもみたいに何度も何度も繰り返
した。それがなんだか幼く見えて、もしかしたらこの人の時間は
あのときからずっと止まっていたんじゃないかとさえ思った。

「す、き……だ、から。」

やっとすべての音を聞き取ることができた。震える声で一生懸命
伝えようとする姿がたまらなく愛しくて、私は我慢しきれずその唇
を塞いだ。

虚を衝かれたように彼は呆然と立ち尽くす。

ほんの三秒ほどの時間が永遠にも思えるほど長く感じられた。
温かくて柔らかい、そしてどこか儚い唇だった。

「わかったから、もういいよ」

私は彼の首の後ろに回した手を解いて、とめどなく流れ落ちる滴
が作った道を指先でそつとなぞった。それは溶けそうなくらい熱か
った。

「恐く、ない……の、か？俺の、こ……と。」

「全然恐くない。だって、あなたは誰よりも優しい人だもの。」
ゆっくり、且つはつきりと私は言った。

「俺は、しずくの……ため、なら……何だって、できる。」

「――また……誰か、はん、殺しにする……かも、し、れない。」
俯いて手の甲で顔を拭うその肩は弱弱しく、触れたら一瞬で砕け
散ってしまいそうだった。

「あれは、仕方なかったんだよ。自分でも止められなかったんで
しょう？」

諭すように言うとも何も言わずに彼は頷いた。

「――私は、いつもあなたが私を守ってくれるのは、それが与え
られた使命だったからだと思ってた。でも、違った。あなたは、ち
ゃんと自分の意思で私のことを守ろうとしてくれてたんだよね。」

「――言ってくれるまで気づかなかったけど、すごく嬉しかった
よ。」

「この気持ちは、お前に、は、重……すぎる。俺は、お前を……
潰し、たく、ない。しずくには、消えて……ほし、くない。」

「重すぎることなんてないよ。だって……。」

ハンカチで彼の湿った目元を拭き、私は壊れ物を扱うように紅葉した彼の顔を両手で優しく包み込んだ。

「――私だって海のこと、好きだから。あなたのために死のうとさえしたくらい、私はあなたのことが好きなの。でも、もう、あんなことはしないよ。」

「もう、絶対……消えない？ ずっと、ずっと、そばに……いて、くれる、の、か？」

「うん。ずっとそばにいる。どこへも行かないよ」

この人は本当に子どもみたいな人だ。笑顔という名の水素爆弾を無自覚に私に投下する。そしてその穢れのない綺麗な心の粒をこれでもかと私の体内に撒き散らすのだ。

強いけど脆い。冷たいようで温かい。憎らしくも愛おしい、私の救世主。

思いきり抱きしめて彼の頭に短い信号を送った。

初めて使ったテレパシーは彼の心に届いただろうか？

「今の、何て言ったかわかった？」

顔を上げて尋ねると、真っ赤なピアスと同じ色に染まった耳を掻きながら彼はぼそりと呟いた。

「それ、言わなきゃ駄目なのか？」

「言ってくれなきゃ、ちゃんと伝わったか分かんないでしょ？」

そう言っ て私は少し意地悪に微笑 んでみた。
彼はしばらく何かぶつぶつ不平を言っ てから、観念したように溜
息を漏らして言っ た。

「大好きだよ」

視線

「かおる！なんか、キレイな先輩が呼んでるぞ。」

その声に振り向くと、山田が購買で買ったパンを片手に、教室の後ろ側のドアを指差した。そこにいた人物に驚いて僕は慌ててそちらに駆け寄る。

「どうしたの？姉ちゃん。」

「どうしたのじゃないでしょ。ほら、お弁当。テーブルの上に置き忘れてたよ。」

そう言って姉は弁当箱を差し出した。自分では気づかなかったけど、どうやら今朝家を出るとき鞆に入れ忘れたらしい。まじまじとその姿を見て、僕は思った。確かに最近少し綺麗になった気がする。まあ、理由は明らかだけど……。

「ごめん。ありがとう。」

そう言って弁当箱を受け取ると、姉は教室の中を覗きながら言った。

「さっき、かおるを呼んでくれたのって雅哉くん？」

「ああ、うん。」

「本当にそっくりだね。お兄さんに。」

山田のお兄さんは姉と同じ学年で、去年同じクラスだったらしい。

「山田の兄ちゃんって、バスケ超上手って有名だね。あいつもバスケ部入ったらしいよ。」

「そうなんだ。あつ、そろそろ戻らなきゃ。じゃあね。」
教室の時計を見て姉はいそいそと帰っていった。

三月上旬、僕の合格を知った姉は死ぬほど驚いて、それから死ぬほど喜んでくれた。姉には内緒だが、実は姉と海さんがケンカをしてからも学校帰りに図書館で彼に勉強を見てもらっていたのだ。どうしてかと聞いたら、前に僕と約束したからだと言っていた。かなり前にそういう約束をしたのは覚えていたが、まさかそんな約束をずっと覚えていたとは思わなかった。顔に似合わず律儀な人だ。まあ、そのおかげでこの春、僕は晴れて楓高校に入学することができたわけだが……。

「さっきの誰？ もしや彼女？」

席に戻ってきた僕に山田がにやにやしながら尋ねる。

「違うよ。あれ、うちの姉ちゃん。」

弁当箱を開けながら僕はぶっきら棒に言った。

「マジで！？ かおるの姉ちゃん、美人だな。」

山田が大げさに反応するので、クラスの視線がこちらに集まる。

「うーん。まあ、そうなのかもね。」

あんまり騒がれたくなかったので、僕は適当に答えた。

「俺はすぐ分かったよ。かおる、お姉さんとそっくりだから。」
山田の隣で焼きそばパンを手にした加藤がぼそそと小声で言った。こいつは座席が出席番号順で並んでいた頃、僕の隣の席だったやつだ。もの静かなやつだが、案外気が合ってよく一緒に居る。

「そんなに似てる？」

「似てる。かおるは女顔だから並ぶと姉妹に見える。」

まあ、基本的には良い奴なのだが、正直すぎるのが難点だ。隣の山田がゲラゲラ笑うので僕は箸箱でその何も入ってなさそうな頭を叩いた。

「何でオレを叩く!？」

納得いかないという顔で山田が抗議する。

「ちょうどそこに頭があったから。」

僕はできるだけ感情を込めずに言い放った。手本はもちろんあの
人だ。

「かおるちゃん、ひでえ。」

「かおるちゃん、暴力はよくないよ。」

山田はいつものことだが、加藤にまで“かおるちゃん”呼ばわりされるとは思わなかった。最近こいつら、僕をいじるときの乗りが似てきた気がする。

「竹刀どこだっけ？」

そう言っ僕は辺りを見回した。

「すいませんでした。」

「調子乗りすぎました。」

「わかればよろしい。」

二人が同時に頭を下げ、僕が偉そうに許してやると、一部始終を見ていた生徒たちが一斉に笑った。

「そういえばさ、加藤は何部入ったの？」

笑いが収まってから、山田があんパンをほお張りながら加藤に尋ねた。

「園芸部」

最初、僕は聞き間違いかと思った。というのも、入学してそろそろ一ヶ月経つのに、園芸部なんて一度も聞いたことが無かったからだ。新入生歓迎会も出て無かったし、勧誘すらしていなかったから、僕は存在すら知らなかった。それは山田も同じだったのだろう。彼は目を丸くして加藤に聞き返した。

「園芸部！？この学校、園芸部なんかあったっけ？」

「あるよ。あるから入部したんだよ。」

なぜそんなに驚くのか分からない、といった顔で加藤が言う。

「部員何人？」

山田と顔を見合わせて、今度は僕が尋ねた。

「俺入れて二人だけど。」

「それ、部じゃなくて、同好会じゃね？」

「ちゃんとした部だって、先輩言ってた。」

そう言って加藤は焼きそばパンを緑茶で流し込む。

「誰？その先輩って。」

「三年の白川優一先輩。」

「あっ！オレ、その人知ってる。試験で毎回トップの人だって姉ちゃんが言ってた。」

驚いて僕は思わず大きな声をあげてしまった。

「オレも知ってる！兄ちゃんの友達で、私服が黒ずくめの人！」
山田もそれに呼応するように大声でしゃべる。しかし、その情報は初めて聞くものだった。

「なんだ、二人とも知ってるんだ。普通に良い先輩だよ。ちょっと謎が多いけど。」

そう言って加藤は口の端を微かに引き上げて笑った。わざとそんなふうに笑っているのか、それとも、元々そういう笑い方しかできないのかはよく分からないが、こいつの笑い方は妙に大人びている。

「謎の多い部活だな。うーん、これが本当のミステリーサークルってやつ？」

山田にしては、なかなか上手いことを言う。その言葉に余計に好奇心をそそられた僕は、帰ったら姉に白川先輩について、もう少し詳しく聞いてみようと思った。

そのとき不意に誰かに見られているような感じがした。辺りを見回した限り、誰もこちらを見ている気配は無いし、近くに幽霊の姿も無かったので気のせいだと思った。見える人には自然にそういう類のものが寄ってくるらしいが、今回ののはいつもと違う感覚だった。僕はそれに少し違和感を覚えたが、気にするほどでもないと思い、姉にも言わなかった。

視線（後書き）

こんにちは！ 柊ななこです。（・∀・）ノ

今回第二章に入りましたが、これからは更新は週一か週二、最悪月一のペースになります。

第一章はサイトで書き溜めた分を予約投稿したので、執筆の進度に関係なく更新することができましたが、今後は私の筆の速さに合わせて更新されていくことになるので、諸事情により更新が遅れることもございます。

こちらとしても、できるだけ一定のペースで連載を続けていきたいと思うのですが、自分は比較的筆が遅いほうなので、極端に言ってしまうと一ヶ月丸々更新が滞る場合も考えられます。

その場合は本当に申し訳ないんですが……。 (;ω;)

というわけで、その点をご了承の上、更新は気長にお待ちいただけると嬉しいですよ。

ただ、どうしても待ちきれないという方は「続きが気になる！」「早く更新しろ、こらー！」というお声をかけていただけると、私のモチベーションも上がり、創作活動の励みになりますので、更新催促はばんばんして下さいさって結構です。

というか、して下さいー！！

ご感想、ご質問もお待ちしておりますので、お気軽にコンタクトをとってくださると作者は大喜びします。

嬉しくてネタバレしてしまうかもしれませんが（＃＾ω＾＃）↑

それでは、今後よろしくお願いしますm (_ _) m

そんな顔しないで

「あんな若い先生、いたっけ？」

昇降口を出ようとしたところ、ちょうど入れ違いにジャージ姿の男性が校舎へと入って行った。その顔に見覚えがなかったので、先に行こうとする彼のセーターを掴んで私は尋ねた。

「教育実習生だ。体育の授業のときに紹介されてただろ。」
彼は後ろを振り返りながら、さらりと言う。

「うーん、言われてみれば、そんな気もする。」

「水橋冬人。確かそんな感じの名前だったはず。」

いつもながら彼の記憶力には驚かされてしまう。口頭で一度簡単に自己紹介をただけでも、そのとき聞いたことは全て漏らさず記憶しているのだ。

「水橋？もしかして、なっちゃんのお兄さんかな？」

なっちゃんとは去年同じクラスだった子で、体育祭の準備と一緒にやって仲良くなった。最初は水橋さんと呼んでいたのだけど、本人の希望でそう呼ぶようになったのだ。運良く今年も同じクラスになったので、今は春菜と一緒に三人で行動を共にすることが多い。

「冬人と夏子か。名前の付け方からすると、兄妹だとしてもおかしくはないな。」

「やっぱり兄妹なのかな？今度聞いてみるね。」

校門を出て道を曲がるのと同時に彼の右手がそっと私の手を包む。本人は当たり前のような顔をしているけれど、私はまだそんなふう

にはできない。熱る顔を誤魔化すためにわざとらしく話題を変えた。

「――あっそうだ、明日委員会だね。空、忘れてないといいんだけど。」

何を隠そう、私たちは三年生になってからクラスが離れてしまったのだ。離れたといっても隣のクラスなのだが、毎日顔を見ていた頃と比べるとその機会が減ったのは少し口惜しい。でも、偶然空が委員長に推薦されたことで、毎週開かれる委員会で会うことができるようになった……はずなのだが、毎回、遅れて来たと思ったらその瞳の色が青緑なのだ。

「あの確信犯、どうしようもないな。」

「えっ、何？確信犯って。」

「なんでもない。とにかく、もしあいつが行かなかったら、また俺が行く。」

確信犯。頭の中でその言葉を反芻していると、何となくその意味がわかってきた。要するに委員会をサボるためにわざと忘れた振りをしている、ということなのだろう。まあ、そのおかげで海と話す機会が増えたので、私としては結果オーライだ。

「うん、わかった。」

「……最近、疲れてるだろ。」

突然黙ったかと思きや、彼は無表情のまま私の顔を覗き込んで言った。隠しているつもりだったのに、まんまと凶星をつかれて私は動揺してしまう。

「そう見えるかな？」

「勉強しすぎだ。除影師の仕事もあるんだから、あまり無理するな。身がもたないぞ。」

「うん。わかってるよ。でも」

勉強でも、夜影退治の腕でも、あなたは私の手ではまるで届かない場所にいます。だから、少しでも早く追いつきたくて私はジタバタしているのだ。

「――私、少しでも海に近づきたいの。だって、まだ遠すぎるんだもん。」

すると彼は繋いだ手をぐいと引いて真っ直ぐ私の目を見て言った。

「こんなに近くにいても……まだ遠いのか？」

「うん。」

私はその一言を言うので精一杯だった。

「俺はどうしたらいい？」

瞳の中の海はとても穏やかで、悲しくなるほど綺麗だった。

「何もしなくていいよ。私、自分の力であなたのいる場所まで登りたいの。」

目の前の海を見ながら私は思った。

この広い海に飛び込んでしまえたら、きっと私は楽になるだろう。でも、それは心地よいからではなく、ちっぽけな私は一瞬でその深い海に飲み込まれてしまうからだ。この海は今の私には広すぎるし、綺麗すぎる。濁っていく水に、自分の汚さを思い知らされるのが怖くもあるし、何よりこの澄んだ海を汚すなんて私にはできない。

だから、飛び込んでも足が底につくくらい大きくなって、澄んだ

水にも溶け込めるくらいヘドロを浄化できるまで、そこで待っていてほしい。必ずそこまで行き着いてみせるから……。

「……わかった。しかし、無理は駄目だぞ。」

「うん。心配してくれてありがとう。」

そう言いながら、私はその温かい手を握り直した。

「ああ。……どうかしたのか？」

自分では自覚がなかったけれど、思ったより強く握っていたらしい。その手に視線を落として尋ねる彼はまだ少し心配そうな目をしていた。

「海の手って大きいね。」

何をいえばいいのかわからなかったので、とりあえず関係ないことを口にする。

「空と変わらないだろ。」

彼は少し息を漏らしながら笑った。私は彼が時折見せる、この楽しそうな顔が一番好きだ。

「わかんない。空とはこんなふうに手を繋いだりしないし。」

「……。そうか。」

ひと呼吸おいて、発せられた声はすぐに空気に溶けてしまった。怖くなってその横顔を覗くと、それは恐ろしいほど白く、まるで生氣を失ってしまったかのように固まっていた。

お願いだから、そんな顔しないで……。日頃、頭の隅に仕舞い込んで考えないことにしていたことが、栓を抜かれたように次から次

へと飛び出し、私の目の裏に張り付いてきた。

やめて、こないで。堪らず私は眼球をぐるぐると回し逃げようとしたが、答えのない問いは際限なく続いていく。

唯一無二の答えがない問いなんて、どうやって式を立てたらいいかわからない。

でも、それでも私はその手を離さなかった。離せなかった。今離したら、きっともうこの人の心は帰ってこない。そう思ったから。

「どこへも行かないよね？海はずっと私のそばに居てくれるよね？」

「いきなりどうした？そんなの当たり前だろ。」

視線を戻すとそこにいたのはいつもの彼だった。さっき私の目に写った蠟人形は幻だったのだろうか？

「本当に？」

「ああ。何があっても、俺は絶対に居なくなならない。だから、泣くな。」

そう言われて初めて自分が泣いていることに気づいた。慌てて手で拭う。

「ごめんね。いきなり泣かれても困るよね。」

自分でもどうかしてと思うくらい、私はぼろぼろ涙をこぼしていた。

「いや、俺の前で泣くのはいい。だが、俺の知らないところで泣くのは禁止だ。頼むから、それだけはやめてくれ。いいな？」

本当はちゃんと返事をしたかったのだけど、嗚咽が邪魔して声が

出なかったので私は大きく頷いてみせた。すると彼はその大きな手で無造作に私の頭を撫でてくれた。その心地よさに不思議と肩の力が抜けた。

「――もう、平気か？」

その声が堪らなく優しくて飛びつきたくなる。

「うん。大丈夫。ありがとう。」

恥ずかしい衝動を抑えて私は笑って答えた。鏡のように彼も笑っていた。

そんな顔しないで（後書き）

次回は9月15日です。

いつも明るくてサバサバした葵ちゃんの素顔がちらり・・・。

大丈夫だから

「体育の実習生の水橋さんって、もしかして、なっちゃんのお兄さん？」

昼休み、例のごとく春菜と三人でお弁当を食べながら私は彼女に尋ねた。今日は寝坊したので卵焼きの出来が悪い。かおるに悪いことをしたなと思いつつ私はそれを口に運んだ。

「委員長、何で分かったの!？」

メロンパンを齧っていたなっちゃんは、もともと大きな瞳をさらに大きく見開いて言った。

「苗字同じだし、名前も夏子と冬人だから、なんとなく、そうなのかなって。」

「しずくさん、名前よく覚えてますね。私、下の名前知りませんでした。」

いつものいちごオレを飲みながら春菜が言う。彼女は毎日学校の自販機で牛乳パックのいちごオレを買って飲んでいるのだ。そうしないとい日やっていけないのだと以前言っていたけれど、そのくらい好きだということだろう。

「えっ、あ、うん。初めて聞いたときから、もしかしてって思ってたの。」

二人には海の受け売りだとは言えなかった。

「まあ、正解なんだけどさ、皆にバレたら嫌だな。」

ミルクティーでメロンパンを流し込んでから、なっちゃんは少し声のトーンを下げて言った。

「なんですか？お兄さん、素敵な方だと思いますけど。」

「私もそう思う。」

先日見かけたときも思ったが、冬人さんの印象はスポーツのできる爽やかな好青年といった感じで、最近の体育の授業中は女子生徒の視線が彼に集中しているし、サッカーをやっていたらしく休み時間に男子生徒に混じってゲームを楽しんでいるのもよく見かける。要するに、男女隔てなく人気があるのだ。しかし、なっちゃんは自分の兄が褒められているというのに大して喜びもせず、それどころか何だか少しむくれているようだった。

「全然素敵じゃないよ。顔が良いだけで、駄目なところいっぱいあるよ。まず頑固だし、意地っ張りだし、めったに弱音吐かないし……それに何考えてるかわかんないことも多いし。」

彼女が兄の短所として挙げていることが、ほとんど自分にも当てはまりそうだったので私は若干ダメージを負いつつも、なっちゃんの顔をじつと観察してみた。兄の愚痴を言っている割には怒っているというより、そこはかとなく悲しそうな表情に見えたのは私だけだろうか……。そう思って春菜の方を見遣ると、彼女の視線は私たちを通り越して窓の外に向けられていた。

私も振り返って窓の外を見ると、噂の冬人さんが男子生徒と一緒にサッカーをしていた。そこには隣のクラスの空や山田くんに混じって、うちのクラスの白川君や白井君もいた。他にも去年同じクラスだった男子が何人か見受けられた。クラスは違えど、体育の授業は一緒にやっているの、なんだかんだ今でも仲が良くて、体育の授業の前後にこうして何人か集まってサッカーやバスケをしていることが多いのだ。

「なっちゃんはお兄さんのこと嫌いなのか？」

山田くんが空にパスを出す。が、横から出てきた冬人さんにボールを持っていかれてしまった。彼はそのまま相手何人かをあつという間にかわしてゴール目がけてシュートし、それに臼井くんが頭を合わせてボールを押し込む。相手のゴールキーパーが悔しそうに唇を噛んでいる様子を見ながら私はなっちゃんに尋ねた。

「嫌いじゃないけど、ちょっと恐い。すぐ怒るし……。」

歓声に気づいて、なっちゃんも外を見て言った。

「それは夏子さんのこと、大事にしてくれてる証拠ですよ。」

「えー、そうかなー？」

「そうだよ。きっと大事な妹のことだから、お兄さんも気になって色々口出ししちゃうんだと思うよ。私も弟に余計なこと言っちゃったかなって、後で反省することあるもん。」

私は春菜の言葉に乗っかるようにして、なっちゃんに言った。

「そうなの？委員長でもそういうことあるんだ。」

「うん。だから、そんなにお兄さんのこと悪く思わないであげてね。」

「わかった。でも、妹としてこれだけは言っとく。うちのお兄ちゃん、そんな言うほど良い男じゃない。だって犬恐怖症で、子犬すら触れないんだよ。」

なっちゃんが自信満々にそう言うのが可笑しくて春菜と私はこらえきれずに笑ってしまった。

「お兄さん、可愛いところもあるんですね。」

笑いながら春菜が言った。ちょうどそのタイミングだった。背後から私を呼ぶ声が聞こえたのだ。それに気づいて振り向くと、ドアの前に大量のプリントを両手に抱えた女子生徒が立っていた。短いスカートから伸びる長い脚の下を見ると、同じ学年の上履きを履いていた。

「しずくちゃん、ちょっと良い？」

一瞬それが誰だかわからなかったが、山積みになった紙の横から見覚えのある顔がひょっこり出てきてそう言ったので、私は慌てて空っぽになったお弁当箱を閉じ、目の前の二人に断りを入れてから、席を立った。

「どうしたの？ 葵ちゃん。」

「あのね、しずくちゃんに言っておきたいことがあるんだ。……でも、ここだとあれだから、放課後話せる？」

ここでは話せないことというのと、除影師としての話だろうか？ 最近、彼女と一緒に戦う機会も増えたので、時々こうして学校でも葵ちゃんと話すようになった。最初はすごく緊張したけれど、話してみると気さくで親しみやすいので、人見知りの私も徐々に打ち解けることができた。

「うん、大丈夫。」

「それでね、できれば彼氏も連れてきてほしいの。あいつにも関係することだから。」

その言葉に私は改めてその事実を意識して、なんだか急に頬が熱く感じた。彼女はこういうわけか私と海のことを知っているのだ。

「あつ、うん。じゃあ、一緒に連れてくるね。」

「ありがとう。そうしてくれると助かる。それにしてもあいつ、学校では何であんな愛想良いわけ？素は超無愛想で、可愛げの欠片もないくせに……あの気持ち悪いぐらいの爽やかさは営業用ってこと？」

窓の方を見ながら葵ちゃんが訝しげに眉をひそめて言った。彼女は未だに空と海が別人だとは気づいていないらしく、海のことは空の素の状態だと理解しているようだ。

「そつ、そんなことないよ。学校でも素のときはあるし。」

「それは彼女の前だからでしょ。」

「いや、あの……でも、葵ちゃんの前でも素だよね？」

「本性バレてるからじゃない？」

「う……。そ、そうだ。これ、生徒会室に持っていくの？手伝うよ。」

私は言い返せなくなって無理やり話題を変えた。よほど不自然だったのか、葵ちゃんは顔を背けて笑いを堪えていた。こうして彼女は事あるごとに私をからかうのだ。でも、それに悪意がないのは一目瞭然なので私は安心して彼女の隣にすることができる。

「いいよ、いいよ。私一人で大丈夫だから。用は済んだし、もう行くね。」

「うん。気をつけてね。」

私がそう言うと、葵ちゃんは体の向きを変えて廊下を歩き出した。しばらくその背中を見送っていると、前方から一人の生徒が走っ

てきて彼女にぶつかった。その衝撃でプリントが辺りに飛び散る。しかし、急いでいたのか彼は軽く頭を下げただけで、そのまま走って行ってしまった。ひどい人だな、と思いながら私は彼女のもとへ駆け寄り、一緒にプリントを拾った。当然、彼女も怒っているだろうと思ったが、その横顔を覗くと予想に反し彼女は困ったように苦笑いを浮かべていた。その痛々しさに私はどうしてあんなに単純に考えてしまったのだろうと後悔した。

本人が大丈夫だと言えば100%大丈夫だなんて、そんなことあるはずない。そうわかっていたはずなのに、私は葵ちゃんなら大丈夫だと思ってしまった。生徒会長になって以前よりも格段に忙しくなったはずなのに、彼女は疲れた素振りも見せず除影師の仕事もそつなくこなしているように見えた。だから、そのくらいのことは彼女にとっては何でもないのだと私は勝手にそう判断していたのだ。しかし、本当にそうなのだろうか？今、隣で寂しそうにプリントをかき集める彼女は本当に大丈夫なのだろうか？

「葵ちゃん、いつも一人でいろんな仕事こなしてるよね。そのほうが効率良いのも分かるけど、全部一人でやる必要ってないんじゃないかな？」

私はプリントの半分を抱えて立ち上がった。

「駄目だよ。誰かの力なんて借りたら、それはあたしの成果じゃなくなっちゃうじゃない。だから今までだってずっと一人で何だって完璧にやってきたんだよ。」

葵ちゃんは床で残りのプリントの端を揃えてからゆっくりと静かに立ち上がって言った。穏やかに微笑みながら。

「でも、全部一人でやらなきゃいけない理由なんて、どこにもないと思う。」

「あるよ。」

口調こそ穏やかではあったが、その瞳はぶれることなくしつかりとこちらを見つめていた。

「どうして？」

「あたしの力を認めてもらうためには、全部一人でやらなきゃ意味が無い。完璧なあたしじゃなきゃ駄目なの。そう、完璧じゃないと……。」

その後何が続くのかは分からなかった。でも、今の彼女に私が言えることは、一つだけだった。

「完璧じゃなくていいよ。完璧じゃなくても誰も葵ちゃんを責めたりしないよ。」

「完璧じゃないあたしなんて、この世界に必要なの？」

珍しく葵ちゃんは真顔で言った。それが彼女の本音だということに気づいた私は、それまで彼女が誰にも見せなかった弱い部分を垣間見た気がした。

「必要だよ。だって、完璧じゃなくなったら、葵ちゃんは葵ちゃんだもん。私は、葵ちゃんの友達でいたい。そのためには葵ちゃんが必要でしょ？」

「……そっか、ごめんね。変なこと聞いちゃって。良かったら、このまま生徒会室まで、これ運ぶの手伝ってくれる？」

「もちろん。」

「ありがとう。」

満面の笑みを浮かべて彼女は私の大好きな言葉を言ってくれた。

大丈夫だから（後書き）

次回は9月22日です。

空はナオから知りたくなかった事実を聞かされることに・・・。

何で・・・

眩しいライトは今日もきらきら輝き夜道を照らす。

それが当たり前で、それがライトのあるべき姿。

だから人々は気づかない。

ライトが屈んで照らす足元は明るくとも、その背中と頭は夜のままだということ。

それぞれが与えられた場所に、じっと立ち続けていること。

仲間との距離が決して近くはないこと。

雨に打たれてたかれた体にかすり傷を負っていること。

切れたライトが今尚そこに存在していること。

そんなことには誰も気づかない。

みな、ただ前だけを見て通り過ぎて行くだけ。

本当に気づいていないだけなのか。

ひたすら目を逸らしているだけなのか。

いずれにせよ、当たり前の風景は誰の目にも留まらない。

人々にとってライトはもはや背景の一部に過ぎない。

なんと残酷なことか。

一体誰のためにそれが存在しているのか、人々は知っているはずなのに……。

「空！雨野さんが呼んでるぞ。」

次の授業が化学の実験なので、ナオと一緒に教室を移動しようとしていたところ、廊下で不意にクラスメイトに呼び止められた。彼女は入学当初、“魔女”という噂が広まっていたせいかな、同じ学

年の誰もがその名前を知っている。でも今はその容姿からその単語を連想する生徒はいないだろう。呼んでくれた男子がにやにやしながらこちらの様子を眺めているけれど、おれは気にせず彼女の方へ行った。

「ごめんね。時間ないときに。」

申し訳なさそうに眉をハの字にするのがいかにも彼女らしかった。

「どしたの？何か急用？」

こんな近くで話すのは少し久しぶりだったので、なんだか妙に緊張している自分がいる。

「うん、葵ちゃんが私たちに話したいことがあるって言うから、今日の放課後残ってほしいの。」

葵ちゃんというのは、去年生徒会副会長をしていた田々部さんのことで、今年は会長を務めている。成績優秀で容姿端麗、しかもサバサバした男前な性格が人気の生徒会長。それが彼女の昼間の顔だ。そして彼女のもう一つの顔がおれやしくと同じく、この街の夜を守る除影師だ。しずくや海によると夜影退治の腕はなかなかのものらしい。おれは除影師としての彼女にはあまり会ったことがないのでその辺のことは正直よくわからない……。

「えーと、それはおれでいいの？それとも……。」

わざわざ放課後に話すからにはよほど大事な話なのだろう。今おれやしくにとって大事な話というと、除影師としての話しか思いつかない。だとすると夜影退治のときに彼女に出くわしているのは海のほうが多いのだから、それに関して彼女が何か言う相手はおれではなく、海のほうだ。

「たぶん……海のほうがいいと思う。」

「うん。わかった。」

彼女の言葉を聞いておれは肩をなでおろす。正直言うとおれはあの人が苦手だ。というのも、おれが夜道で彼女を見かけて声をかけると、毎回物凄い形相で睨まれて無視されるから。最初はこちらに気づいてなくて警戒していたのだと思っていたけれど、根気強く何回も同じことを繰り返すうちにわかったことがある。どうやら彼女はおれのことを嫌っているらしいのだ。嫌われるようなことをした覚えはないけれど、彼女はしずくのことをとても気に入っている様子なので、彼女と仲が良いおれの存在が気に食わないのかもしれない。

「じゃあ、授業終わったら教室で待ってるね。」

そう言って手を振ってから彼女は体の向きを変え、足早に自分の教室の方へと行ってしまった。振り返ると、先に行っていたと言っておいたはずのナオが階段の手前で待っていた。何だか意味も無く楽しそうに笑っているので嫌な予感がする。

「空は、素敵なおれがいて良いですな。」

一緒に階段を登っていると、いつになく穏やかな口調でしみじみとおれは言った。

「えっ、何言ってるの？別に彼女じゃないよ。」

その言葉に驚いておれは大げさに首を振る。

「嘘つけ。」

「ホントだってば。」

何でおれ、こんなに動揺してるんだろう……。こめかみにじわりと汗をかいているのがわかる。

「この前、仲良く手繋いで帰ってたじゃん。」

何だそれ。絶対何かの間違いだ。だって付き合ってもないのに、手を繋いで帰るとか……ありえないだろ。そうだ、ありえない。おれはしずくに告白もしてなければ、されてもないのだから。

「それ、いつの話？」

「先週の木曜か金曜。」

先週の金曜……うわ、最悪だ。金曜って言ったらあれだろ？海がかおる君の勉強みてやる日じゃん。部活が忙しすぎて勉強なんかする暇なかったからテストどうしようって泣きつかれて、しょうがないからテスト前だけまた家庭教師をやることにしたって、この前言ってたよな。だから、しずくの家まで一緒に帰って、かおる君の勉強みたのは海だ。ということは、しずくと手を繋いで一緒に帰ったのも必然的にあいつしかないわけで……。

「死ねばいいのに。」

「えっ！？何、オレ？」

「あっ違う違う。ナオに言ったんじゃないって……」

あいつに言ったんだ。でも、ナオにはそんなことは言えない。

「あっもしかして、自分に？恥ずかしくてってこと？」

どう言えばいいか迷っていると、彼が良いほうに解釈してくれたので助かった。こういうときポジティブな人っていいな、とつくづく思う。

「うん、まあ、そういうこと。」

そう言いながらもおれは考えていた。何で気付かなかったんだろ
うと……。

何で・・・（後書き）

次回は9月29日です。

ついに、海の正体としくの母との関係が明らかに！

ターゲット

「お待たせー。」

「あつ、葵ちゃん。」

教室の前で待っていると、葵ちゃんが昇降口のほうから小走りにやって来た。体育の授業の後なのだろう。彼女は指定の体操着に身を包んでいる。

「何でお前、体操着のままなんだ？」

その姿を一瞥したと思ったら、海はすぐに背中を向け、そそくさと教室に足を踏み入れながら言った。返事を要求していないときはいつもこうだ。質問はするのに答えは聞かない。

「待たせちゃ悪いと思ってそのまま来たんだから、文句言うな。」
葵ちゃんは例のごとく、海の背中に向かって噛み付くような口調で答える。

「着替えてからでも良かったのに、なんか気を遣わせちゃってごめんね。」

彼女に続いて私も教室の中に入る。

「ううん、良いの。このままのほうが都合がいいから。」

「あ、そうなの？」

「じゃ、どこ座ろうかな？ しずくちゃんの席ってどこ？」

「私はここだよ。」

そう言って私は一番廊下側の後ろから三番目にある自分の席に腰を下ろした。それに続いて海が私の隣に座ろうと椅子を引く。

「じゃあ、私、ここ座ろうっと。お前なんかにしずくちゃんの隣は渡さないだからね。」

まさに彼が腰を下ろそうとした瞬間、海は明らかに顔をしかめた。なぜなら、その視線の先に先ほどまで教壇付近にいたはずの葵ちゃんがちゃっかりそこに座っていたからである。

「変な女。」

面倒くさいと思ったのだろう、彼は軽く舌打ちをしてから仕方なく私の前の席に横向きに腰を下ろした。

「あんたのほうがよっぽど変だったの。この猫かぶり野郎。」
私は一時期この二人は仲が良いのだと思い込んで悩んでいたのだが、実際にそのやり取りを目の辺りにすると、それは勘違いだったのだと思い知らされて過去の自分が嫌になる。

「さっさと本題に入れ、妖怪女。」

顔は無表情ではあるが、私の机の上に置いた彼の腕の先を見るとその苛立ちが目に見えて分かった。左手の中指と人差し指が物凄い速さで交互に机を小刻みに叩いているのだ。それはまるで小さな短距離走の選手が高速で足踏みでもしているように見えた。

「そうだ、こんなやつと遊んでる暇ないんだった。ごめんね、しずくちゃん。」

「ううん、それで、私たちに話したいことって何？」
私は葵ちゃんに向かい合うように座りなおして言った。

「うん。そのことなんだけどね。ちょっと気をつけてほしい人がいるんだ。」

そう言って葵ちゃんは先ほどまでとは打って変わって、真面目な表情で私と海を順番に見た。

「気をつける？」

「気をつけるっていうか……警戒したほうがいいってこと。」

私が聞き返すと彼女は一度目を逸らしてから再びこちらをしつかりと見据えて言った。

「それで、警戒すべき人物とは一体誰のことだ？」

「体育の教育実習生。」

「えっ！それって、なっちゃんのお兄さんだよね？」

その言葉に驚き、私は身を乗り出して葵ちゃんに尋ねる。

「うん、そうだよ。」

どうして冬人さんを警戒しなければならないのだろうか？夜影と何か関係があるのだろうか？その理由がほとんど思いつかず困惑していると、前の席の海が先ほどと一ミリの変化も無い表情のまま口を開いた。

「水橋冬人……。あいつは一体何者だ？」

すると葵ちゃんはしばらく黙って辺りの様子を窺い、自分の椅子を私のほうへ近づけてから静かに言った。

「あの人は、デビルキラーの一員なの。」

「「デビルキラー？」」

聞き慣れない単語に思わず聞き返すと、珍しく海の声と重なった。

「表向きは火凧と同じく夜影退治を主な活動としている組織。でも組織名のデビルキラーっていうのは夜影を退治するっていう意味じゃないの。」

葵ちゃんが最初に言った「表向きは」という言葉が引っかかる。彼女自身もそのことを訊いてほしいといった顔をしているので、私は思い切って尋ねることにした。

「じゃあ、本当はどういう意味なの？」

「彼らが殲滅しようとしている本当のターゲットは、S G R。」

「エスジーアール？」

私はその響きをどこかで聞いたことがあるような気がした。

「スモール・グリム・リーパー。小さな死神。デビルキラーの“デビル”はS G Rのことか。」

私は目の前の葵ちゃんに尋ねたつもりだったが、その答えは隣から聞こえてきた。声のしたほうを向くと、海は椅子の上に乗せた足を両手で抱えて何か考えに耽っているようだった。その綺麗な横顔に私は恐る恐る尋ねた。

「海、S G R……小さな死神って何なの？」

すると彼はしばらく黙っていたが、突然意を決したように脚を下ろして大きく息を吸った。そして私の机に再び手を置き、窓側の柱に向かって話し出した。まるでそこに人がいるかのように。

「S G Rとは、戦争兵器として使用するために人体の改造を施さ

れた人間の子どもたちのことだ。見た目は幼い子どもだが、身体能力は成人男性をはるかに凌ぐ、まさに小さな死神。」

どこか悲しげな横顔が不意にこちらを向く。救いを求めるような、珍しく不安げなその瞳はいつも以上に深い海を映していた。

「――この国では戦争期、身寄りの無い子や貧しい家の子が科学実験で生まれた人間のクローンたちと一緒に政府に売られて人間兵器にされていた。戦争終結時に締結された国際条約で人間兵器の使用は禁止されることになったはずだが……。」

そこまで話すと海は私に向けていた視線を葵ちゃんのほうへと滑らせた。それを合図に彼女が口を開く。

「裏では依然としてS G Rプロジェクトが続けられていた。だからそれを阻止するためにデビルキラーが発足したってわけ。最初は政府に対する反発が原動力になってたみたいだけど、今はどちらかというとS G Rそれ自体に対する恐怖が組織を動かしているって感じね。」

「二人ともありがとう。でも、デビルキラーの一員だからって、どうして私たちが冬人さんを警戒しなくちゃいけないのかな？」

「戦争終結と同時にS G Rは解放されて全国各地に散らばった。多くのS G Rは自分がS G Rだということを隠して今も生き続けているの。でも、やっぱりどこかで自分の能力を発揮したいとも考えるわけ。そこで彼らが活躍できる場所っていうのが闇の社会だった。殺し屋や用心棒、諜報部員なんかね。火凧もその一つ。だって火凧の除影師認定試験は、年齢・性別・職業はもちろん、家柄や経歴も一切問わない、実技一本の試験で合否が決まるでしょ？それに火凧は政府からも国防の一環として重要な組織として位置づけられていて、国から直接支援を受けている団体なの。だからデビルキラーは、

発足当時からこれでもかってくらい火凧に対抗してるんだよ。まあ、戦前からある火凧のほうが歴史も古いし、除影師の質も上みたいだけどね。」

そう言って葵ちゃんは軽く舌を出した。その様子だと事態はそれほど深刻には思えないが、私は彼女がいくらか無理をしているようにも見たのが気になった。

「なるほど。でも、冬人さんが探してるのはSGRだね？ 私たちに関係ないんじゃないかな？」

「関係大有りだろ。」

そこで、しばらく黙って聞いていた海がいきなり私たちの間に割って入ってきた。

「えっ、何で？」

「とぼけるな。お前、薄々気づいてただろう？」

振り向くと海は呆れたような目で溜息混じりに言った。そこには先ほどのまでの愁いを帯びた瞳はなく、いつも通りの、いや、むしろいつも以上に強く引き込まれる真っ直ぐな瞳があった。

「な、何のこと？」

その瞳に気圧されて私の声は裏返る。本当に、この人は何でも知っている。私の考えなんてお見通しなのだ。

しかし分かってはいても、やはり自分で口に出すのは恐かった。そこで私は揺ぎ無い大海原に小船を出す。行き先は波に任せて……。

「俺に言わせるのか……。まあいい、ここではつきり言ってやる。」

無理やり笑顔を作ってみせると、一瞬目を逸らされた。しかし案

の定、彼は私の意向を人目で見抜いたらしい。再び真っ直ぐに私の目を見て言った。

「――お前の母親、雨野恵はS G Rの開発責任者だった。そして、その第一号が俺だ。」

その言葉で私を乗せた小船はちっぽけな島から広い広い海へと船出することができた。全て彼のおかげである。お母さんの死、そして彼女がかつて仕事として行っていたこと。どちらも自分一人の力では受け入れることができなかった。しかし海にこうして諭すように言われると、私はその事実をすんなり受け入れることができた。それはきつと彼の口から発せられる言葉、そしてその澄んだ瞳に嘘、偽りが全く無いからだ。

そうやって私は何度も海に救われてきた。だから、いつか海の心が闇に包まれてしまったときは私が海を救うことができたらいいな、と思っていた。

しかし、後に私は知ることになる。その“いつか”は予想以上に早く到来し、その“闇”は私の想像をはるかに超える深い深い闇だったということを……。

「つまり、あたしたちは完璧に連中のターゲットってわけ。」

ターゲット（後書き）

次回は10月6日です。

偽りの正常

この世の中、知らなくてはならないことはたくさんある。

しかし、それが必ずしも自分の知りたいこととは重ならないのが常である。

机の上に置いた手にはいつの間にか彼女の右手が乗っていた。次第に強く握り締める手とは裏腹に、その顔は青ざめている。何かにしがみ付いていなければ自分を保てなかったのだろう。無理も無い。その細身の体では到底消化しきれない重たい現実の塊を、今しがた口に放り込まれたところなのだから。

俺は体を捻らせ、少し赤みを帯びた手にそっと右手を重ねてやった。すると彼女はゆっくりと顔をあげ、目だけで礼を言った。

目の前で微笑む彼女を見て思う。もしかすると、この人は俺が思っている以上に、強い女性なのかもしれない。それが確信へと変わるのもう少し先の話である。

二人の間に流れる空気を飲み込んで、俺は無言で頷いた。その行為が一体何を意味し、彼女に向けて為されたのかは自分でもわからなかったが、形式上どうしてもその動作が必要だったのだ。

顔を上げると、ちょうどそのタイミングに合わせたかのように妖怪女の声がした。

「つまり、あたしたちは完璧に連中のターゲットってわけ。」

耳から入ってきた言葉の粒は、いたずらに俺の頭の中の内壁を叩く。その粒に混じった不純物を掴み取って俺は尋ねた。

「それは、どういう意味だ？俺としづくがデビルキラのターゲットだと言うのはわかる。しかし、何故それにお前が含まれる？」話の流れからすると、当然“あなたたち”が妥当なところだ。しかし、この女は“あたしたち”と言ったのだ。

「決まってるでしょ？あたしもあんたと同じ人種だからよ。」

そう言って彼女は右手で白いTシャツの袖をまくって見せる。前に出した左腕には、妙に横棒の長いAの上に小さなOとIが彫られていた。

「――上手く誤魔化してるけど、もとは1101って彫ってたの。」

「えっ？それって……。」

その言葉でようやく事態を把握したらしい。しづくがちらりと俺の腕を見た。

「そうだよ。あたし、こいつと同じSGRなの。」

あっさり言い放たれた言葉に面食らっているかと思いきや、どうやらそうではなかったようだ。不意にしづくの手が俺の手からすりりと抜けていき、次の瞬間には、彼女は両手で大事そうに妖怪女の手を取っていた。俺は何故か涙ぐむ彼女の横顔に戸惑いつつも、行き場を失った手から若干の敗北感を味わう。

「ごめんね。私、お昼のとき、葵ちゃんのこと何も知らないのに偉そうなこと言っちゃったよね……。」

「謝ることなんて無いよ。今まで隠してたあたしのほうが悪いんだから。」

そう言って彼女はしずくの涙を拭いて笑った。

「――それに、しずくちゃんはあたしの必要だって言ってくれた。それがどんなに嬉しかったか……。」

この二人が俺の知らぬ間に一体何を話したかは知る由も無いが、この女にとって、しずくは特別な存在であり、しずくも同じように感じていることが見て分かった。

「じゃあ、私、葵ちゃんの力になれたのかな？」

「うん。」

「そっか、良かった。でも、葵ちゃんもつと弱音吐いていいと思う。ううん、むしろ、もっと吐いてほしい。私のこと、もっと頼ってほしい。」

「分かった。ありがとう。」

そう言って女は笑った。それは生徒会長でも、妖怪女でもなく、はたまた1101でもなく、田々部葵その人の笑顔だった。

帰り道、しずくはいつに無く上機嫌だった。しかし、俺はその緩んだ頬に恐ろしく不安を覚えた。今こうしている間にもどこかで俺たちの様子を窺っている人物がいるかもしれないのだ。

「おい、あんまり気を抜くなよ。」

小石に躓いてよろめいた彼女の手を取って言った。

「うん。ありがとう。」

それだけ言って彼女は嬉しそうに再び歩き出す。どうやら、俺の意図したことは違う意味で解釈したらしい。慌てて繋いだ手を少し強めにこちらに引く。不思議そうな顔をして彼女は振り向いた。

「そうじゃない。俺は、お前はもっと自分の立場を考えて行動しろと言ってるんだ。今日、妖怪女が言っていたように、お前は命を狙われているかもしれない身なんだぞ。それが小石一つでよろめいているようじゃ、おちおち一人で夜影退治にも行かせられないだろ。」

ほとんど一息で言い終えると、彼女は悪戯を咎められていじける子どものような顔をして言った。

「わかってるよ。でも……今は海と一緒にいるじゃない。」

「そういう問題じゃないだろ。俺が居ても居なくても、お前は気を張ってなくちゃならない立場なんだ。」

「でも、いつもいつも、気を張ってたら体がもたないよ。無理するなって言ったのは海でしょう？」

「今はあるときとは状況が違うだろ。いつ何時、敵が襲ってくるか分からない。俺が側にいても100%安全とは限らないんだぞ。」

言いつつ、俺は額から冷や汗が滲むのを感じた。このままケンカなんかに発展したら頗る面倒なことになるのは目に見えている。しかし、俺は引かなかった。

「——いいか、俺はお前の護衛係じゃないんだ。24時間一緒にいるなんてできない。」

はつきりとそう言った。きっと何か言い返すだろうと思ったが、彼女は先ほどの威勢はどこへやら、急に黙り込んでしまった。

「……そうだね。私、いつも海に頼りすぎだよ。いい加減、うんざりだよ。」

やっと吐き出された言葉は恐ろしいほど、この心に重たく響いた。こいつには敵わない。ここぞというときに俺の急所を寸分たがわず突いてくるのだ。しかも無意識に。

「お前には、俺がそんなふうに見えるのか？ お前にうんざりしている……。」

声のトーンを下げて、極力穏やかな口調で尋ねる。

「私は、一緒にいられる時間が少しでもあるなら、海のそばにいたい。一分一秒でも長く一緒にいたい。でも、海はそうじゃないんだよ……。」

何故だ。何故そんなに時間にこだわる。わからない。目の前で今にも泣き出しそうな彼女は、一体何に怯え、俺に一体何を求めているのか……。全く検討がつかなかった。

「お前は、一体何にそんなに焦っているんだ？ まるで、タイムリミットがあるみたいに。」

「だって、遅かれ早かれ、海は私の前からいなくなっちゃう人でしょう？ 一人の人間の中に二人の人間が存在するなんて異状だもん。そんなのいつまでも続かないよ。」

異状……。そうか、これは異状というのか。彼女の言い分を酌めば、かれこれ10年は異状が続いてることになる。俺たちの人生の半分以上だ。

しかし、俺は、この状態が正常だと思っている。いや、正常だと自分に言い聞かせているだけなのかもしれない。俺がそう思うことをやめたら、きっと何もかもが崩れ去ってしまう。偽りで固めた正常が、本当に異状になってしまうのだ。

やめろ。考えるな。嘘が嘘だとわかったら終わりなんだ。だから、このまま、このまま嘘を貫くんだ。あいつのためにも、俺のためにも……。

そうやって築き上げた嘘の山は、次第に俺の首を絞めていく。

それでも、息をし続けていたのは、背後に迫りくる大きな闇をどこかで感じ取っていたからなのかもしれない。

偽りの正常（後書き）

次回は10月13日です。

空と海の中で何かが変わる予感・・。

大切な友達

いつからだろう？

あいつの世界が見えるようになったのは。

正確にはわからないけれど、なんとなく、あのときだったと思う。あのとき、おれたちの中で何か大きなものが変わった。

本当は変化と言えるものじゃなかったのかもしれないけれど、おれは確かに気づき始めていたんだ。

自分が誰で、あいつが誰なのかを……。

「今日、傘忘れたから一緒に帰ってもいい？」

6月下旬、本格的に梅雨入りしたある日、おれは嘘をついた。本当は忘れたんじゃない。午後から雨が降ることは承知の上で、持っ
てこなかったのだ。

我ながら卑怯だと思う。でも、おれには彼女の隣を歩くのに理由
が必要なのだ。

おれは、あいつとは違うから……。

「あっ、うん。いいよ。」

少し戸惑いつつもしずくは快く承諾してくれた。彼女が靴に履き
替えるのを待ちながら、どう切り出そうか考える。

「荷物、持とうか？」

小走りにこちらに駆け寄ってきた彼女が右手に提げている参考書
や過去問やらが何冊も入ったトートバッグを見ながら言うと、彼女
は一瞬困ったような顔をしてからそれを左手に持ち替えた。

「えっと、そんなに重くないし、大丈夫だよ。」
なんだか断るのに慣れていないようだった。

「じゃあ、傘はおれが持つよ。」

そう言っておれは彼女の持っていた水玉模様の傘を指す。

「うん。ありがとう。」

彼女の笑顔に多少動揺しながら傘を受け取る。広げた傘は思いのほか小さくて、それに二人が入るのは到底無理そうだったので必然的におれは自分の右半身を濡らす羽目になった。

しかし、そんなことはどうでもよかった。なぜか無言で歩き続ける彼女に、どのタイミングで切り出そうか考えるのに必死だったので、雨の冷たさなんて大して感じなかったのだ。

「この前さ、師匠から聞いたんだ。この腕の印とSGRのこと。」

あと、体育の教育実習生がおれたちの敵だってことも。」

校門を出て二回角を曲がり、最初の信号で足を止めたところでおれはやっと口を開いた。

「……。やっぱり、ショックだった？」

「別に。海はそのこと知ってたみたいだし……。」

「そう。」

「しずくは？お母さんがSGRを作ってたことを知って、どう思った？」

「お母さんがそういう仕事をしていたことは、なんとなく知ってたんだけど、やっぱりショックだったかな……。私の知ってるお母

さんは、優しくていつも笑っている人だったから。」

雨音に紛れて聞こえてくる彼女の声は穏やかで柔らかかった。でも、どこか薄暗いところがあって、それはちょうど頭上でおれたちを見下ろす灰色の雨雲に似ていた。

「……。しずくのお母さんは悪くないよ。仕事だったから、仕方なくやってただけで、自分から好んでやってたわけじゃないだろうし。」

何の根拠もないその場しのぎの薄っぺらい慰めの言葉。今の彼女がそんなものを欲しがっているわけじゃないということはわかっていた。だけど、おれにはそれ以外にかける言葉が見つからなかった。

「うん。そうだよね。」

「しずく。無理しなくていいよ。泣きたいなら、泣けばいいし。」
その白い横顔は一体どこを見ていたんだろう？ 10メートルほど前方の大きな水溜りだろうか……。

「心配してくれるのは嬉しいけど、私は大丈夫だよ。」

だったら、どうして君は唇を噛むんだ？ どうして涙を流しまいと上を向くんのだ？

どうして？

どうして、おれを頼ってくれないんだ？

「……やっぱり、おれじゃ駄目かな？」

「え？」

「顔が同じでも、おれは、しずくにとってはただの友達でしかないんだよ。」

「“ただの” 友達なんかじゃないよ。私にとって、空は“大切な友達だよ。”

やめてくれよ。そんな残酷な単語、何度も言わないでくれ。おれは、君の友達になりたいわけじゃないんだ……。

「ありがとう。でも、大切な友達だって、結局は友達止まりなんだ。」

「友達じゃ、駄目なの？」

「駄目ってわけじゃないよ。でも……。」

「でも？」

「おれ……しずくのこと、誰にも取られたくないんだ。」

ずっと隠していた本音は案外すんなり出て来てしまった。同時に心の堤防が決壊し、溢れでる欲望がおれの体を動かしていく。

彼女の肩を掴んだ右手は紛れも無く、おれの手だった。細腕は硬直して微かに震え、その漆黒の瞳には彼女の恐怖とともに汚い泥の塊が映っていた。

駄目だった。やっぱり、おれには無理だった。

綺麗すぎたんだ。

その髪も、その瞳も、その肌も、その唇も、全部、全部が綺麗すぎた。

そう、それは触れたら一瞬で消えてなくなってしまいそうなくらい、綺麗だったんだ。

だから、恐くなった。

そうして汚い泥の塊は、飲み込もうとした花の美しさに怯えて逃げ出した。

「……空？」

あと1センチというところで、なんとか踏みとどまったおれの顔を見て、彼女はとても苦しそうに言った。

「ごめん。今は、忘れて。おれ、どうかしてた。」

「……。ごめんね。私、空のことは好きだけど、でも。」

「わかってるよ。おれは、しずくの中では友達以上にはなれない。だって、しずくの恋人は、おれじゃなくて……。あいつなんだから。」

「ごめんね。私、気づかなくて。空に、辛い思いさせちゃったよね。」

「これからおれのこと、“大切な”友達だと思ってくれるなら、それでいいから。もう、何もしなくていいから……。そんな顔、しないでよ。」

泣きたかった。でも、泣けなかった。彼女のほうが先に泣き出してしまったから。

やっとおれの気持ちに気づいてくれたのは嬉しいのだけど、でも、それが君をそんな顔にさせるのなら、おれは自分に関する記憶を彼女から丸ごと消し去ってしまいたかった。

大切な友達（後書き）

次回は10月20日です。

しずくにキスをしようとした自分をなぜ止めなかったのかと空は海に問いただす・・・。

二人の立ち位置

「何で、止めなかったんだよ……。」

部屋に戻ったおれは、濡れた制服を乱暴に脱ぎ捨てると、すぐさま机に向かい右手にペンを持って、そう問いかけた。

“お前はしずくを傷つけるようなことは絶対にできない。”

「そんなのわかんないだろ。おれはお前みたいに理性で自分を抑えるなんて、できないんだよ。」

“相手を怯えさせて、自分に幻滅してるような奴に、なにができるんだ？そもそもお前は好きな女をどうこうしたいという欲求より、好きな女の幸せを願ってしまうような奴だ。しずくにはずっと笑っていてほしいから、困らせるようなことはできない。だから告白もできなかったんだろ。優しすぎるんだよ。お前は”

右手は、相変わらず無機質な字をノートに書き連ねていく。次々に生み出されていく文字を丁寧に見て追いながら思う。

違う。自分に幻滅したんじゃない。最初から自分に期待なんかしてないんだから、どちらかというと幻滅じゃなくて、再確認したんだ。自分の汚さを。

でも、きっとお前にはわからない。お前は、おれを根っからのいい子ちゃんだと思っているから。

「おれは、お前のそういうところが大っ嫌いなんだ。おれのことを買いかぶりすぎてる。おれは……お前が思ってるような奴じゃないんだ。しずくが幸せならそれでいいなんて、本当はそんなこと、

これっぽっちも思っちゃいないし、告白できなかったのはフラれるのが怖かっただけだ。結局、おれは自分が一番可愛いんだよ。お前みたいに、自分を犠牲にしてまで彼女の幸せなんて願えない。そういう人間なんだよ。最低なやつなんだよ。おれは。」

バカ。海のバカ野郎。

なんで何も言わないんだよ。“そうだ、お前は最低だ”って、なんでそう言わないんだよ。なんで、黙って右手でおれの頬を拭うんだよ。そういうところが嫌いなんだって、何度言えば分かるんだよ。左の頬から零れ落ちた滴がノートの黒いインクを引き剥がそうとする。あいつの声が水に浮かんで消えそうになるのを見て急に恐くなった。なんだか、あいつ自身がどこかへ行ってしまうそうだったから……。

「――海は消えちゃ駄目だ。絶対、駄目なんだ。だって、どう考えたって、消えれば良いのは、おれのほうじゃないか。」

「ふざけるな。」

それが初めて聞いた彼の声だった。低く、落ち着いた声は、自分と比べるとかなり大人びていて、それでいて思わず身構えてしまうほどの迫力があつた。

「――どいつもこいつも、消える消えない、そればかり言いやがって。そんなこと考えて何が楽しいんだ。」

文字でしか知らなかった彼と比べると、無機質とは程遠い印象を受けた。

「おれだって楽しくてこんなこと言ってるんじゃないよ。」

「とにかく、もう二度とそんなことは言うな。お前には俺が必要で、俺にはお前が必要なんだ。だから、ずっと二人でやってきた。それが普通だったんだ。」

普通か……。こいつにとっては普通だったんだろう。でも、おれにとっては全然普通じゃない。だって、お前の存在を知ったのだったほんの一年前だし、おれはそれまで自分の中にもう一人の人格が存在しているなんて全く知らなかったのだから。

「一つ、聞いてもいい？」

「何だ？」

「おれにお前が必要だってことは分かるんだけどさ、お前におれって必要なの？」

「……。」

途端に右手の動きが固まる。彼にとって都合の悪い質問だったのだろう。

「おい。何か言えよ。」

机の上に下ろされた右手に向かってそう言うと、彼は拳をぎゅっと強く握ってから答えた。

「俺は、何度もお前に助けられている。きっとこれからも、それは変わらない。」

「前もおれに借りがあるとかなんとか言ってたけどさ、おれはお前に貸しを作った覚えは無いよ。」

「覚えていないだけだ。」

「本当は借りなんか無いんじゃないの？」

「ある。」

「じゃあ、どんな借りか言ってみろよ。」

「それは言えない。」

「何で？」

「何でも」

こうしておれたちはペンを使わずとも話をできるようになったのである。

初めて彼の存在を知ったとき、海はおれへの手紙の中でこう言っていた。自分はおれの後ろに立っていて、おれは決して振り返らないから自分の存在に気づかないのだと。

でも、本当にそうだったのだろうか？

それが嘘だったということにおれが気づくのは、もっと先の話だけれど、このとき確かにおれは気づいたのだ。

今、あいつはおれの隣にいる。

二人の立ち位置（後書き）

次回は10月27日です。

しずくとその弟がおるに迫る黒い影。

反逆者の娘

私は知らぬ間に空を傷つけていたんだ。それは昨日今日の話ではなく、ずっと前からだったのだろう。どうして気づかなかったのだろう？ そんなの簡単だ。彼がずっと笑っていたからだ。

私にはそんなこと到底できっこないし、きっと海にも無理だろうと思う。あの人は心が顔に出やすいから、本当に嬉しいときは笑うし、本当に悲しいときは泣いてくれる。だから私も一緒に笑えるし、泣ける。でも、空は違う。本当に嬉しくなくても笑ってくれるし、本当に悲しいときでも人前では決して泣かないのだ。

いつでも晴れの空。ときにはその顔が曇りになることもあるけれど、雨になることはない。たとえどこかで黒い雨雲がもくもく膨れ上がっても、風がどこか遠くへ吹き飛ばしてしまうから、空はずっと青いままなのだ。

あの日風が吹き飛ばした雨雲は、私の真上にやってきて雨を降らした。

だからあの涙は私のものじゃない。あれは空の涙だった。

「前期の成績、ずいぶん良かったじゃない？ 私びっくりしちゃった。」

8月半ば、1・2年生は三者面談があり、ドイツに赴任中で参加することができない父の代わりに私が保護者としてかおるの面談に出向いた。珍しく姉弟そろって帰ることになり、並んで歩きながら私は言った。

「家庭教師が優秀だからね。」
かおるは竹刀の入った紺色の袋を振りながら答える。かなり上機嫌だ。

「通知表、海にも見せてあげたら？ 喜ぶと思うよ。」

「いいよ。ちょっと良い成績取ったからっていい気になるなって叱られそうだし。」

「確かに。でもお父さんにはちゃんと手紙で送るからね。」

「げ。」

「何か問題でも？」

成績自体には問題ないのだが、かおるは他の生徒に比べると遅刻が多い。朝練が長引いたり、連日の練習疲れで寝坊したりというのが主な原因で、それは私も知っていることなので特に注意はしていなかったが、父は昔から時間厳守がモットーなので確実にお咎めが待っているだろうと容易に予想できた。

「だって……。そ、それよりさ、父さんの夏休み、今年は遅めに回ってくるんだっけ？」

案の定、かおるは焦って話題を変える。

「この前電話で聞いたんだけど、今年は8月の終わりから9月の頭までだって。」

ドイツでは夏休みを州によって少しずつずらすという習慣がある。渋滞や観光需要が集中するのを防ぐためらしいが、年によって帰省時期が異なるのは出迎える側としてはなかなか面倒である。

「へー、じゃあ今年はわざわざ一日だけ帰ってこなくていいんだ。」

「そうだね。バタバタしないでゆっくりお墓参り行けるね。」

9月3日。それは母の命日である。その日だけは私たちは学校を休み、父も休みをとって一家三人揃ってお墓参りに行くのだ。風が吹こうが雨が降ろうが、絶対に三人揃ってお母さんのところに挨拶に行く。それが我が家のルールである。

「うん」

弟の返事を聞くか聞かないかというところで突然前方に黒い影が現れた。

私は一歩前に出て様子を窺う。どうやら夜影ではなさそうだ。燃えるような紅い瞳はなく、耳鳴りもしない。

しかし、妙に重苦しい空気が辺りを包む。静かに歩み寄ってくる相手。私は反射的に左手を挙げ、弟を後ろに下がらせた。

「私たちに何か御用でしょうか？」

「……ぎゃく。」

「え？」

よく聞き取れずに聞き返すと、相手は静かに且つすばやく私たちの目の前まで近寄ってきた。

黒いズボンに黒いパーカーのフードをすっぽり被り、手には黒い手袋。明らかに怪しい。変質者かと思ひ私は身構えた。

「俺の親父は反逆者に殺されたんだ。」

掠れた低い声。それだけで妖怪じみた雰囲気醸し出していたが、

身長の高さとその体格の良さからすると、さほど年齢の高い人物ではないようだった。

「あの、何の話ですか？」

全く意味が分からない。その話と私たちに一体何の関係があるというのだろうか？

酔っ払いの戯言かとも思ったが、顔を見上げると前髪の下から真っ黒の大きな瞳がこちらをじっと見つめていた。只ならぬ気配を感じた私が後ずさりすると同時に相手が再び口を開く。

「お前は反逆者の娘だ。」

彼の言葉を整理すると、私は彼の父親を殺した“反逆者”の娘、ということになる。

しかし、反逆者などという単語にはどうもピンとこない。

「何を……言っているんですか？」

「雨野恵。お前らの母親が俺の親父を殺したんだよ！」

一瞬何を言われたのかわからなかった。彼の叫ぶ声と同時に何かが割れる音がしたからだ。耳を塞ぎたくなるような嫌な音だった。実際にはそんな音はしていなかったと思う。しかし、私は体の奥から強い振動が伝わってくるのを感じた。

「……。私たちのお母さんが、あなたのお父様を殺したと、そう言いたいのですか？」

「そうだ。お前らは人殺しの子だ。」

寒気がした。その一言で途端に体が動かなくなった。人殺し。人

殺し。人殺し……。

何度も反芻される言葉。その恐ろしい響きは私の頭の中にふわりと舞い上がると、嘲笑うかのように急降下して容赦なく胸に突き刺さる。

「姉ちゃん。この人誰？母さんが人を殺したなんて、そんなことあるわけないじゃん。」

かおるの声。聞こえているはずなのに、私には聞こえなかった。

「殺したんだよ、あの女は！陸軍中将だった俺の親父を、S G Rを使ってな！」

「何？それ……。」

男と弟の言葉がもはや蠟人形と化した私を通り抜けて交わされる。

「知らないのか？お前の母親は自分が手がけた人間兵器に殺しを命じたんだよ！それもわずか7歳の子どもに！」

「嘘だろ……。」

「そんな残忍な反逆者の子どもなんか生かして置けるか！今ここで死ね！！」

そう言って彼はパーカーのポケットから包丁を取り出し、私たちに向けた。

辺りは真っ暗なはずなのに、私の頭の中は真っ白だった。

反逆者の娘（後書き）

次回は11月3日です。

黒い影の正体が明らかに！？

復讐者

「今ここで死ね!!」

男が興奮した様子で叫んだ。恐る恐る姉の背中から顔を覗くと、男が服のポケットから何かを取り出してこちらに向ける。じりじりと歩み寄る男が震える手で握っているものが月明かりを反射して冷たく光る。鋭い光線がぼんやりしていた僕の頭に切り込みを入れ、これは現実だと静かに告げる。

「姉ちゃ……」

緊張した喉からは上手く声が出なかった。きっとこういうときは、意識的に何かしようとしても無駄なのだ。

「あなたは、それでいいんですか？」

ずっと黙っていた姉が不意に口を開き、静かに言った。やけに落ち着いた声に驚きその背中を見ると、いつの間にか自分の手が姉のワイシャツの裾を掴んでいた。

「――それで満足できるんですか？」

そう言って姉は一步踏み出す。今、姉は一体どんな顔をしているのだろうか？逃げるどころか、逆に寄ってきた姉を見て男がうろたえた様子で言った。

「あ、当たり前だろ。お前らが死ねば、俺はそれでいいんだ。」

「私たちのお母さんが処刑されても、あなたは満足できなかった。そんな人が、私たちを殺して、それで満足できるんですか？」

ああ、僕はこの背中を知っている。もう背丈は同じくらいだとい

うのに、たぶん僕はこの人を一生掛かってでも越せないんだろうな。悔しいけど、僕はいつまで経っても弟のままだ。

「いいから死ねよ！頼むから、大人しく死んでくれよ！」

緊張で狭まった喉から出る男の声は、同情したくなるほど掠れていた。

この人は本当に悪者なのだろうか？僕にはそうは見えなかった。もしかすると、姉もそうだったのかもしれない。だからこそ、あんなことが言えたんだ。

男の声は夜の空気に食われて一瞬で消えた。ぞっとするほど深い闇が辺りを包む中、姉が静かに拳を握る。

僕はてっきり力を使うのだと思った。姉は自分のために力を使わない。だけど、大切なものを守るためなら、そのせいで自分が魔女と呼ばれて蔑まれることなど考えもせず、力を使う。

そういう人だから、きつと力を使って彼の包丁を取り上げてしまおうと思った。

でも、姉はそうしなかった。できなかったんじゃない。やろうと思えばできたはずだ。でも姉はあえてそれをせず、その代わりに、ゆっくりと大きく息を吸って、力いっぱい叫んだ。

「殺したければ殺せばいいでしょ！」

目の前の人が張り上げた声は、真っ直ぐで力強い、まるで僕の知らない人の声みたいだった。

「——こんなちっぽけな人間の命で、あなたやその家族がずっと抱えてきた苦しみや悲しみ、私たちに対する怒りや憎しみ、その全

てが消えて無くなると言うのなら、私を殺せばいい。でも、その代わり、弟には手を出さないと約束してください。」

耳を真っ赤にして捲くし立てる姉の後ろで、何か言わなきゃいけないと思ったのだけど、体が声の出し方を忘れてしまったかのように、僕はその場に突っ立っていることしかできなかった。

「お兄ちゃん!!」

そのときだった。突然男の後ろから人影が現れた。顔はよく見えなかったが、短いスカートをはいたショートカットの少女だった。振り返った男が驚いたように肩を震わせて叫ぶ。

「お前、こんなところで何やってんだよ!」

「それはこっちの台詞だよ!! バカ!」

少女は男の持っていた包丁を引ったくり、空いているほうの手で思い切り彼の頬を平手打ちする。ばちん、という鈍い音がして男が頭を垂れる。

「……なんでだよ。なんで止めんだよ! 夏子!!」

男がものすごい勢いで言い返す。その声を聞いた瞬間、姉の体がびくりと動いた。

「だって、こんなのおかしいじゃん! どうしてお兄ちゃんが人殺しになんなきゃいけないのよ!」

男に負けじと大声で応酬する少女をよく見ると、どこかで見たことのある顔だということに気づいた。姉と同じ柄のスカートからすると、おそらく同じ学校の生徒だ。

「じゃあ、教えてやるよ。お前が仲良く飯食ったこの女はな、父さんを殺したやつ娘なんだよ!!」

姉を指差して叫ぶ男の声に、少女が黙り込む。同時にそれまで二人のやり取りを黙って見ていた姉が、徐に首を曲げ下を向く。

ああ、最悪だ。今の一言で、姉の貴重な友人が一人消えた。僕は無神経な男に憤慨し、悲しくなった。しかし、それ以上に、姉に何もしてやれない自分が情けなくて腹が立った。結局、僕は助けてもらってばかりで、姉に何も返せていないじゃないか。

じゃあ、今の僕にできることは何だろう？ 思い浮かんだことは一つしかなかった。姉のシャツから手を離し、僕は彼女の手首を掴んだ。逃げよう。早くここから逃げよう。そう思って、強張った姉の手を引いたときだった。

「……知ってたよ。そんなの、言われなくても知ってた。」
少女が静かに言った。

「おい、じゃあ何でお前……」

「だって、委員長には関係ないじゃん！ お母さんがやったことまで子どもが責任負わなきゃいけないなんておかしいよ！」

その声に姉がはっと顔を上げる。視線の先に見える少女は、顔を歪めながら必死に男に語りかけた。

「――それに……委員長は良い子だよ。何でも相談乗ってくれし、他の子みたいに誰かの悪口言ったりしないし、嫌がらせされても誰も責めない。本当に……良い子なんだよ。たとえ本当に委員長のお母さんがお父さんを殺した人だったとしても、そんなのどうでも良いやって思えるくらい、良い子なんだよ」

「……なっちゃん」

姉の手が僕の手から抜けて自分の頬を拭う。やっぱりこの人は泣き虫だ。

「だから、復讐なんてやめて。お母さんも、そんなの駄目だって何度も言ってたし、余計に苦しくなるのはお兄ちゃんなんだから。」

「……わかったよ。お前がそれでいいなら、もうやめる。」

少女が男から奪った包丁を見下ろしながら彼は悔しそうに言った。終わった。これでやっと帰れる。そう安心した僕が甘かった。

そう、彼は少女の隙を見て包丁を奪い返したのだ。そして瞬く間に少女を突き飛ばして言った。

その声は先ほどとはまるで別人のように優しく、穏やかな声だった。

「ごめんな、夏子。やっぱり俺、先に父さんのところ行くわ」

男が握った包丁の刃先が向けられていたのは彼自身だった。

復讐者（後書き）

第二章、第一話はこれにて完結です。

お話はまだまだ続きますが、誠に勝手ながらこれから一ヶ月ほど休載することしました。

そういうわけなので、次回まで少し間が空きますが、気長にお待ちいただけると嬉しいです。

それでは、また！（△▽、＃）ノ

流星と鳴き声

「そういえば、水橋冬人、デビルキラー辞めたみたいよ。理由までは知らないけど」

丁寧は剣を鞘に収めながら彼女は言った。つい先ほど退治した夜影の黒い羽根がまだ辺りに飛び散るなか、動揺を誤魔化すように私は夜空を見上げて言った。

「そうなんだ。葵ちゃん。それ、誰から聞いたの？」

「それは秘密。でも、よかったんじゃない？ あたし、あの人は教師のほうが合ってると思うし」

彼女がどこまで彼のことを聞いているかは定かではないが、この言い草からすると、あの夜に起こったことは、まだ彼女の耳に入っていないのだろう。

「うん。そうだね。冬人さんは、きっと良い先生になるよ」

私はあの日のことを思い出しながら、夜空の星に向かって呟いた。

“ やっぱり俺、先に父さんのところ行くわ ”

微かに微笑んで彼は包丁を自らの腹につき刺した。

突き飛ばされて尻餅をついていた妹が悲鳴を上げる。

膝が碎けて倒れ掛かった彼の体をなんとか間に合って受け止めると、力の抜けた腕がだらりと垂れた。

ゆっくりと大きく息を吸い、私は彼を地面に寝かせてそっと包丁を抜く。

なっちゃんが泣きながら這うようにして近寄ってきた。

言葉になる前に彼女の口から出てきてしまった声は、確かに兄を呼んでいた。

湿った黒いパーカーを捲ると、闇の中に一際鮮やかな赤が姿を現す。

傷口に手をあてて、私は念じた。いや、祈ったと言うべきかもしれない。

とにかく、私は心の中で必死に叫んだ。

お願いだから、死なないで。死なないで。死なないで！

そのときだった。

意識を失っていると思われた彼が、その青白い手で私の手首を掴んだのだ。

「や、めろ」

搾り出された声が空気を微かに振動させる。

「嫌です！」

私はその声を見殺しして力を使い続けた。

「俺が、死ねば……お前の敵、一人、減るんだぞ。」

「敵なんかじゃないです。だって、本当の復讐者なら、迷わず私たちを殺すはずですよ。でも、あなたはそれができなかった。優しい人だから。たとえば、どんなに憎い相手でも、殺すなんてできなかった。そうでしょう？」

彼は、一体誰のために、ここまで自らを追い込んできたのだろうか？ 私には分からなかった。

「俺は……今まで、復讐のためだけに生きてきたんだ。でも、復讐はもう終わりだ」

「じゃあ」

「だけど、復讐っていう目標がなくなった今、俺にはもう生きる理由がないんだ。だから、頼むから、このまま死なせてくれよ。もう、疲れたんだ」

念じれば目の前の傷口は塞がっていく。だけど、私はこの人の心に刻み込まれた深い傷を消すことはできない。そう。私ができるのは所詮、そんなものなのだ。表面上の傷を治すことしかできない。無力。今の私はまさにそれだった。

特別な力があるうと、救えるものが何もないければそれは無いに等しいのだ。

「お兄ちゃんの馬鹿！何が疲れただ！こんなところで、可愛い妹を置いて死ぬなんて、絶対、絶対許さないんだからね！」

何も言えず、冷凍されたように硬直していた私の体を溶かしたのはなっちゃんだった。

兄の力ない手を取って彼女は訴えた。火傷しそうなほどの熱を帯びた言葉。それはまるで彼女の思いの全てを一つの鉄球に固めたように硬く、重かった。

こんなものを投げつけられたら、普通の人間はひとたまりも無い。しかし、彼はそれを優しく包み込むように受け止めた。

彼の手が私の手首からゆっくりと離れ、ぽろぽろと涙が流れ落ちる彼女の頬に優しく触れた。

「お前って、本当にしょうがねえ妹だな」

あの時の二人の表情を思い出して、私は胸がいつぱいになった。その横で葵ちゃんが不意にあつと声を上げる。彼女の視線の先に目を向けると、白い星が尾を引いて優雅に夜空を流れていった。

そして流星が夜のカーテンに包まれて消える頃、突然、誰かが痛いと言った。

いや、叫んだのだ。

泣くように、それは喚いた。

いや、もはや言葉でもなかった。

ただ、痛いと聞こえた。それだけのことだ。

客観的に表現するならば、それはきつと鳴き声というのだろう。

そう、それは獣の鳴き声のようだった。

何かに呼ばれるように私は走り出した。

葵ちゃんが背後で何か言ったようだが、振り返らなかった。

強く私の足を引く見えない糸に導かれるように、私はひたすら走った。

何も考えていなかったのに、不思議と迷わなかった。

目的地はわからない。

ただ、そこに何が待っているのかはわかった。

角を曲がると、そこに人影が見えた。

血を塗りつけたかのような髪が特徴的な少年だった。

果てしなく続く闇を閉じ込めたような黒い瞳が見つめる先。

そこには私を呼んだ声の主が倒れていた。

流星と鳴き声（後書き）

お久しぶりです！

次回は12月8日になります。

まだまだ先は長いので、今後とも気ままにお付き合いいただけると嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0203m/>

いつかどこかで

2011年12月1日21時55分発行